
アイデア

白銀

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

アイデア

【Nコード】

N2418A

【作者名】

白銀

【あらすじ】

今まで過ごして来た世界は偽りだった。唐突に崩壊する世界の中、純とその親友の隆一は隠されていた本当の世界に触れる。その真実は、二人に別々の道を歩ませていく。純は、生き残るために戦う人達と出会い、そこに身を投じる事を決める。隆一は、純達を敵とする者達に触れ、自らの意志に従って動き始める。別たれた二人が再び交錯する時、世界は変革の時を迎える　！

アイデア

序章 「変わる事のない日常」

序章 「変わる事のない日常」

目の前にあるのはマンションの扉。そこに彼は辿り着いていた。
「ただいま」

奈義 純はそう言って扉を開け、中へ入った。手提げの鞆は高校
通学用のもの。服装は私服校のためにワイシャツと安物のズボン。

「おかえり、純」

出迎えの声は母、美津子のもの。

母とは言っても、彼女と純は血縁ではない。義母だ。勿論、純の
名字は美津子と同じものだ。

彼女が家族に加わったのではなく、純が美津子達、奈義家に拾わ
れて育ったのだ。そのため、本当の名字は判らない。ただ、純と言
う名前だけは本物で、捨てられていた箱の中に入っていた紙に書か
れているものだ。

「敦也は……まだみたいだね」

玄関の靴を見て、純は呟いた。

通う高校が違えば、校舎の位置も違う。家に着く時刻も変わって
くるのは当たり前だ。

「今着いたよ、ただいま」

背後からの声に純は振り返った。

そこには手提げの平たい鞆を握った右手を肩に乗せた敦也が立っ
ていた。黒い上下の制服の第一ボタンは外され、下のワイシャツの
第一ボタンも外されているのが見える。茶色に染められた短髪を、
空いている左手で掻き、敦也は靴を脱いだ。

「何か変わった事あった？」

既に靴を脱いでいた純は、敦也に問う。

「んー、変わらないな、特に」

アイデア

敦也は肩を竦めて答えた。

「俺の方も」

純はそう言っただけで軽く溜め息をつく。

そうして、廊下の脇の自分の部屋の扉を開けて中に入った。マンションであるがための、小さな部屋には、勉強用の机とベッドが一つずつ。

部屋の中で、純は持っていた鞆を机の脇に置き、ベッドに腰を下ろして背伸びをした。

なんだかなあ……。

後ろに倒れ、純は溜め息をついた。

今まで何とも思っていなかった毎日が、最近は酷くつまらなく感じている。ただ、淡々と『いつも通りの日常』を繰り返しているような気がした。朝起きて、学校へ行き、授業を受けて帰宅し、食事や会話等をして、眠る。

いつごろだろうか、今まで考えもしなかった事を考えるようになったのは。高校への進学は、両親の負担が少ないと思われる下のランクの私服校。そこへ行った事で、生活に余裕が出来たためだろうか。それとも、それとは関係なく、純が現状に余裕を感じるようになったためか。

それが精神的な成長だとするならば、つまらないものだと思はれる。今の日常生活は幸せなものはずなのに、満足出来るはずのものだというのに、それを物足りなくしてしまうのだ。

「俺、どうかしちゃったのかな？」

日常と違う刺激が欲しいのではないし、ましてや日常を崩してしまふような事態に遭遇したのではない。

いつごろかは判らないが、純は違和感を感じるようになっていた。

「敦也、純、夕飯出来たわよ」

「あいよ」

「今行く」

敦也に一瞬遅れて返事をした純は、身を起こすとベッドから立ち

上がって部屋を出た。

ダイニングルームでは美津子が夕食を盛り付けていた。そこには三人分の食事が盛り付けられている。父、純にとっては義父である達雄は約一時間後に帰宅するため、平日は純達とは食事の時間が合わない。一時間後に帰ってきた達雄は、美津子と雑談しながら夕食をとるのが日常だ。

(……考えても仕方がないんだけどな、こんな事)

その場にいる二人に気付かれないように溜め息をつき、純は窓に視線を向けた。

そして、ご飯を美津子から受け取り、純は食べ始めた。

第一章 「崩れ去るもの」

第一章 「崩れ去るもの」

その日は朝から雨が降っていた。

純はいつも通り、安物のズボンと白のシャツに、紺色のジャケットを着て登校した。学校では、授業内容は違うものの、いつもと変わらない雰囲気、純は内心溜め息をついた。窓の向こうの空は曇り、街を暗くしていた。雨音はその寂れた雰囲気を引き立てる。

「……何だか、静かだな」

昼休み、親友の隆一が囁いた。呟いたのではなく、明らかに他人に聞こえぬよう、純に向けてだけ言ったのだ。

水無瀬 隆一は純と最も仲の良い友人だ。適当な髪型は適度な長さで、動きやすい服装をしている。

既に二人とも食事は終え、昼休みの残りの時間を過ごしていた。

「……そういえば、何となく」

純は小さく頷いた。

窓から眺めた街の風景は人影一人なく、閑散としていた。いつもならば数台は車が通るはずの道路にも朝から誰も通らず、鳥や猫等の動物も見掛けない。これは少し異常な光景ではないのだろうか。

「……」

純は教室内に眼を向け、息を呑んだ。

今まで教室内にいた生徒達が一人残らず消えていた。隆一唯一人を除いて。

「……音、しなかったよな？」

隆一が呟く。声が震えているのは、その現象に対する得体の知れない恐怖感からだ。

純も同じ事を重い、その異常さに恐怖を感じていた。

何かがおかしい。

普通に考えて、教室にはスライド式のドアがあり、開ければ小さいながらも物音がするものだ。誰かが教室から出て行ったのであれば、すぐに判るはずだ。

そして、数分前までは確実に生徒がいたというのに、今は全員がいなくなっている。教室内のものの配置は変わっておらず、誰かがそこを使っていたと思われるような机や椅子の傾きは見受けられるのが、余計に恐怖心を煽った。

純は席を立った。隆一もそれに続き、教室から廊下へと移動する。

「む、奈義？」

「あ、先生」

廊下に出た直後、一人の教師と鉢合わせになった。教師である事は間違いないのだが、名前が思い出せない。元々、純は教師の名前を重要視しておらず、記憶に留めていなかった。

「皆、消えたみたいなんですけど、これは……？」

隆一がさかさず尋ねた。

教師と鉢合わせになったのだから、蒸発したというわけではないだろう。よくよく周囲を確認すると、他の教室にも生徒の気配はない。目の前の教師は何か知っているのだろうか。

「ああ、準備ですよ」

教師はうつかりしていたとでもいうように笑みを見せ、頷きながら答えた。

「準備って……？」

隆一は周囲を見回しながら教師に問う。

一体何の準備なのか、何故こんなにも急に生徒が消失しているのか、どうして純と隆一だけが残ったのか。疑問が山積みになっている。

「イレギュラーを始末する、ね」

言うなり、教師の右腕が鎌になり、振り上げられた。

それは、まるで腕が砂で出来ているかのように形が崩れ、鎌の形へと再集結した。色も変わり、鉄、金属のような光沢を放つ刃を持

った鎌になっている。

「！」

命の危険を直感的に感じ取り、純は後ずさる。隆一も目を見開いたように緊張を顔に浮かべ、一步、後ろに踏み出していた。

「イレ…ギユラー…:…?」

純は呻くように呟いた。

何の事だか解らない。心拍数が上がり、全身が竦む。冷や汗が頬を伝っていく。

「奈義、お前の事だ」

邪悪な笑みを浮かべ、教師は一步踏み込むと同時に鎌を振り下ろした。

後ろに下がろうとして、しかし竦んだ体に思うように足を動かさず、純はバランスを崩して尻餅をついた。

その目の前を鎌の刃が通過し、開いた脚の間に突き刺さった。食い込んだ刃に、純は言葉を失い、また更なる恐怖に目を見開く。転んでいなければ確実に頭を切り裂いていた軌道だった。息を呑む純を、隆一が掴んだ。

「純、逃げるぞ！」

そう言っただけ強引に純を立たせた隆一は、そのまま純の腕を引きながらすぐ脇の階段を駆け上る。純もそれに何とか気を取り直し、隆一と共に階段を駆け上がった。

「逃さんぞ！」

教師の声が背後から聞こえ、階段を駆け上がる足音が聞こえた。

「隆一、消火器だ！」

「おう！」

純は二階から三階へ上る階段の途中に置いてある常備用の消火器を指差した。それに隆一は即答し、掴むと、振り向き様に、階段を駆け上って追ってくる教師に向けて投げ付けた。遠心力によって加速された消火器は回転しながら教師の顎に直撃し、不意打ちを喰らった教師は階段を転げ落ちていく。

純と隆一はそれを振り返る事もせず三階に上り、廊下を走った。今、二人がいる校舎は三階が最上階だ。このまま向かいの階段を下りて外に出るのが得策だろう。もっとも、最初に階段を上って逃げた時点でそうするしかない。

（何なんだ、一体……！？）

純は心の内で呟く。

生徒のいきなりの消失に、腕が変化する教師。普通に考えても、腕が変形する人間等是有り得ないはずだ。最先端の科学技術と仮定しても、それ程の技術力がある等とは聞いた覚えがない。そして、教師の口にした『イレギュラー』という言葉。

純と隆一だけが周囲から取り残され、何かに巻き込まれているのだという事は判った。

「！」

と、突然横の扉が開き、一人の男が顔を出した。

純と隆一は慌てて走る向きを変えようとしたが、顔を出した男の手招きにそれを止めた。

「二人とも、早く中へ入れ」

言つと同時に二人ともその男のいる教室に飛び込むようにして転がり込んだ。

信用出来るかどうかは怪しいが、そうする以外に手はなかった。他の教師も、先ほどの鎌の教師のように、化け物だったとしたら、純を殺そうとしてくるのである。向かいの階段を下りた先で待ち伏せしている事も十分に考えられた。そして、道を引き返しても、先ほど消火器をぶつけた教師が、気絶していなければ待ち受けているし、もしかしたら別な増援が来ているかもしれない。もっとも、瞬間的な決断をしなければならぬ状況だったのだ。

「……危ないところだったな」

部屋の扉を閉じ、男は二人に向けて呟いた。

二人は呼吸を整えながら男へと視線を向けた。

「一体、何が起きてるんだ……？」

一足早く呼吸の整った隆一が男へ質問する。

「どうやら、本当に水無瀬君には知らされていなかったようだね」

「……？」

男の言葉に、純は隆一に目を向け、次に男に向けた。

知らされていないのは純も同じだったはずだ。それなのに、彼の言葉は隆一のみ限定されていた。

「単刀直入に言おう」

男は一息おいてから、続きを告げた。

「純、君は周囲の人達と違う」

「……おい、そんな事はないだろ。周りがおかしんじゃないのか？」
男に対し、隆一は言い返した。

周囲の人達が違うというのは明らかだった。先ほどの手を鎌に変えた教師は明らかに普通の人間とは思えない。

「そうだな、周りがおかしくなってしまった。だが、その異常な周囲の中で、純、君は普通だ」

それは逆説だった。

周囲の全てが等しく変化を起こせば、その変化に取り残されたものが異常なものになる。そういう事なのだ。

「現在、普通に生きている人間は、皆、純粋な人間ではない。カルマというナノマシンが体に浸透し、体の構造を変える事が出来るようになってしまっている。その世界の中で、君はカルマを持たない純粋な人間だ」

その言葉に、純と隆一は息を呑んだ。

話が大き過ぎて現実感がないのに、認めざるを得ない事実がある。先ほど襲ってきた教師は体の構造を変えた。それは明らかに現実のものだったのだ。

「カルマは生物の細胞に入り込み、その細胞の構成要素と同化する。そして、その持ち主の意思を指令として、体の構造を改変させる仕組みだ。このカルマは細胞内で余分になった養分を分解し、自らのコピーを増やし、更には遺伝する」

男はそこで手近な机に腰を下ろし、溜め息を一つ。

「何の目的で造られたのかは知らんが、一つ解っている事がある。

それは、カルマを持たないものが異常者とされ、殺されている。それも、何かしら組織的な行動でだ」

「……それで、俺が狙われてる？」

恐る恐る尋ねる純に、男は頷いた。

「無論、カルマを持たぬ者も組織を作って抵抗している。私はその一員で、君を助けに来た」

その言葉で、室内が静まり返った。

「助けに……？」

純は呟いた。

信用してもいいのだろうか、判らない。襲われたのだから、既には危険であり、目の前の男が嘘をついている可能性だって十分にあり得るのだ。簡単に信用してしまうのは危険だと、意識のどこかが囁いている。

「すぐに信用して貰えないのも解るが、このままここにいるのは危険だ」

「それで、どうするんだ？」

今度は隆一が問い質した。

「君は私達の組織に来て貰った方が安全だ、そして、それから君は色々と教わり、判断を迫られる」

「判断……？」

純は眉を潜めた。

「……俺は、どうなる？」

隆一の言葉に、純ははつとして視線を向けた。

今までの全ての説明は純に対してのみ行われていた事に、今になってようやく気付いた。それは、隆一が純とは違う事を示しているのだ。

「残念だが、君を連れて行く事は私には出来ない。私が今、ここに来ているのは、純君を救出するためであり、それ以外の権限は与え

られていない。知らされていなかったとはいえ、君は間違いなくカルマを持っている。連れて行くのは危険が大き過ぎる」

男は率直に答えた。

「カルマを持つ者達は、情報統制等様々な隠蔽工作の上で生活しているが、確実に意識は統一されている。カルマがナノマシンであるために、その身体感覚として他の者と情報交換していると考えられているが、とりあえず、遠隔洗脳される可能性や、巧妙な芝居という事も考慮しなければならぬ。我々としては、我々の組織の場所が漏洩する事だけは絶対に避けねばならないんだ」

「 そうだな、確かにその通りだ」

隆一はその説明に頷き、呟いた。

「君に安心出来る確証がない私には、君を連れて行く事は出来ない」
「……そんな」

純は小さく呻いた。

知り合いのいない場所に放り出される事は、想像以上に寂しいものだ。隆一は信用出来るのではないか、純にはそう思えた。

「純、俺は残る。ここで色々知って、そして決める」

「本当に……？」

隆一の決断に、純は確認を求めた。

「考えてもみろ、狙われたのは純だ。外の静けさがお前を狙ったのものであれば、お前の知り合いは全員敵だ。そんな状況で俺だけを信用しない方が良い」

その言葉に、力なく純は頷いた。否、頷くしかなかった。

隆一自身が決めた事であり、それは他人がどうこう言えるものではない。そして、その内容も正しい。

クラスメイト全員が化け物で、教師や町の人々全てが純を殺そうとしているのだ。恐らく、家族ですらも。

そんな中で隆一だけを信用するというのは、純にとって致命的なミスとなりかねない。もし、巧妙な罠として隆一自身も何も知らないのだとすれば、純が救出され、辿り着くであろう組織の場所が漏

洩す事となる。それは、そこに居る者達全員の命を危険に晒す事だ。

「じゃあな、純」

隆一はそう言っただけで部屋から出て行った。

「亜沙、目標を保護した、これから学校を脱出する。援護を頼む」

男は携帯電話とは違う、無線機のようなもので誰かと交信すると純に向き直った。

(あすな…？ 援護…？)

他に仲間がいるのだというのは判った。だが、援護とはどうするのだろうか。まともに戦って、カルマというものを持つ人間に勝るとは思えないのだ。

「彼の前では情報漏洩を危惧して名乗れなかったが、私は三条 大和と言う」

そう言っただけで名乗った男は、周囲に警戒しつつも、部屋の奥に目立たないようにカモフラージュされていたコンテナを引っ張り出してきた。

その中には金属の塊のようなものが大量に入っていた。

大和はその塊を身につけ始めた。よく見ると、鎧を身につけているようにも見えた。

「これは軽装鎧、メック・スーツと言う。君の分もある」

そう言い終える頃には、大和はその金属に身を包んでいた。

全身を覆う灰色の装甲は曲線的で、宇宙服としても通用しそうな外観を持っていた。ただ、宇宙服としてはやや装甲が薄いように思えた。関節や手指は黒っぽく、ゴム質の素材で出来ているように、しなやかに動く。頭部はヘルメットに覆われ、緑色に近いゴーグルがあるが、そこから装着者の目を見透かす事は出来ず、暗視用なのか、淡く発光しているようにも見えた。

純は、コンテナの中に入っている同じものに視線を落とした。

「ああ、着け方、知らないのだったな」

大和は呟き、一つのパーツを取り出した。関節部防護用と思われるパーツを、膝や肘に巻くようにして装着し、続いて取り出された半分に切り開いた円筒形のような灰色のパーツの内側には、ゴムのような部分があり、それを純の右脛を挟むようにして円筒形に閉じると、カチリと音がしてはまった。ゴム質の部分は衝撃吸収用なのか、足フィットした装甲は純の予想以上の安定感を示した。

下半身が終わると、今度は上半身に移る。まず、手袋のようなものを渡され、手を通し、黒いジャケットを羽織り、胸元のファスナーを閉じる。その上に装甲が取り付けられ、最後にヘルメットが被せられた。

「こんな技術があるなんて、俺は知らない……」

「だろっうな、奴等は表面的な生活では現在の年月すらカモフラージュしているからな……」

大和の声が、ヘルメット内に響いた。

ヘルメットに包まれた純の視界に映ったのは、やや緑がかった色の視界。その視界の四隅には小さなウィンドウが表示されていた。

「右上は多目的のマップ・ウィンドウだ。その下は鎧の状況を示すスペック・ウィンドウで、左側は今使わないだろう」

そんな必要最低限の説明を受けながら、純は鎧に包まれた身体を動かしてみた。

思った程鎧は重くなく、むしろ着用前よりも軽いかもしれない。関節の動きも問題なかった。衝撃吸収用だと思っていた部分には、何か別の装置も組み込まれているのかもしれない。

「詳しい説明は組織に着いてからだ」

大和が言う。

敵地のと真ん中で悠長に説明している暇はないという事だ。それに関しては純も意義はなく、大和が次の行動を起こすのを待った。

コンテナの中からライフルを取り出した大和は、それを持ったまま窓を開け放ち、頭を外へ突き出すようにして周囲を見回した。続いて、部屋の中に入ってきたドアから外を探り、誰もいない事を確

認してから、再度窓に近付いた。

「恐らく、正面玄関は包囲されている。窓から迂回して行く」

そう言うなり、大和は窓の冊子の一部を腕で叩き壊し、鎧を着た状態の人間が通れるだけの穴を開けた。

「ここ、三階……」

「大丈夫だ、この鎧は衝撃吸収も出来る」

純の呟きに答えた大和は窓から外へと飛び出した。純は慌てて窓に近寄り、下を覗き込んだ。下に着地した大和が、純の方へと顔を向ける。

息を呑みつつも、純は窓枠に足をかけ、外に飛び出した。

正面玄関が包囲されている、というのは間違っていないと思えた。校舎内に人気がなくなっていたのはそのためかもしれない。それに、生身の純に出来る事の想像はつくだろう。三階から飛び降りるとは考えないはずだ。そうであればこそ、三階に誰も来る事なく下りてくるのを待っているのかもしれない。

命を狙われている現在、大和の指示に従う方が安全だとも思えるのだ。彼が本当に味方はどうかは解らないが、ここに留まる事が危険な以上、彼に従う方が安全だと思えた。

一瞬の浮遊感の後、純はコンクリート部分に着地。衝撃を受け流すように自然に脚が動き、痛み等は全くといって良い程感じなかった。鎧が自ら衝撃を吸収するような動きをさせたように感じたのは、錯覚ではないだろう。

「よし、行くぞ」

前方に立つ大和が声を掛け、純は屈んだ姿勢から立ち直る。

走り出す大和を追うように純も走り出した。動きは軽く、通常時よりも速く身体が動いた。

薄っすらと緑色がかつた視界の中、目の前を走る大和の鎧は表面を濡らしている。耳に聞こえる雨音から、まだ雨は止んでいない。曇った空は辺りを暗くし、雨が不気味な雰囲気を引き立てている。

校舎の脇を駆け抜け、正面玄関を避けるような方向へと進み、出

来ただけ物陰を進む。人目を避けるように進む大和を、純は追い掛けた。

(……静か過ぎる……)

純は不意に思った。

人気がないのは学校にいた時点で気付いた事だったが、実際に街中を走っていて、家の中に感じる人の気配が感じられない。空から落ちる雨水の粒が、地面にぶつかり弾ける音だけが聞こえていて、他の音は純と大和が走っている足音しかない。息が詰まりそうな程の静けさが、逆に緊張感を湧き上がらせた。誰もいない事への不安感が、いつ、どこで襲われるか分からない恐怖へと繋がり、時間を追うごとに増していく。徐々に脈拍が上がるのが感じられた。

目の前を進む大和は右脇にライフルと思われる武器を抱えて一定の速度で走っている。

純はそれに従い、一步遅れた位置を保って走っている。着ている鎧の装甲に雨がぶつかっても、それが肌に感じられる事はなく、それでいて鎧の中が蒸れる事もない。呼吸がヘルメットに籠ってもいないし、何より走っていてもあまり疲れを感じない。鎧のアシストなのだろうが、こんな事が出来るだけの技術力があつた事を、純は知らなかった。

大和は詳細は組織についてからとっていた。その本部はどこにあり、どうやってそこまで行くのだろうか。

(……俺、どうなるんだ……?)

疑問だけが頭の中を繰り返し通り過ぎ、しかし、答えは出ない。

組織に着けば解決する疑問だとしても、そこまで待つだけの時間が耐えられない。

どこまで来たのか、どういった道を進んできたのか、もう判らなかつた。ただ、誰もいない風景と異様なまでの静けさ、相変わらず降り注いでいる雨だけが変わらずに純の周囲にある。

カルマを持った人間というのが敵で、大和のいる組織が味方だとしても、純にはどちらの全貌も掴めず、それが更に不安を呼んだ。

「 追いつかれるな……」
ぼつりと、大和が呟いた。

「……え？」
「 右上のマップに光点がないか？」
訊き返した純に、大和はすぐに答えを返した。

「 あ……」
「 デフォルトならカルマが表示される」

大和の解説に、純は息を呑んだ。

マップ・ウィンドウには、赤い色の光点が、円形のレーダーの端に映っていた。それが何を意図するのかは、もう判る。敵が純達の行動に気付き、追撃を仕掛けてきたのだ。

純は大和と違い、武器を持っていない。そうならば、逃げるしかないが、先導である大和が交戦状態になった時、純はどうすべきなのだろうか。

「……亜沙、追手が来ている、そちらの状況はどうだ？」
耳元に大和の声が聞こえた。今までの事から、そこに通信機のスピーカーがあるのだと判断する。

亜沙、というのは仲間なのだろう。恐らくは大和の仲間で、そこまで行けば安全だと、そういう事だ。

「 大丈夫、私が行けるわ」

大和の通信機ごしのためか、やや聞き取り辛かったが、それでも返答は純にも聞こえた。女性の声だった。

応援に駆けつけるといふ内容だと、状況から純は推測した。

「 出来るだけ先に進む」

大和はそう言い、速度を上げ、純はそれに一步遅れてついていく。目の前を行く大和が、今まで下げていたライフルの銃口を持ち上げ、構えるように持ち直していた。

彼の持つ銃から、がしゃ、と音がした。恐らく、安全装置が何かを操作し、射撃が出来るようにしたのだ。いつ、敵に襲われても対処出来るように。

「来るぞ」

その声に、純は視線をマップ・ウィンドウに向けた。赤い光点が、上下左右に走った筋の中心であり、円の中心である一点のすぐ後ろに来ていた。その座標の中心は、純だ。レーダーの範囲内には、既に他の光点が進入しており、多数の敵がいる事を示している。

「立ち止まるな！」

大和の声に、背後を振り向きそうになった自分を押し止め、純は歩調を速めた。

大和が振り向き、純の背後に銃口を向けた。そして、その銃口が火を噴いた。

首を曲げ、純は視線だけを背後に向けた。純に飛び掛るような構えをとっていたのであるう、そいつは、胸の中心に銃弾を撃ち込まれ、後方へと吹き飛ばされた。放たれた銃弾は胸を抉り、鮮血を撒き散らして貫通した。

「……！」

その光景に、純は息を呑んだ。

吹き飛ばされたそいつは、ぴくりとも動かない。絶命したのだ。

すぐに顔を背け、純は更に歩調を速める。

道の脇から飛び出してきた男に、大和はすぐさま銃弾を叩き込んだ。それによつて首の辺りから吹き飛ばされ、男は背中から倒れた。

純は出来るだけ死体を見ないように、避けて駆け抜けた。

背後の方では大和が応戦している銃声が響いている。

「純っ！」

前方からの、聞き覚えのある声に純は顔を上げた。

「敦也！」

全身びしょ濡れの状態で、義兄弟の敦也が前方から走ってくる。

「こんなところで何やってんだ！」

敦也はそう言つて純を脇道へと誘導した。

広い道では狙われやすいと判断したのかもしれない。それに、ほとんどの人間が身体の一部を凶器化しているのに、敦也はそれをし

ていない。彼も狙われる側なのかもしれない。もしかしたら、大和の組織の人間なのかもしれないと、純は思った。

「……………」
前方に、身体の一部を凶器化した者達が降り立った。すぐさま純と敦也は方向を変え、敵から逃げる。

(追ってきてる！)
レーダーを見て、純は歯噛みした。

回りこむように赤い光点が表示され、背後からも光点が向かってきている。二人に振り切れる速度ではなかった。

前方に数人が立ちほだかり、背後へと視線を向けると、丁度追いつかれていた。

「…………… 囲まれた……………！」
純は呻いた。

武器のない純には対抗手段がない。勿論、敦也にも。

「 大丈夫だよ、純」
敦也が小さく呟いた。

雨で濡れた前髪を敦也が左手で掻きあげ、純に視線を向ける。

(……！)
その表情は穏やかなものに見えた。しかし、純はその中に一瞬だけ宿った危険な光を見逃さなかった。

咄嗟に、建物の壁に背中を預けるように、敦也の脇から飛び退った。

隆一の言った言葉が脳裏を過ぎった。知り合い全てが敵である可能性は極めて高い。もし、敦也がそうだとしたら

(……まさか……………)
心臓が跳ねた。

必死に考えを振り払おうと、頭を左右に振った。

「純、どうした…？」
心配するような口調で、純の耳に届いた敦也の声。

「…………… 敦也、お前」

「あれ、もうバレた？」

肩を竦めて苦笑する敦也に、純は全身の力が抜けるのを感じた。それでも座り込んでしまわなかったのは、背を預けている建物のお陰だろう。

「ま、もう手遅れだろうけどな……」

口の端を吊り上げ、敦也は右手を変貌させた。

溶けるように人間の腕の形が崩れ去り、流動する半液体状になったかと思うと、すぐに別の形に固定される。その腕はやや細く、長くなり、手の甲には鋭い鉤爪のようなものが迫り出している。

「まさか、イレギュラーと暮らしてたなんて思わなかったよ」

困ったような笑みを浮かべ、敦也は左手で髪を掻きあげた。

純はただ呆然をそれを見つめるだけだった。

「どんな顔してんだらうね……？」

くすくすと笑いながら、敦也が手を振り上げた。

鎧のヘルメットに覆われた純の表情を想像してか、口元に笑みを浮かべている。

その爪が振り下ろされる瞬間、銃声が響いた。

「敦也……」

純はそれを見た。

横から飛来した銃弾に、敦也の首から先が吹き飛ばされるのを。振り上げた腕ごと、首が弾け跳び、路地裏の地面に音を立てて転がった。地面に肉片の落ちる音と、雨に濡れた路面にものが落ちた衝撃で立った水音。首と右腕のない敦也の身体がぐらりと傾き、仰向けに倒れた。

続いて響き渡る銃声によって、肉片が吹き飛ばされて路面に転がって行く。

大和が路地裏の狭い中で、凶器化した身体で襲い掛かる男達を、その強力な銃で葬っていた。

（俺、何やってんだらう……）

純は自問した。

目の前に転がっている敦也の死体から流れ出た血が、純の足元数センチのところまで広がっている。黒い、手袋のようなもので覆われた右手で、その路面を撫でる。そうして目の前に持ってきた右掌には、雨で薄まってはいるものの、しっかりと赤い液体が付着していた。

敦也の血だ。

物心ついた頃から、共に過ごしてきた家族の一人。敦也が殺されたショックよりも、敦也が純を当然のように殺そうとした事に、純はショックを受けていた。

年齢が同じだった敦也も、純と家族として過ごしてきたはずだ。それを、純が敵だと判った瞬間にすぐさま殺そうとする事が出来た事が純にとってはショックだった。

不意に、視界が暗くなり、純は顔を上げた。

剣と化した腕を振り上げる男が、そこにはいた。しかし、それが振り下ろされるよりも早く、脇から飛んで来た銃弾が男の腕を吹き飛ばした。

飛び散った鮮血が純の鎧に降りかかった。

男は絶叫を上げながら、銃弾を放った大和に飛びかかるうとして失敗し、振り返ちにあって死んだ。二発目は胸に直撃だった。

「無事だな!？」

荒い呼吸を整えようとせず、大和が純の前に立った。

差し伸べられた手に、純は手を伸ばす事が出来なかった。

「……家族でも、殺そうとして来た……」

思わず、純は呟いていた。

「……それでも、家族と呼べるのか……?」

大和の言葉に、純は顔を上げた。

ヘルメットに覆われた大和の表情を窺い見る事は出来ない。だが、その差し伸べられる手は、純に向けられていた。先ほどよりも、近い位置まで伸ばされた手を、純はようやくと掴む事が出来た。

大和の鎧は返り血を浴び、至る所が赤く染まっている。しかし、

雨によって徐々に洗い流されてもいた。

「まだ、君が安心して考える事の出来る場所ではない」

大和は純を引き起こし、告げた。

そうして、純の肩に手を回し、引き寄せると、歩き出した。

純は死体を避けながら、路地裏を歩き、やがて元の道に戻った。

周囲に警戒しながら、大和はライフルの弾倉を交換した。金属の音が路面に響き、空の弾倉が破棄され、そうして空いた場所に新しい弾倉を叩き込む。

近くで見て気付いたが、どうやら無葉莢らしく、ライフルには葉莢を排出する機構が見受けられなかった。

「……これを」

大和が腰の後ろ辺りから、一つの拳銃を純に差し出した。

「出来るだけ私が守るが、いざという時のために君も持っていた方が良い」

純は無言でそれを受け取った。

鎧の力なのか、重くは感じなかった。黒く、角張った、ハンドガン。それを左手に提げ、純は大和を追うように歩き出した。

流石に疲れているのだろう、純にも大和の肩が上下しているのが判った。

リーダーにはまだ赤い光点が多数表示され、未だに増え続けている。

「ただ、その銃は最終手段として使ってくれ、私が周りにはいる間は、私が戦う」

大和が言うのに、純は頷いた。

「……まだ、時間がかかる？」

ようやく出せた純の問いに、大和は頷いた。

「組織の位置を察知されぬよう、細心の注意を払っているからな。移動するところを見られないよう、敵を撤く必要もある」

大和はそう答えた。

敵に移動を見られれば、どの方角に逃げたかも計算されてしまう

のだ。追っ手を撒けるだけの距離を開け、誰にも見られていない時に移動するのだろうか。

数分間歩いたところで、またも敵が立ち塞がった。

着地と同時に大和が引き金を引き、一人を始末する。その仲間が襲い掛かってくるのを、横っ跳びに避けた大和は、空中で最も近くに居る敵を撃ち抜き、着地と同時に更にもう一人を射殺。背後からの敵にも振り返りざまに一発撃ち込み、屈んで別方向からの攻撃を避ける。

肘打ちで敵を引き剥がし、腹に銃口を押し当てて射撃し、更に一人訓練され、熟練されたものの動きで、大和が敵を確実に葬って行く。

時折、純を狙ってくる者もいたが、それさえも大和が全て射殺した。

「早く合流地点に着かなければ、まずいな……」

落ちて進めるようになるまで戦った後、大和はそう呟いた。弾倉を交換する大和は呼吸を整えながらも、周囲への警戒を怠ってはいない。

大和を一筋縄ではいかないと判断したのだろうか、レーダーに映る光点は二人を後方から包囲するように動いていた。包囲されてしまえば、流石に二人だけでは突破は出来ないだろう。

と、突然、後方から一つの光点が突出して来るのを、レーダーは捉えた。

光点は一気に二人を追い越し、弧を描くように回り込んだところで、それは二人の視界に入ってきた。

背中から蝙蝠のような翼を生やした男が、滞空していた。

「……ボスクラスか……」

大和は呻くように言い、ライフルを構えた。

「二人とも、逃す訳にはいかないんでねえ……特に、奈義」

男は純に見下すような視線を向けた。

「お前は本当に駄目な生徒だったなあ……！」

「……！」

純はそこでようやくその男の顔を思い出した。

高校のクラス担任をしていた教師だった。高校生活の成績は確かに良いとは言えないものだったが、そんな事よりも、その教師が純にそうやって自分を身の回りにいた者だという事を強調したのが癪に障った。

大和の持つライフルが火を噴いた。翼を生やした教師はそれを空中で身を翻してかわした。

「中身はそこそこのようだが、そんな装備では勝てまい！」

急降下した教師が大和に襲い掛かる。

鋭く、頑強に変形させた爪を、大和は横に身を投げ出すようにして避けた。その敵の動きは、今までの誰よりも素早いものだった。

「くっ……！」

純の耳元の通信機から大和の呻き声が聞こえた。

立ち上がり、ライフルを構える大和に、上方からその教師が高速で突撃する。すぐさま回避行動を取り、間一髪のところで大和はそれを避けた。立ち上がるうとすれば、そこに攻撃が向けられ、大和は防戦一方だった。

リーダーに映る敵の光点は着々と円形の包囲網を作りつつある。

敵の存在に注意しつつ、純は物陰に身を潜めた。リーダーを注意深く見ていれば、敵の接近には気付けるはずだ。大和の邪魔になりたくはなかったし、教師に狙われるのも厭だった。

物陰から様子を窺い見た。

大和は反撃出来ずに敵の攻撃を避け続けている。対空攻撃は可能でも、明らかに飛べない大和が不利だ。反撃の隙を与えずに攻撃を繰り返すというのはいのちの外難しいものだ。それをやっているあの教師の強さは相当なものだろう。

建物に背を預けた大和に、正面から敵が突撃を繰り返す。一発だけ反撃も、体の軸をずらされてかわされ、大和はギリギリで身を投げ出して突撃をかわした。敵は建物の壁を貫き、視界から失せた。

起き上がった大和の背後の壁が吹き飛び、敵が大和に突撃を命中させた。その衝撃が音となって周囲に響き、大和は軽々と吹き飛ばされた。大和は背中から別の建物に叩きつけられ、壁の一部を崩して止まった。元教師はその場に留まり、やや上昇して大和の様子を窺うように見下ろしている。

叩きつけられてから数秒の間に、大和は道に歩み出た。その手にはまだライフルが握られている。ゴーグルが敵に向けられ、すぐさまライフルが構えられた。大和は即座に発砲し、自身はすぐに横に跳んで回避行動を取ると、先程まで自分のいた場所にライフルを向けて発砲。敵の動きを予測し、それは的中していた。

「……っ！」

ただ、敵の力はそれを上回っていた。微妙に身体を捻り、銃弾だけを的確に回避し、地面すれすれで方向を急転換、大和へと突撃する。

身体を横に投げ出すように傾けた時、二人が激突した。

「が…っ！」

腕で薙ぎ倒されるように横に吹き飛ばされ、大和が建物の壁を貫いた。がらがらと瓦礫が崩れ、純は大和を見失った。

敵である教師は、地面すれすれから翼をやや傾けて上空に滑り上がると、空中で身体を横に一回転させて翼を横に大きく開き、上昇の力を打ち消して止まった。

その視線が向けられるのは紛れもなく、純。

「奴が起き上がってくる前に、お前を始末しておかねばな……」

冷徹な一瞥に、純は息を呑んだ。

「どうして、殺そうとする……？」

純は衝動的に問いを発していた。

カルマというものを持つ者が、何故、そうでないものを殺そうとするのか。ただ単に、カルマを持たない人間が少数になったために調和を乱すから、というのは理不尽過ぎる。

「……ふん、お前、まだ何も知らされてないのか」

嘲笑うかのような返答が戻って来た。

「これから死ぬ奴には、話しても時間の無駄だ」
元教師の目がざらりと光った。

瞬間、教師が急角度で滑空し、純に突撃してきた。純には何も出来なかった。

「！」
鈍い衝撃が下腹部から全身に広がり、背後の壁を打ち砕き、純は吹き飛ばされた。

「……うぐっ……！」
呼吸が一瞬止まり、詰まった声が呻き声として吐き出される。そして、じわじわと衝撃が鈍痛へと変わり、純は顔歪めた。

身体を起こそうとして床に着いた手が、震えていた。そのまま軋む身体を強引に起こした時、視界が暗くなった。

顔を上げれば、翼を持った教師が立っている。雨の中、外から入る僅かな光が、その手に形作った強力な爪の輪郭を照らしていた。

（……銃が……！）
体当たりを喰らった際に、手放してしまっただらしい。左手は空になっただけだ。

教師が身構えた直後、その後方に引いた右腕が弾け飛んだ。

「ぬっ！」
一瞬硬直した教師だったが、すぐに背後に振り向くと、身を隠すように建物の影に入り、そのまま姿を消した。

「大丈夫か！？」

数瞬の間をおいて走ってきた大和が、純に駆け寄る。

その手にはライフルが握られていたが、鎧には罅が入り、その隙間から出血も見てとれた。

「俺は、なんとかか……」

何とか立ち上がった純は、呼吸を整えつつ、大和に答えた。

通信機が壊れたのか、耳元からの声ではなく、装甲越しのくぐもった声となっている。それでも肩の上下や、装甲越しにでも聞こえ

る荒い呼吸から、相当なダメージを受けているのが判った。
純は右下に映る鎧の状態を確認した。破損はないものの、性能が低下していると表示されていた。衝撃で内部機器にダメージが伝わったのだろう。

「とりあえず、進むぞ。奴はまだ付近にいるだろうから、狭い場所にいるのはまずい」

大和の言葉に頷き、純は外に出て、落ちていた銃を拾った。

(……俺には、何も出来ない……)

純はその拳銃を見つめ、そう思った。

戦う事は勿論だが、逃げる事さえも大和がいなければままならない。援護も出来ず、ただ、殺されかけただけ。

一歩先を進む大和は、罅の入った部分を手で押さえるようにして歩いている。進む速度は明らかに落ちていた。

「逃がさない、と言っただろ？」

突然前方に降り立った元教師が、言った。

着地した直後、翼の一つが形を崩し、失った右腕を復元していたのこった翼は先端の尖った触手となり、肩や脇から先端をこちらに向けていた。

それに対して、無言で大和はライフルを構えた。純は、何も出来ずに、脇へ退いた。

大和の肩の上下は治まっていない。明らかに大和が不利な状況にあった。カルマを持つ者に対して、特に今目の前にいる敵に対して、逃走は不可能だ。生き延びるためには戦い、退けるしかない。

降りしきる雨音だけがその場に音をもたらししていた。

先に動いたのは大和だった。ライフルの引き金を連続して引き、銃弾を何発も撒き散らす。

「言っただぞ？ そんな装備では勝てない、と！」

腕を盾の形に作り変え、元教師が告げる。

そして、一気に踏み込むと背中から生え出した数本の触手で同時に突きを繰り出す。避けきる事が出来ず、大和は左肩に突きを受け

た。

「ぐ……！」

触手は装甲をいとも簡単に突き破り、大和の肩に食い込んだ。そのまま背まで貫通し、大和が苦悶の声を洩らした。

赤く、鮮血に染まった触手が形を変え、刃物のように縦に鋭くなり、上方へ振り上げられた。大和の肩の肉と装甲を切り裂き、鮮血が舞った。よろめいた大和の左足、腿の辺りに別の触手が突き刺さり、今度は横に引き裂かれた。

「があ、あっ！」

気合を入れるかのように声を上げ、大和は右腕のライフルを胸へと撃ち込んだ。

命中はしたものの、敵はすぐさま起き上がり、胸に空いた穴を触手一本を減らす事で再生させる。

「……く……っ……！」

大和が膝を着いた。受けたダメージと、脚の傷に、立てなくなつたようだ。それでも倒れないのは大和の精神力が桁外れだからなのだろう。

元教師は余裕を見せ付けるように歩み寄ると、大和の右手に構えられているライフルを弾き飛ばした。そして、口元に邪悪な笑みを浮かべると、触手の狙いを大和の頭へと合わせた。

（……！）

純は無意識のうちに左手の拳銃を敵に向けていた。だが、引き金にかけられた指が動かない。

「うあああああっ！！」

自らに喝を入れるかのように叫び、純は右手で左手を包み、引き金を強引に押し込んだ。

銃声が響き、鎧に吸収されても、それでも拳銃の発砲による衝撃が腕を伝う。

「……！！」

銃弾は、敵の両目を横から貫いていた。

「貴様あつ！」

みるみるうちに両目が再生し、敵意に満ちた視線が純へと向けられた。

そして、教師は地を蹴って飛び上がると、鋭い爪で純に斬りかかった。背後の方へ逃れても避けられず、純は拳銃を弾き飛ばされた。目の前に着地した教師は、逆の手を下側から掬い上げるように振った。純は何とかそれをかわした。

「う……っ……！」

しかし、左脇腹に衝撃を感じ、呻き声を上げた。だが、その衝撃はやがて激痛に変わる。槍と化した触手に貫かれていたのだ。引き抜かれると同時に、血が噴き出し、純は傷を手で覆う。しかし、装甲の厚みがそれを阻んでいた。

「……無能が……！」

教師の言葉が上から降りかかった。怒りの感情の存在がはっきりと認識できる、そんな声だった。

数本の触手の先端が純に向けられた直後

「え……？」

教師の身体は爆発に包まれた。

その爆発は教師の身体を焼いた。訳が解らず絶叫を上げた教師に、再度爆発が起きた。

否、起きたのではなかった。純と大和が向かっていた方面から飛来した火球が、教師に命中したのだった。

純は数歩下がりが、教師が燃え尽きるのを見つめていた。

「亜沙か……！」

大和が声を上げた。

「ごめんなさい！ 敵の包囲を突破するのに手間取っちゃって！」
その、女性の声と共に、純と大和の前に、一つの大きな影が現れた。

アイデア

五・六メートル程の大きさの、ロボットだった。肩がやや大きく張り出し、脚部は太く、バランスの取れた人型の機械。

アイデア

それが二人を見て、告げた。
「さあ、早く行きましょう……！」

第二章 「本当の世界」

第二章 「本当の世界」

そこは、地上ではなかった。地面を屋上とするかのように、分厚い壁で地上と隔たりを造り、その下にあるのは建物の内部のような空間だった。通路があり、部屋がある、地上で見てきた建物とほとんど変わらない。ただ、その規模だけが違う。

純はその中の通路を、一人の女性と歩いていた。いや、少女と言ふべきかもしれない、曖昧な年齢だった。

近衛 亜沙。彼女はそう名乗った。肩に届く程度で切った黒髪に、すっと通った鼻梁の、中々の美人だった。大和が呼んだ増援は彼女だった。

あの後、純は大和を担ぎ、亜沙が誘導した。軽装鎧のパワー・アシストにより、純でも大和を担ぐ事が出来た。

亜沙は襲い掛かる敵を全て撃破し、目標地点まで純を誘導した。その戦闘能力は大和を大幅に上回っていた。

目標地点にあった、超大型の輸送車両は、亜沙の乗っていた大型人型兵器を数体運べるだけの貨物室を備え、更には様々な迷彩処理がなされ、完全にその姿を隠す事が出来るものだった。

脇腹に受けた傷は、移動中に手当てがなされ、鎮痛剤のお陰で痛みはない。大和は怪我が酷かったため、ちゃんとした施設で治療がなされるのだろう。

突き当たりのドアまで来て、亜沙は純に道を譲るように脇にどいた。そして、ドアの脇にあるパネルに手を触れ、そのドアを開いた。純は促されるまま中に入った。

そこには、数多くの電子機器があり、十数人の人達がいた。大きな部屋の、一つの面は大きなディスプレイがあり、様々な情報が表示され、それに向き合う形で配置された机の上にはコンピュータ

等の機械が置いてある。そして、それを操作する人達。

「……純、だね？」

一人の男が、機器の置いてある側から歩み出た。厳つい顔つきに、がっしりした体格の男だった。

「……何が何だか解らないよ」

確認の問いへの返答は必要ないと判断し、純は言った。

何故、自分の名前を知っているのか、ここは何をしているのか、そして、カルマとは何なのか。疑問ばかりだった。

「そうだろうな、君は外で育ったからな……」

男は一つ頷き、純に視線を向けた。

「では、説明しよう。大和から少しは聞いているのではないかと思うが、今現在、世界を占領しているのはカルマを持つ者、リグノイド達だ。超高性能ナノマシン・カルマは生物の細胞に入り込み、その細胞の一部として同化する。持ち主の意思に感応し、形状を変えたり、普段の身体能力向上、治癒能力向上をしている。学校で生活していて、運動神経で劣っていないかたかね？」

「……はい」

彼は説明を区切り、純に問いを投げた。

それに対し、純は頷いた。学校にて、体育の時、純の運動神経は下のランクに位置していたのは事実だ。自分自身、運動神経に違和感を感じた事はないし、健康でもあったために、疑問に感じた事がないわけではなかった。

「だから、我々、普通の人間は生身ではリグノイドに勝てない。例え訓練されていても、な。そして、我々はリグノイドに追われ、ここに隠れ、抵抗している」

「……どうして、そんな事に？」

純は言葉を区切った男に問う。

彼の説明は、まだ、純が説明して欲しい事を喋っていない。どうしてそんな事になったのか、だ。

「カルマは、昔、人間自身が造り出したものだ。恐らく、最初は人

間の身体能力や治癒力を向上させて使うものだったのだろうか。だが、それを得た最初のリグノイドは、暴走した」

「暴走？」

純は反復した。

人間が造り出したものであるという事には薄々感付いていた。

そうでなければ、一体どうして出来たのか説明がつかない。

「ああ、今となっては何があったかは判らんが、ファースト・リグノイド、荒海 斗雨也はカルマの移植直後、施設を破壊し、逃走した。そして、奴はリグノイドを増やし、我々を追いやった」

そう説明する男の表情には、感情はない。説明し飽きた事なのかもしれないし、そうではなく、説明自体に感情を込めたくないのかもしれない。

「……え、じゃあ、カルマを造ったのは」

純は世界初のリグノイドの名前が日本人である事に気づき、口を開いた。

「 そうだ、カルマは日本が開発したものだ」

三十年程前、精密機械に対して日本は他の国を超える技術を持っていた。実用的なナノマシンを世界で初めて開発したのも日本だった。そして、他の国がナノマシンの技術を獲得した頃、日本は先鋭的な超高性能ナノマシン 後にカルマと呼ばれる を生み出した。その被検体選ばれた斗雨也は、ナノマシン移植後にその施設の人間を全て虐殺して逃走。当時の政府はそれを一般公開せず、秘密裏に処理する事を決め、様々な手段で斗雨也を追い詰めるが、全てが失敗に終わる。やがて、斗雨也は完全に行方を晦ました。やがて、斗雨也はリグノイドを率い、日本でテロを起こした。応戦した自衛隊は壊滅し、国民の多くは死亡。日本はリグノイドに全てを奪われ、他の国は、争いは起こらずとも、確実にリグノイドを増やし続けている。既に主要機関の人間はリグノイドとなっており、日本の凄まじいまでの惨劇を、ちっぽけなテロとして扱い、世界の目を

欺けさせた。

生き残った日本国民は、斗雨也が姿を消してから持ち上がった来た、第三次世界大戦の懸念のために造っていた大型地下シエルターへと逃げ込み、最新の兵器を持って、抵抗した。幸いな事に、斗雨也達リグノイドはそのシエルターがどこにあり、どこに入り口があるのかまで知らない。リグノイドの戦闘能力を身を以って知っていた、逃げ延びた人々は、細心の注意を払ってリグノイドに場所を知られずに生きてきたのだ。

純は、そう説明を受けた。

「我々は、イデアという名前を組織に付け、抵抗している」

リグノイドに抵抗する、人間の最後の砦、それがイデアという組織なのと言う。日本以外にそういった施設があるのかは不明だ。

「私は、この司令官を務めている、城山 雄だ」

男は雄と名乗った。彼が司令官だという事は、説明を受けていた純には察しがついていた。

「一つ、訊いても？」

「ああ、どうぞ」

純は一言確認し、告げた。

「何故、俺一人のためにこんな危険を？」

ここまで知らされると、今度は逆にそういった疑問が生じていた。隠れ、潜む事でリグノイドから自らを守ってきていたはずだ。それなのに、たった一人のために、その組織の場所が知られてしまうかもしれない救出作戦を立てたのだろうか。普通であれば、ここに住む人々の安全を考え、救出をしない方が良いはずなのだ。

「君は、奈義 純というそうだね？」

雄の言葉に、純は頷いていた。

「養子である事も知っているね？」

一言一言確認してくる雄に対し、純は頷きだけで答えた。

確認の問いかけをする雄の瞳は、優しい。

「君の本名は、天風 純という。御両親は、イデアにいた」
「……………」

雄の言葉に、純は言葉を失った。

彼によれば、純の両親も外界 リグノイドの世界 で暮らし
ていたのだという。天風夫妻は、その時点までイデアの存在を知ら
ずにいたため、二人がリグノイドではないと気付かれてから逃げ回
る生活を送っていたのだそうだ。そして、その逃走途中で純が生ま
れ、二人は純が追われぬようと、道に置いて行ったのだという。
「やがて、二人とも我々が保護したが、二人とも、ずっと君の事を
気にかけていたようだったよ」

「……………それで、俺の両親は……………」

穏やかに目を細め、告げた雄に、純は微かに震える声で訊いた。

「二人とも、リグノイドと戦って、命を落としてしまった」

ただ、と付け加え、雄は純の目を見つめた。

「君の両親のお陰で、我々は何度も命を救われた。君を救出するの
には、彼等への恩返しでもあるのだ」

その視線を受け、純は何も言う事が出来なかった。

今まで本当の両親の事はあまり考えなかった。だが、同じ時を共
有して過ごした、義兄弟である敦也に襲われた純には、家族が信用
出来なくなっていた。実の両親がいた事、自分の事を考えて捨てた
事、想われていた事、純にとっては一度も考えられなかった事だっ
た。それが今、唐突に突きつけられ、純の思考は停止していた。

「……………これから、俺はどうなる……………」

「居住区で、一般人として暮らすか、イデアの一員として戦うか、
どちらかを選ぶ事になるだろうな」

呟いた声に、雄は答えた。

「……………戦う？」

「ああ、君も見ただろう、亜沙のアサルト・アーマーを」

「アサルト・アーマー……………」

雄の言葉を純は反芻した。恐らくは、純と大和を助けた大型の人

型機械の事なのだろう。

「戦闘鎧、とも呼ばれる、人型の戦闘機械。軽装鎧と違い、段違いの性能を誇る、アイデアの主力だ」

そこで雄は言葉を区切り、純を見た。

「扱うにはある程度の才能が必要になるがな」

「このままテストしてみます？」

純の斜め後ろにいた亜沙が雄に提案した。

「……ふむ、だが、傷の方は？」

数瞬考え、頷いた雄だが、純が負傷している事を知っているらしく、純に視線を向けた。

「……そんなに深くはないと思うけど……」

医療技術の水準が高いのだろう。純の傷は応急手当だけでほとんど塞がれている。止血はもう終わり、身体の内側部分に傷の痛みが残っているだけなのだ。軽い鎮痛剤を使用されているため、痛みは全くない。

「では、亜沙、暁彦には伝えておくから、連れて行ってやってくれ」「はい」

雄の言葉に、亜沙は頷いて応じた。

その亜沙に促され、純は彼女の後に続いて部屋を出る。出る瞬間、一度だけ視線を後ろに投げた純は、雄が何か指示を飛ばしているのを見た。

(……戦う、つてのは、やっぱり……)

純は、自分が、今、人生の分かれ道に立っているのだと、理解していた。戦うというのは、すなわち、相手の命を奪う事だ。リグノイドが凄まじい戦闘能力を持ち、普通の人間を敵視しているとはいえ、殺すという行為は好ましい事ではない。

だが、純は一度、銃を撃っているのだ。傷付き、追い詰められた大和を助けるために。そして、その大和は純のために多くの命をその手で奪っている。

「……どうかした？」

俯き、考え込んでいる純に、亜沙が声をかけてきた。

「……いや、何でもないよ」

数瞬考え、純はそう答えた。

いっそ、亜沙が戦いに参加している理由を聞いてみようかとも思ったのだが、出会ったばかりで流石にそれは馴れ馴れし過ぎる。それに、仮に彼女が何かしらの返答を寄越したとしても、それによって純の意思が左右されてしまっただけは、自分で下した決断ではなくなってしまうだろう。

亜沙は不思議そうに首を傾げ、純の顔をまじまじと見つめた。純はその視線をどう受け止めていいのか判らず、視線を逸らした。

「ここね、訓練室」

亜沙の声で、純はドアに視線を向けた。

ドアを潜り抜けると、そこはロッカールームになっていた。そして、そこには数人の人の影もあつた。

「君が天風 純、だね？ 私は高瀬 暁彦、戦闘隊長を任されている。こっちは、戦闘要員の城山 康祐だ」

その影の中の一人、最も年配の男が立ち上がり、言った。

背の高い、無精髭を生やした男だった。青年とも中年ともつかない、その境目のような年恰好だった。それでも体軀は引き締まっているようで、やや細めの顔とはバランスが取れている。髭を剃ったら中々格好良いかもしれない。

暁彦の斜め後ろ辺りにいたのは、城山 雄の息子だという、康祐だった。純と同じ年くらいの年恰好で、純よりも活動的な印象を受ける。

「まずは、アサルト・アーマーの説明をしておこうか。その後で実際に乗ってもらって、適性を見る」

アイデア

暁彦の説明によれば、アサルト・アーマーには機械を操縦する技術はあまり必要ないらしい。

マインド・フォロウ・システム、名前の通りの、『精神追従機能』

が搭載されたアサルト・アーマーは、搭乗者の神経パルスを受信し、機体を搭乗者の思い通りに動かすというのだそうだ。ただ、これには操縦適性が必要とされ、全員が操縦可能ではないとの事。動かす事は出来ても、戦闘に用いるような動きは不可能だが、その分機体の性能や機動力は通常のリグノイドを凌駕する。

また、アサルト・アーマーは戦闘鎧という別名があるだけあって、戦闘に関しては臨機応変な対応が出来る。例えば、機体の各ブロックが換装可能で、用途によって機体の武装だけでなく、スタイルそのものを変える事も出来るのだ。

今現在、純が乗り込んだのは訓練用アサルト・アーマーで、見た目に特徴が乏しいものだった。装甲色は白っぽいグレーで統一され、軽装鎧をそのまま大きくしただけのような印象を受けた。

純は、アサルト・アーマー操縦用のサポート・スーツというものを身に付け、訓練用アサルト・アーマーの操縦部に座っていた。ゴムに近い質感のサポート・スーツは、耐弾・耐衝撃性が高く、アサルト・アーマーの戦闘機動操縦時に身体にかかる負担を軽減し、操縦をし易くするためのものだ。

頭部には、後頭部辺りの操縦部位からヘッドギアのようなものが回され、丁度ゴーグルのように純の顔にセットされている。両腕は、肘から先がアーム・ボックスと呼ばれる操縦部位に突っ込まれ、脚部も同様に、膝から下がレッグ・ボックスと呼ばれる部分にはまっていた。ヘッドギア同様に、上方から回されたボディ・アーマーは、身体を固定する目的もあるのだろう。

視界はメック・スーツの時に近い感じだが、しかし、こちらの方が明瞭に視界が確保されている。ウィンドウが視界の四隅に映っているのは変わらないが、半透明になっており、視界を広く保っている。

「歩けるかね？」

ヘッドセットをつけた暁彦が視界の隅で言った。声は耳元から聞こえている。

純は、搭乗前に暁彦に言われた事を思い出しながら、脚を前に出す事をイメージした。搭乗前、彼は純にこう言ったのだ。

「身体を動かすつもりでやれば動く」

果たして、機体はその通りに右足を前に出し、床に着いた。

ずしつ、とした重さを、純は感じた。それは、本来であれば身体全体で振動として感知するものだったはずだが、今の純には、自分の脚の裏からの感覚として感じていた。

「どうだ？ 何か感じたか？」

「なんだか、本当に自分の身体みたいな感じがした……」

暁彦の言葉に純は率直に答えた。

移動した位置から、純が自分の首を動かそうとすると、アサルト・アーマーの首が動き、視界を動かしている。そして、純自身の首は動いていないのだ。まるで、自分の身体が二重になって、外側にしか命令を出していないような、変な感じだ。

「そうか……じゃあ、少なからず適性があるな……」

暁彦は小さく呟き、それじゃあ、と純が中に入ったアサルト・スーツに視線を向けた。

「走ってみてくれ、それから、ジャンプも」

その指令に、純は数歩下がってから、駆け出した。

生身の身体への神経が途切れて、アサルト・スーツの駆動回路と繋がったように、機体は走り、跳躍し、着地した。戦闘用のためか、その動きは生身の時のものとはレベルが違った。走る速度は思い通りに変化させられるし、跳躍や着地の力も思い通りなのだが、その基本値は、アサルト・アーマーを生身の大きさに縮小したとしても数倍はある。

「……すごい適性値だな……」

暁彦の呟きが聞こえた。

「模擬戦でもしてみるか……？」

「……模擬戦？」

純は、暁彦の言葉を反芻した。

「ああ、訓練用にペイント弾を使うものだ。康祐、準備してくれ」
結局、模擬戦をする事に決まったようで、純のアサルト・アーマーにはペイント弾の装填された拳銃が手渡された。
向き合うように立つアサルト・アーマーは、純が乗っているものと全く同じものだ。訓練用アサルト・アーマーが、同様の装備で向かい側に立っている。

先にペイント弾を命中させた方が勝ちという単純なルールだ。暁彦と亜沙は訓練室の監視室に退避し、模擬戦の様子を見ている。

「先に言つとくが、素人に負ける気はないぞ」

康祐からの言葉が、耳元の通信機から聞こえた。

「まあ、そんなすぐに勝てるとは思ってないさ」

挑発的な言葉に、純はそう応じた。

そう、簡単に勝てるとは思っていない。戦闘要員として訓練を受けているだろう康祐や亜沙を、素人の純が簡単に倒せてしまつてはいけないはずだ。

「よし、始め！」

暁彦の一言が引き金となって、純は横に跳躍すると同時に、康祐に銃口を向けた。

「……速い……！」

康祐が舌打ちするのが、耳元の通信機から聞こえてきた。

彼の機体は横へと跳んでペイント弾を回避し、純の方へと銃口を向けた。空中にいる純は、その手を天井に着いて押し返す事で回避行動を取る。着地と同時に横に駆け出し、拳銃の引き金を数回引いた。

ぱすぱすと情けない音と共にペイント弾が銃口から放たれる。康祐はそれを移動の向きを細かく変える事で回避し、反撃をしてきた。
「わっ！」

純は咄嗟に後方に飛び退いた。走っていた方向への力を強引に捻じ曲げ、機体が直角に移動する。慣性からか、純は身体が引き寄せられるような感覚を覚えた。

「……本気で行くぜ！」

その宣言と共に、康祐の鎧が床を蹴った。

純の射撃を跳躍して避けた康祐が、頭上から銃口を純に向けた。

「！」

純以外の、その場にいた者が息を呑んだ。

ぱしやりと音がして、康祐の鎧に赤い色が付着した。純は横に身を投げ出して、康祐に銃口を向けたまま倒れていた。

アサルト・アーマーから降りた純と康祐は、ロツカールームで着替えを済ませた。

「結果としては、トップクラスの適性だ。流石は天風の息子だ」

「……まさか、俺の両親は……」

暁彦の言葉に、純は驚いたような表情を向けた。

「ああ、戦闘要員だった。それも、トップレベルの適性だな」

純には返す言葉がなかった。

顔も見た事がない両親が、アサルト・アーマーに乗り込んで戦っていたというのは、不思議ではなかったし、予想出来た事でもあった。雄は、何度も助けられたと言ったのだ。それは、戦闘に参加していたというのと同義だ。

「戦闘要員としては、是非欲しいところだが……」

暁彦の隣で康祐が不機嫌そうに純から目を逸らしている。今日、アサルト・アーマーに乗ったばかりの素人に倒されてしまったのだ。戦闘要員として戦った経験があるのもとしては悔しい事だろう。

暁彦は素直に関心しているし、亜沙の態度は余り変わっていない。

「決めるのはあなたよ」

その亜沙が暁彦の言葉を継いだ。

アサルト・アーマーへの適性がある、というのは判断材料に過ぎない。戦闘要員としてイデアに参加するという選択肢が示されただけで、他の選択が不可能になったわけではないのだ。

純には一般人として暮らす権利もある。それを決めるのは純自身

であり、他の者が強制する事ではない。

その辺の事はアイデアの中では常識のようで、適性があるという理由で、強引に戦闘要員にさせようという意思はないらしかった。

「ゆっくり考えて答えを出せば良いわ」

亜沙が柔らかな笑みを浮かべて純に言った。

言葉の見当たらなかつた純は、それにただ頷いただけだ。

「亜沙、部屋まで案内してやってくれ」

暁彦が言い、亜沙は頷いた。そして、先にロッカールームを出て、純を促す。

純はロッカールームから通路に出て、亜沙の後について行った。

「アイデアのメンバー用区画の空き部屋を使ってね。結論が出てからちゃんとした住居は考えるみたいだから」

亜沙が言い、純は頷いた。

今後、純がどうするかを決めるまでは、いつでも返事が聞ける近くにおいておくという事なのだろう。アイデアに入るのであれば、そのままその部屋が純の部屋になるのかもしれない。

「とりあえず、今日はもう疲れたでしょ？ 明日は居住区に連れて行ってもらえると思うわ」

「居住区？」

部屋の前まで来て、亜沙は純に向き直ってそう言った。純は、いきなりの言葉に、目を瞬かせた。

「ええ、戦闘適性を見るだけじゃ、片方の面しか見れないもの。ちやんと、一般人としての生活空間も見ないと、判断材料としては不平等でしょ？」

「ああ、そういう事か」

純は納得して頷いた。

確かに、地下に生活空間を造っている中で、一般人がどういう場所に住んで、生活しているのかは知っておかねばならないだろう。ここはもう、外の世界と違うのだ。

アイデア

「じゃあね」

そう言って、純の返事を待たずに亜沙は来た道を引き返して去って行った。

それを見送ってから、純は自動ドアを潜って部屋の中に入った。寝るためのベッドと、机に、クローゼットが一つずつ。空き部屋にしては、掃除が行き届いた部屋だった。純は部屋の中に入った後、ベッドに倒れ込んだ。様々な事があって、疲れていた。

翌日、丁度純が目を覚ました直後、一人の少女が部屋に入ってきた。それも、ノックもせずだ。

「おはようっ！」

元気良く挨拶するその少女に、純は呆気に取られていた。

「おい、いきなりノックもせずに入るなよ、深玖！」

後から部屋のドアから顔を出したのは康祐だった。

純と視線を合わせると、気まずそうに視線を逸らす。

「あー、ごめんごめん」

少女は照れたような笑みを浮かべて純に頭を下げるが、純はどうして良いか判らず、ただ少女と康祐を交互に見ていた。

「……一体、何さ？」

ようやく純が言っていると、康祐が入り口の壁に寄りかかって苦笑を浮かべた。

「居住区の案内任されてさ、そいつは俺の妹の深玖ってんだ。元氣ばっか良くてな……」

困ったような顔をする康祐に、純はようやくと納得した。

深玖と呼ばれた康祐の妹は、恐らく染めたのであろう茶髪をポニーテールにしており、半袖のシャツと赤いミニスカートを来ていた。美人というよりは可愛らしい方だろう。歳は見た感じでは純よりも二つ程下のように思えた。

一方の康祐はややシワの寄ったシャツと、ジーンズという格好だった。髪の毛が不自然に跳ねているのは寝癖だろうか。

「ああ、そういう事か」

「道案内はもう一人いるんだけど……」

康祐が寝癖を手で掻きながら言った。

「相馬 瑠那って言うんだよ」

深玖が笑顔で言う。

その彼女は部屋の外で待っているらしく、部屋の中からは見えなかった。

「朝食はどうするんだ？」

純はベッドから起き上がりながら康祐に問い、クローゼットから紺色のジャケットを引っ張り出して羽織った。それは純がここに来た時、つまり昨日着ていた唯一の上着だった。

「外で食べる事になってるの」

康祐に聞いたつもりだったが、返答したのは深玖だった。

「準備は出来たな、行くぞ」

康祐が深玖を促して部屋の外に出て、続いて純が通路に出た。入り口脇の壁に腕を組んで一人の女性が寄りかかっていた。黒い長髪を首の後ろでまとめて垂らしている、背の高い、大人びた女性だった。純が出て来た時、閉じていた目を開き、彼女は純を一瞥した。かなりの美形で、落ち着いた服装がその品の良さを際立たせていた。

恐らくその女性が相馬 瑠那なのだろう。

「……何でこのメンバーなんだ……？」

康祐がぼやいたが、意味の解らなかつた純は何も言わなかつた。

そのままアイデアの施設のエレベータに乗った純は、そこから見える外の光景に言葉を失った。

アイデア

アイデアの施設は、この地下世界の中心にあり、天井にまで届く程の建物だったのだ。そして、天井のある空には照明があり、地下都市を照らしていた。周囲の街並みはほとんど外の世界と変わらないものに見えた。ただ、少しばかり窮屈そうな印象を受ける。

「地上には普通の人は出れないように、出入り口とアイデア本部の建

物が一体化してるんだよ」

深玖が純に説明してくれていた。

「今も少しづつだけど、地下の敷地も拡大してるんだよ。人口は増えてきてるから」

純は深玖から再度外の景色へと視線を向けた。

「ここが、人類にとつて最後の砦なんだ」

瑠那がぼつりと呟いた。

「これが、この組織の守っていたもの……」

純は景色を見下ろしながら呟く。

(そして、俺の両親が守っていたもの……)

後に続いた言葉を飲み込んだ純は天井を見上げた。

青空はなく、照明のついた無機質な装甲に覆われた天井があった。今までの人生を地上で過ごしてきた純には、何だか不思議な光景だった。

エレベータが最下層に着き、四人はエレベータを降りて建物を出た。

正面には大きな道路が通っていた。エレベータから見た光景でも、かなり大きなアイデアの建物を中心に地下の空間の端に至るまでの大通りが走っていた。恐らくは様々な状況を配慮しての道路配置なのだろう。他の部分には大通りから横に道が分かれるようにして伸びていた。

アイデアの建物は、天井の辺りが最も大きく、そこから少しずつ細くなるように下に伸び、地上に近づくにつれてまた大きくなるような形状をしていた。天井付近には、司令室や訓練室等があったため、大きくなっているのだろう。

「まずは飯だな……」

そう言うつと康祐はアイデア基地の近くにある建物へと純を案内した。

建物には、『Near』と書かれていた。恐らくはそれが店の名前なのだろう。中に入ってみると至って普通のレストランのように見えた。もっとも、地上で暮らしていた純の見てきた『普通』だっ

たが。

「どうやら、地上と地下では普段の生活は余り違いはないらしい。」

「俺、金持ってないぞ?」

席に着いてから気付いた純は、それを三人に向けて訊いた。

純の隣に康祐が、向かいには深玖が座り、その隣に瑠那が座っている。

「食事は今回、アイデアの必要経費で出るから気にしなくて良いよ」
深玖がにこにこしながら答えた。

「まあ、ここを守っている組織だからな、そういった事も含めて色々援助して貰っているわけだ」

頬杖について、康祐が補足説明を加える。

ウェイターに料理を注文し、純は近くの窓から外を眺めた。

アイデアの基地に続く大通りに向かう車はなく、手前で脇に逸れて行くものがほとんどだった。恐らく、アイデアの関係者はその半数以上が基地内部で暮らしているのだろう。そう考えればアイデアの建物に人の出入りしないのも頷けた。

「……あまり、変わらないんだな」

運ばれてきた料理　純の頼んだのはサンドイッチ　を齧りながら、純は呟いた。

料理や建物だけではなく、雰囲気も地上にいた頃と余り変わりがなかった。ただ、空が見えない事と、建物の密度が違うだけで。

「何が?」

意味が解らなかったのだろう深玖が首を傾げて訊いてきた。

「いろいろと、ね」

建物の外へと向けていた視線を深玖に向けて、純は答えた。

数種類あるサンドイッチの味も、地上で食べたものとほとんど変わらない。地上では、自分の身体を変形させる事の出来る者がいるというのに。

(結局、人間なのか……)

純は思った。リグノイドとてやはり人間なのだろう、と。

そう思うと、戦いたくないという気持ちが増えて行く。だが、それとは別に、リグノイドの裏の面、否、素顔を垣間見た純には、深い溝がある事も理解していた。

今までは義兄弟として一緒に生活を送っていた敦也は、純が普通の人間である事に気付いた時、本気で殺そうとしていた。それは、例え今まで家族として暮らしてきたものでも、普通の人間は、リグノイドにとってイレギュラーなのだ。

そして、それは普通の人間同士でも同じ事だ。嫌いな奴はとことん嫌いで、解り合う事は出来ないという、人間そのものでもあった。(俺の両親は、どう思ってたんだろう……)

純は、落としていた視線を再度窓へと向けた。

「どうしたの？」

深玖が菓子パンを齧りながら純に訊いてきた。

「ん、いや、ちょっとね……」

首を軽く横に振り、純は手に残っていたサンドイッチを口に放り込んだ。

セットになっていた紅茶のカップに指をかけ、口の高さまで持ち上げる。その水面は手から伝わる小さな振動を波紋に変えていた。揺れ動く面を数秒眺めてから口をつけ、喉を潤す。それほど熱くはなかったのが、余計に純自身の心境のように思えた。

「もしかして、まずかった……？」

恐る恐るというように、深玖が不安げな表情で純を見つめた。

「いや、美味かったよ」

苦笑を浮かべて純は答えた。考えすぎて暗い表情になっていたようだ。

「……考えていたんだろう、今後の事を」

コーヒーを一口飲んだ瑠那の告げた言葉に、純は一瞬身体が硬直したのを感じた。

「あ、ああ……」

驚きながらも、純は頷いた。

心でも読めるのだろうか、すごい洞察力である。もっとも、純の行動が分かり易かっただけかもしれないが。

「今は決断を焦る必要はない。あまり考え込まずに周りを見ておい
た方が良い」

自然な口調で言い、彼女はコーヒーに口をつけた。

純は何も返せず、仕方なく紅茶を一口飲んだ。それで飲み終えた
カップを置き、ふと、純は隣にいる康祐に視線を向けた。康祐は欠
伸をした後、オレンジジュースを一気に呷っていた。

「……なんだよ」

「いや、別に」

康祐に答え、続いて純は深玖に視線を向けた。

深玖はミルクティーのカップを両手で包み込むように握み、ちび
ちびと飲んでいた。ホットなのかもしれない。

「後はお前だけだぞ、早く飲んじまえよ」

それを見た康祐が深玖に向けて言った。

「……えー」

深玖は眉を潜めて抗議の声を上げるが、それでも飲むペースを速
めようとはしない。

「えー、じゃねえよ。悪いな、天風」

前半は深玖に、後半は純に、康祐は言った。

「純で良いよ」

天風、と呼んだ康祐に、純は苦笑を浮かべて答えた。

今まで知らなかった名字で呼ばれても、何だかしっくりこなかつ
た。かといって、今まで使っていた奈義、という名字もあまり好感
は持っていない。結局のところ、自分を示す指標は、今の純にとっ
てはその名前だけだった。

「そっか、俺も康祐で良いからな」

首肯し、純は深玖に視線を向けた。

ミルクティーを飲み終えたようので、満足気な表情で深玖が微笑ん
でいた。

「じゃあ、行くか」

それを見て、康祐が立ち上がった。

続いて瑠那、純、深玖の順で席を立ち、出口へと向かった。

レジのところまで康祐が一つのカードを店員に渡し、それを読み取った店員からカードを返してもらい、支払いを済ませ、四人は店を出た。深玖が言っていた事を考えると、恐らく、康祐の提示したカードは、アイデアから資金を引き落としているのだろう。

「それで、どこに行くんだ？」

純は康祐に向けて尋ねた。

この地下世界は、純にとっては全く知らない土地なのだ。

「あー、広場にも行ってみるか」

康祐が言う。

「行ってみるか、って……もしかして決まってるのか？」

「実は、な。ただ外を見せてやれって言われただけだし」

頬を掻きながら答える康祐に、純はどう対応していいのか分からなかった。

結局、純達は広場と呼ばれているらしい場所へと来た。そこは他の場所と違い、地面には土があり、木や草が生え、ベンチや池などがある公園風の場所だった。

その一画のベンチに、純、康祐、深玖はその順で腰を下ろしていた。瑠那はベンチの近くにある木に背中を預けるように寄りかかり、腕を組んで立っている。

純はベンチの背もたれに思い切り背を預け、天を仰いだ。自然的な部分のある場所から見上げる無機質な装甲の天井は、何だか妙な気分だった。

「ねえ、純」

深玖の声に、純は体勢を元に戻して顔を向けた。

「地上での生活ってどうだった？」

「……いきなり、何？」

「駄目？ 聞きたかったんだけど、地上の様子……」

深玖がまた不安げな表情で純を見つめた。
それを見て、純は、納得した。地下で暮らしてきた彼女には、地上での普通の生活がどうなっているのか知らないのだ。知りたくないのは当然の心理だろう。

「別に構わないよ。地上での生活か……」
数瞬考え、純は口を開いた。

「あんまりこと変わらないんじゃないかな。俺の場合は高校に行つて、授業を受けて、友達と話して、家に帰って飯食って、家族と話して。多分、一番違つるのは空が見えた事かもしれないな」

純は語った。お世辞にも上手いとは言えない語りだっただろうが。学校でのつまらない授業中に見上げた空は、毎日違つものだった。晴れ、曇り、雨、雪、それぞれの天気、雲の形や量の違いがあった。例えば曇りや雨、雪だとしても、だ。そして、夜に家の自分の部屋の窓から見上げた空。暗くても、真っ黒ではない空の色に、散りばめられた星の輝き。

純は地上での、今までの生活を語った。

「……ここじゃあ、空は眺められそうにないな……」

語り終えた純はそう呟いて天井を見上げた。

「そっか、色々あつたんだね……」

深玖が言い、純は小さく頷いた。

今までの様子からもっと色々と言つてくる事を予想していた純は、一言しか感想を述べなかつた深玖の素の部分を見た気がした。

「なあ、皆は何でアイデアにいるんだ？」

今度は純が疑問を口にした。

それだけは今日のうちに聞きたいと思つていた事だったし、純の今後を考える上でも重要な事だった。

「……俺は親父の影響だろうな。ここにいる人間が、いつか地上に戻れる世界にしたいから、いや、俺が地上で生活したいんだだろうな、きつと」

「私も地上で暮らしてみたいし、ここの人達も守りたいから」

康祐と深玖が先に答えたが、瑠那は無言だった。

「ほら、瑠那は？」

「……私はそうすべきだと思ったから」

深玖に促され、瑠那は一言だけ告げた。

心情を推し測る事の出来ない口調と言葉。何を思い、何がきつかけかすら、瑠那は語らなかつた。だが、純はそれならばそれで良いと思った。話したくないのであれば、無理に訊こうとは思っていないからだ。誰にでも触れられたくない事はあるのだから。もっとも、瑠那に触れて欲しくない事があつたかどうか判らなかつた。

ふと、気付けば広場には人の姿があつた。数人の男女が談笑しながら歩いていたり、子供達が遊んでいた。

外で襲われた純には、平穏な光景に見えた。恐らくは、危険が来ないと安心しきっているのだ。

そして、これらをアイデアが守っているのだと、純は改めて確認した。

純はアイデアの一室の前に立っていた。そこでは大和が傷の治療をしているはずだ。

ノックをしてから病室に入った純は、その中に先客がいた事を知つた。

「……近衛？」

「亜沙で良いわよ、天凧君」

彼女は大和のいるベッド脇の椅子に座っていた。

「それなら俺も純で良いよ」

亜沙が頷くのを確認してから、純は視線を大和に向けた。彼は起きていた。

「街を見てきたようだな」

大和の問いに純は頷いた。

ドアを閉め、亜沙とは反対側の位置に立つ。椅子がなかつたため、背後の壁際に立ち、背中を預けた。

大和は傷を受けた左肩と腹部に包帯を巻かれていた。布団がかかっ
つていて見えないが恐らくは左足にも包帯を巻かれているのだろう。
「実は君の会話は全てアイデアの主要人物には筒抜けだったんだ。私
と亜沙も君達の遣り取りは聞いていたんだ」

「……まあ、良いよ、別に大した事じゃないし」

純は苦笑を浮かべ、肩を竦めて見せた。

いつかは話す事かもしれないと思っていていた事でもあったため、純
はその手間が省けたと考える事にした。別にプライベートな事情も
話していなかったため、特に気分を害する事もなかった。

「それより、傷の具合はどう？」

「ああ、大分良い。集中治療されたお陰で表面的な傷は治癒してい
る。とりあえず明日には仕事に戻るだろうな」

大和は純に軽く笑みを見せた。

彼の傷は、左肩と左腿の深手よりも、腹部のダメージが深刻だっ
たと聞いていた。軽装鎧の内部機器と装甲の一部が腹部に食い込ん
でいたらしく、他の二箇所と合わせて出血が酷かったのだ。恐らく、
今は失った血を回復させている段階なのだろう。

「……決心はついたのか？」

大和の問いに、純は静かに頷いた。

何故、その決心を、アイデアの司令官である城山 雄ではなく、そ
れよりも先に大和に聞かせに来たのかは、純自身もよく解らなかつ
た。ただ、彼が純のために負傷したのである事は明白だ。そのため、
純は彼への見舞いはしたいと思っていたから、そのついでだと思っ
事にしていた。

「アイデアに入ろうと思うんだ」

一度、誰にも気付かれないように小さく息を吸い、純は告げた。

「俺の知らない両親が、何を思っただアイデアで戦っていたのか、俺は
知りたい。勿論、本人じゃない俺だから同じ考えにはならないかも
しれないよ。けれど、同じ事をやってみれば、少しは解るかもしれ
ないから。両親の事だけじゃなくて、色々」

両親の事を、どんな人だったのかすら純は知らない。アイデアに入り、そこで戦う事で両親に近づけるかもしれないと、純は考えていた。

そして、それだけではなく、純自身が見失ったものも取り戻せるかもしれない。どう生きていくのか、つまり、将来の事。更に、言葉として言い表す事の出来ないものも新たに見付かるかもしれない。

だが、純には別の目的も思い出していた。

(隆……………お前は戦闘に出てくるのか……………?)

学校であっさりと別れた、親友の隆一。彼だけは他のリグノイドが純を襲おうとする中、純を見逃したのだ。それが演技だったといえ、その可能性は否定できない。だが、純にはそれが演技とは思えなかった。

純が戦闘要員として前線で戦えば、いつか隆一に会えるかもしれない。そうなった時にどうするのかは判らないが、それでも会いたかった。あっさりとし過ぎた別れが、隆一には何か考えがあるのではないかと純に思わせたからだ。

「命を奪うとしても、か？」

「……………抵抗はあるよ。けど、俺は外にいたから、それらがどうなっていくのか、気になるよ」

大和の指摘に、純は少し考え、答えた。

まだ戦闘要員になると決まったわけではないが、恐らくは戦闘要員にさせられるだろう事は予測出来た。純の戦闘鎧適性検査の結果は、前線に出させるには十分過ぎる程高い数値だったからだ。

それに、純は一度引き金を引いていた。純を助けるために多くのリグノイドを殺めた大和を助けるために。

「リグノイドを討つ時は躊躇うんじゃないぞ」

「解ってる」

純は頷く。

躊躇えば殺されるという事は、身を以って体験しているのだ。大

和を助けた時、純は躊躇いを強引に捨て去った。そうしなければ大和は殺されていたのだ。躊躇えば、殺されるのは自分だけではない事を純は理解していた。

「じゃあ、俺はそろそろ部屋に戻るよ」

「城山、司令の所へは行かないのか？」

「後で行くよ。あの後三人に街中引つ張り回されたのも知ってるでしょ？」

苦笑し、純は答えた。

広場での会話の後、純は三人、主に深玖に街中を引つ張り回された。純の持ち物は全て地上に置いて来てしまつていたため、衣服などを購入したのは良かったのだが、深玖も服を選び始めて数軒の店を回り、途中で康祐が止めなければ純はまだ戻っていなかっただろう。

また、衣服店の他にも様々な場所を連れまわされた。もつとも、ここは純の知らない土地だったため、厭な事ではなかったが。

「なるほど、荷物か」

笑みを浮かべた大和に、純は頷く。

「荷物を置いたら司令室に行くよ」

そう言い、純は壁から背を離れた。

「私もそろそろ行くわね」

亜沙が言い、席を立った。

純が部屋を出て、通路脇に置いておいたバッグを掴んだ所で亜沙が通路に出て来た。バッグは街中を連れまわされていた時に購入したもので、その中には購入した数着の衣服を入れてあった。

「足、疲れてない？ ごめんなさい、私だけ椅子に……」

「俺が後から来たんだから気にしなくて良いよ」

亜沙が謝るのを、純は制した。

アイデア

自然と並んで歩く状態になった。恐らくは彼女の向かう場所が純の向かう場所と道が同じなのだろう。

「亜沙は、どうしてアイデアにいるんだ？」

純はふと、尋ねた。

「……実は私、三年前まで地上で暮らしてたの。両親はここに来る前に殺されて、私は大和さんに助けられたの。私は、あの時の思いを、ここの人達にさせたくないから」

「……悪い事訊いちゃったかな……」

亜沙の言葉に、純は気まずそうに視線を逸らした。

「ううん、いいの、気にしないで」

小さく微笑む亜沙に、純は頷く事しか出来なかった。

「ところで、方向同じだけど何かあるのか？」

純は半ば話を逸らすように、尋ねた。

「司令室に通信用ヘッドセットを一つ持っていかなきゃいけないのよ。だから倉庫に一度取りに行かないといけないの」

どうやら司令室の備品が壊れたらしく、それを補充しに行くのだそうだ。

倉庫は訓練室と同じ階層にある。訓練室は、戦闘鎧の動き回れる空間を用意するために部屋自体がかなり大きく、五階分程の高さを持っている。そのため、アイデアの建物の最上階、地上と接する天井壁に固定する形で存在している。訓練室の存在する階層で余った部屋が、大きさに倉庫とされているらしい。

途中で亜沙と別れた純は、仮の自分の部屋に荷物を置くと、またエレベータに乗って司令室のある階層へと向かった。

純が倉庫の前を通りがかった時、ドアは開いたままだった。恐らくは中にまだ亜沙がいるのだろう。

「あれ、アサルト・アーマーだよな？」

開いたドアの向こうにそれが見え、丁度ドアの中から出てきた亜沙に純は尋ねた。

それは紛れも無く、アサルト・アーマーだった。ただ、今までに純が見た、亜沙のものとも、訓練用のものとも異質なデザインだった。部屋の中が暗くて良く見えなかったが、全体的に線の細い、シヤープなデザインだった。

「それは失敗作なのよ。マインド・フォロウ・システムを初めて搭載したアサルト・アーマーの試作機であり、零号機。誰が乗っても戦闘機動が出来なくて、解体するのも勿体なくてお蔵入りしてるの」
戦闘機動というのは、文字通り戦闘用の行動の事で、これがなければリグノイドと戦う事は困難を極める。戦闘鎧には歩いたり走ったりするだけでなく、背部バック・パックに搭載されたスラストによる加速や突撃、滞空行動等があるのだが、それらが使えない場合、戦闘能力は明らかに低下する。

「動かないのか……」

「動かせないのよ……。どんなに適性が高い人でも、無理だったらしいわ。あなたの御両親にも無理だったそうよ」

ヘッドセットと接続用コードを片手に持った亜沙が倉庫のドアを閉めながら言った。

「そういうのもあるんだな……」

それを聞き、純は呟いた。

恐らく亜沙も扱うのは無理だったのだろう。両親が無理だったのであれば、その息子である純も可能性は薄い。

初めて造られたというだけあって、やはり解体し辛かったのかも知れないと、純は思った。

第三章 「狭間に立つ者」

第三章 「狭間に立つ者」

全体的にその部屋は暗かった。壁には窓すらなく、部屋の中にくつか置かれているコンピュータのディスプレイの光があるくらいだった。

それでも、今の隆一には暗くは見えていない。暗いのだという事は頭の片隅で判っているが、それが視覚情報と一致してはいない状態だ。

「 どうだ、慣れたか？」

かけられた声に、隆一はその声の主へと顔を向ける。

「 ……お蔭様で」

答えた隆一に対し、そこにいた男は頷いた。

「 とりあえず、身体の使い方は解った」

言い、隆一は右腕を剣状に変化させた。

一瞬だが変化させる部位全体に突き抜けるような痛みが走るが、その痛覚も直後には失せ、改変が始まる。全ての感覚がその部位だけ消え去っているにも関わらず、身体の形状を感じる事が出来る。更には、その形状を自在に変化させる事も可能だ。それでいて、一度決めた形状に固定させれば、その形状で安定する。

変化後の腕は、それが武器として使用するものであれば、かなりの強度を持たせる事が出来る。それら全ての決定は本人の意思なのだ。

今、隆一が暗い部屋を通常の明度で見れているのも、網膜の明度調節をする細胞を微妙に変化させているためだ。

「 けど、俺が普通じゃないってというのはどういう事だ？」

剣状に変化させた腕を一振りすると同時に元の腕に戻し、隆一は言った。

腕を剣状に変化させた時と同様に一瞬だけ痛みを感じた後、腕が元に戻る。

それは全てのリグノイド共通の能力だ。だが、隆一は普通のリグノイドではないという事だった。

隆一は今まで、リグノイドとしての基本的な能力である、身体構造改変機能の訓練を行っていた。それは、隆一がリグノイドとして自分自身の身体を扱えるようにするためのものだ。

今まで生きて来て、隆一はリグノイドという存在すら知らなかったのだ。普通に考えてもそれはおかしい。同級生達だけではなく、隆一よりも年下の者達までリグノイドとしての力が使えるのだ。

「簡単に言えば、ワンランク上の存在という事になる」

「あんたと同じように？」

男の言葉に、隆一は直ぐに言葉を返した。

「そうだ。お前は俺と同等の存在だ」

答えは直ぐに返される。

(……同等、ね……)

それが、隆一が今まで他のリグノイドと違って情報が途絶されていた理由だった。

ファースト・リグノイド、荒海 斗雨也と、水無瀬 隆一は同格の存在だったのだ。

自分以外のリグノイドに対する情報統制・遠隔操作・意識統一などの可能な、ワンランク上のリグノイド。それが可能なために、逆に他のリグノイドと同様に斗雨也の情報統制などを受け付けなかったのだ。結果として、隆一はリグノイドの存在すら知らないリグノイドとして生きて来たのだ。

「まさか、自然に誕生するとは思わなかったがな」

男、斗雨也が言う。

隆一の両親は通常のリグノイドであり、純の追撃時に死亡している。だが、今現在いる状況の事を考えれば、それは隆一には些細な事にしか思えなかった。

通常の、情報統制下にあった両親から生まれたにも関わらず、隆一はその上の段階のリグノイドだったのだ。隆一と違い、情報統制下にあったというのであれば、両親の本当の姿は隆一が見てきたものではないのかもしれない。仮に、隆一が見てきた両親が本当の両親だったとしても、それでも見えなかった部分があった事に変わりはないのだ。

カルマが遺伝するというのは、生殖細胞にまでナノマシンが浸透しているからだ。そうして出来た受精卵は無論ナノマシンを持ち、細胞分裂に伴って自身を複製して行く。そうして、リグノイドは遺伝して行くのだ。

だが、どうしてもカルマが浸透しない場所がある。それが脳だ。脳にカルマが浸透し、それで構造を改変してしまえば、神経細胞の絡み合いで成立している思考・記憶・意識などの全てが崩壊してしまうからだ。そのために、誕生過程での細胞分裂中に、脳細胞となる部位のみはナノマシンの複製が抑制されている。

しかし、斗雨也は脳の一部にカルマが存在していた。それが、斗雨也が他のリグノイドに干渉出来るという理由だ。

構造を改変するという機能のない、脳はその部位に適応した新たなナノマシンが存在しているのである。そのナノマシンは、他のリグノイドの脳の付近に存在するカルマに信号を送信する事が可能となっていた。本来、カルマ同士も同様の信号を送りあって身体構造の改変を行うなどをしているが、その信号を他者に送る事は出来ない。脳という、意識等を司る特殊な部位に浸透したからこそ、他者に対して信号を送れるようになったのだ。

現時点では、脳の一部にカルマが浸透したリグノイドは自然発生した例はない。隆一が初めてなのだ。

誕生過程で脳の一部にカルマが浸透するという可能性はゼロではない。しかし、極めて低い事は今までに例がない事からも明らかだ。

「……俺は世界がこんな風になってる事すら思わなかったけどな」
斗雨也の言葉に対して、隆一は小さく呟いた。

それが斗雨也の耳に届いたかどうかは隆一にはどうでもいい事だ。明らかに進歩している科学技術。しかしそれにも拘らず、表の面だけでは今まで通りに世界を見せている。

カルマを造ったであろう技術者達は全て死に、日本にいるほぼ全ての人間はカルマが浸透したリグノイドだ。それが斗雨也の思惑通りなのかは隆一には判らない。

しかし、今、日本は斗雨也が動かしている事だけは間違いはないだろう。いや、世界そのものも動かし始めているのかもしれない。

日本の地上で暮らす全ての人間がリグノイドであるのならば、今までに海外に旅行に行き、そこで家庭を持った者も少なからずいる。そうであれば、カルマは海外にも広がり始めていると考えた方が自然だ。

何も知らずに生きている全ての人間が、その無意識を斗雨也に掌握されている。

ただ、地下に逃れた僅かな人間と、隆一を除いて。

「それで、お前はとうするつもりだ？」

「……何でそんな事を訊く？」

斗雨也の言葉に、隆一は訊き返す。

問われたのは今後の身の振り方だ。

今現在、斗雨也は地下に残った人間達を殲滅しようとしている。リグノイドに対抗する手段として、彼等はアサルト・アーマーという機動兵器を投入して来た。単体として戦闘能力の劣る通常の間人間達がリグノイドに対抗出来る唯一の兵器。その戦闘能力は複数のリグノイドを同時に相手に出来るまでのものだ。

今のところ、隆一は戦場に出てはいない。それは、斗雨也によって無意識を掌握されてしまう他のリグノイドと違い、斗雨也の干渉を一切受け付けない隆一だから選択出来る事だ。

たとえ争いを好まない者であっても、斗雨也の働き掛けを拒む事は出来ない。無意識のうちに全てを納得し、自らその力を振るう事になるのだ。

その中で隆一唯一人が戦闘に参加しないというのも、不可能ではない。

「俺にはお前の考えが読めん」

斗雨也も隆一へと視線を向ける。

「読めない奴が一人ぐらいいた方が退屈しなくてすむんじゃないか？」

肩を竦めて隆一は答える。

他者の考えを読める斗雨也は実質的にリグノイドの頂点に立つ者だ。斗雨也にとって、隆一は貴重な人間であると同時に不確定な存在でもある。

(……俺だつてあんたが何を考えてるのか分からないんだ)

お互い様だと、隆一は密かに思っていた。

何故、斗雨也がリグノイド以外の人間を排除しようとしているのか、結局のところ隆一も知らないのだ。それに、斗雨也の目的の矛盾も気に掛かる。

「……まあいい。それよりも、お前に戦う意思はあるか？」

斗雨也の言葉からは隆一の言葉に対する答えは読み取れない。

「とりあえず、戦場とやらも見てみたい、かな」

隆一が斗雨也へと視線を向ける。

「なら、次の襲撃に参加してみるといい。この後、地上にある資源採掘プラントを攻撃する」

斗雨也が言った。

地下で抵抗している者達も完全に地下で生活出来ている訳ではない。地上に依存しなければならぬ部分はまだ残っているのだ。そこを突き、確実に追い詰めて行くのが、今の斗雨也の考えのようだ。

「中枢部は判らないのか？」

「……自分で調べてみればいい」

隆一の言葉に、斗雨也はそう答えた。

その斗雨也へと目を向けた隆一には、斗雨也の表情に微妙な変化が生じているのが判った。それが何なのかは判らないが、何かしら

事情がある事は確かだ。

「俺はここで遠隔的な指揮を執る。戦闘に参加するなら自分で調べて動いてみる」

斗雨也の言葉に隆一は口元に小さく苦笑を浮かべた。

恐らく、他者の意識に干渉する訓練も行えという事だろう。今の隆一には実際の戦闘経験すらないのだ。それらをこの襲撃で学べという意味合いが含まれているのだろうと、隆一は解釈していた。

これから隆一が生きていかなければならない世界の事を、隆一はまだ知らなさ過ぎるのだから。

「……そうさせてもらうさ」

言い、隆一はその部屋を後にした。

数時間前の事を思い出し、隆一は小さく溜め息をついた。

今現在、隆一がいるのは戦場だ。

資源採掘プラントでは地下勢力の者達が多数のリグノイドを相手に戦っている。隆一は一際高い建物の上でそれを見下ろしていた。

(……抵抗、激しいな)

隆一はそう感じた。

地下勢力の者達の戦い方は必死と呼べるものだった。隙を見せぬように、出来るだけ多くの敵を倒すように、連携を忘れないように持てる限りの技術を使って戦っているのが判る。

建物が崩れたとしても気にかげず、この戦闘に勝利する事だけを考えて戦っているようにすら思えた。

恐らく、重要なのは地表よりも下にある採掘プラントだ。上にある建物には重要なものはないのだろうと、隆一は判断した。そうでなければ、アサルト・アーマー達が建物に当たる事も無視して攻撃をする訳がない。地下の人間達にしてみれば、この資源採掘プラントも重要な施設であり、なくてはならないものなのだ。

隆一の目に留まったのは四機のアサルト・アーマーと、一人の子供だった。

「リグノイド……？」

思わず隆一は呟いていた。

その子供は明らかにリグノイドと判る。リグノイドの間でアウトアボデイと呼ばれている、カルマを持つ細胞の集合体を用いて身体構造を拡張しているのが離れていてもはっきり判った。

人間の身体を構成する一般的な細胞に、カルマが浸透した状態のものがアウトアボデイと呼ばれる、リグノイド専用の戦闘能力強化デバイスだ。それ単体ではただの妙な塊にしか過ぎないが、リグノイドがそこに触れる事で、自身の身体と同様に操る事が出来る。自身の身体と同化するが、それが元々自分の肉体ではないというのは無意識のうちに判るようで、アウトアボデイを切り離れた時にその身体にアウトアボデイが残る事はないらしい。

そのデバイスを使い、大きな一對の翼と、肘から先を長い剣状にした複数の腕で、その子供は自分と同じリグノイドを切り裂いている。

(………どういう事だ……？)

隆一はその光景が不自然に思えた。

その子供が隆一や斗雨也と同じ存在であるのなら解らない事ではない。確かに、斗雨也は隆一が存在を今まで知らなかったのだから、その子供も同格の存在であるならば、先に地下勢力に拾われたのであれば、有り得ない事ではないだろう。

「………まあ、いいか」

呟き、隆一は腰を上げた。

次に視線を向けたのは、四機のアサルト・アーマーだ。

視力を調整し、距離的にはかなり離れた場所にいる隆一でも、その戦闘が見えるだけの視力となっている。

その視界に入るのは、その地下勢力のアサルト・アーマーの中でも一際強い四機だった。一目で、他のアサルト・アーマーとその四機が違うと判るのは、その四機がそれぞれ特徴があったからだ。

一機は、均整の取れた、薄い青灰色のカラーリングの機体。別の

一機は緑色のカラーの、射撃重視型なのだろう、全身に銃火器を搭載して周囲に攻撃をしている機体。もう一機は紅茶色とでも言ったような色の機体だった。最後の機体は、最も細身、でダークグレーのカラーリングにショットライフルとグレネードライフルらしいものを持ち、リグノイドを薙ぎ払っている。

(主力、かな……?)

その四機が主力なのだろうと、隆一は予想した。

他の機体にもそれぞれ個性らしいものは窺えたが、その四機が特に目に付いたのだ。それに、その他の機体がその四機の補佐をするように攻撃を繰り返しているのも、それを証明している。

(……まあ、俺はアイツには干渉されないみたいだしな……)

隆一は一度息を吐くとその建物から飛び降りた。

下から吹き上げるように感じられる風に髪や服が逆立つ。それを感じながら、隆一は右腕を変化させた。鉤爪のように変化させた右腕を建物に突き刺し、減速に使う。

右肩に大きな負担が掛かるが、リグノイドとして自身の身体能力の向上が可能となった隆一には、その負荷も、身体構造改変によりほとんどなくす事が出来ていた。筋肉細胞の強度や弾力性等をカルマの作用で一時的に引き上げているのだ。

減速し過ぎて止まらぬよう、鉤爪の角度を微妙に調整し、速度を調節する。そうして建物から地面へと着地し、隆一は静かに戦場へと駆け出した。

恐らく、隆一がそこに辿り着く頃には戦闘は終わっているだろう。

(さて、俺はどうするか……)

走りながら、隆一は考えていた。

隆一が取れる行動は多い。そのどれを選択するか、隆一は考えているのだ。

「とりあえず、終わったね……」

聞こえた声に、隆一は足を止めた。

建物越しに聞こえた声の主を見ようと、隆一はその建物の屋上に

跳んだ。身体構造改變能力を活用し、音も無く着地すると同時に気配を消すようにしてそこから会話の様子を覗く。

事前に確認しておいたアサルト・アーマーのレーダー範囲の外から、隆一はその会話を眺めていた。

「……守り切れたな、今回は」

全身銃火器のアサルト・アーマーの胸部ハッチに腰を下ろした少年が告げる。着用しているゴム質のようなスーツは恐らく操縦用のものだろう。

「でも、また攻めて来るでしょうね」

青灰色のアサルト・アーマーの胸部ハッチから上半身を出した女性と言った。

どうやら、彼女が来ているスーツの色から、着用する操縦用スーツはその人が乗るアサルト・アーマーに対応しているらしい。

「戦力は向こうのが圧倒的だもんね……」

紅茶色の機体の胸部に両腕を乗せ、その上に顎を置くような姿勢の少女が呟く。

茶髪でポニーテールのその少女に、隆一の視線が向かう。

(お、可愛い娘……)

あどけなさの残る、明らかに他の者よりも年下のその横顔を、隆一は純粹に可愛いと思った。その年齢で戦っていたという事には驚いたが、センスがあるのならそれに見合う場所が与えられて当然かとも思う。

「流石に、いつまでもこのままって訳にもいかないしな……」

「敵の司令塔、早く探し出さないとまずいよね……」

少年に頷き、ポニーテールの少女が言った。

(司令塔……アイツの事か……)

間違いない、斗雨也の事だろう。

斗雨也さえ倒せれば、攻撃する司令塔がなくなる事でリグノイド達の統制は乱れるはずだ。そうなれば、地下勢力の人間達に対する攻撃は格段に減る事だろう。現状でかなり厳しいのであれば、だい

ぶ楽になるはずだ。

「私達の方も被害ゼロって訳にはいかないしね……」

青灰色のスーツの女性が言う。

遠くから戦闘を見る限りでも、アサルト・アーマーは数機破壊されていた。被害ゼロですら、資源的に厳しい状況にある地下勢力としては、その戦力を失うだけでもかなりの負担だ。

抵抗を続けてはいても、このままの状況が続けば地下勢力が敗北するのは目に見えている。

「……今、他の戦闘要員が輸送車両に乗り込んだ。私達も向かおう」
今まで黙っていたダークグレーの機体から声がした。声から女性のものだと判るが、感情が含まれていない素っ気ない口調だった。

恐らく通信か何かで伝えられたのだろう。隆一には何も聞こえなかった。

「そうね、行きましょう」

青灰色の女性が頷き、アサルト・アーマーの内部に消えた。

「次からは純も戦えるらしいから、少しは楽になるかな……？」
ぽつりと、ポニーテールの少女が言った。

(…… ! やっぱり、辿り着いてたんだな……)

隆一はその言葉に、もう別れて久しく感じ初めている親友を思い浮かべた。

別れてからそれ程時間が経っている訳ではないのに、その間に見てきた様々な事情が、隆一と純との間に大きな壁を造っているように感じられる。

今の隆一には、純は手の届かない場所にいる。そして、純からしても、隆一は手の届かない場所にいる。

(……じゃあ、少し動いてみるか)

隆一は建物から飛び降り、四機のアサルト・アーマーのいる方向へと向かった。

それに対し、四機は直ぐに反応を起こした。恐らく、レーダーの範囲内に入った隆一を確認したのだろう、銃火器が隆一へと向けら

れている。

「……とりあえず俺は戦う意思はないぜ」

先に告げ、隆一は両手を挙げた。

銃口は下ろされてはいないが、攻撃してこない事から、隆一は手を下ろした。警戒はしているが、隆一の言葉を聞くという考えはあるらしい。

少しでも情報が欲しいという事だろう。それが罠の情報だったとしても、地下勢力の者達にとっては、何も情報がないよりはマシなのだ。罠だったとしても、そこから新しい情報を得られる可能性があるのなら、動くべきだ。

「何の用だ？」

警戒心を隠そうともせず、少年が問う。

「ちよっとした忠告をしとこうかと思つてね」

「……忠告？」

隆一の言葉に、青灰色の機体が答えた。

「どういう事？ あなた斗雨也なんでしょ？ 身体は違うけど……」

ポニーテールの少女の声が隆一に投げられる。

恐らく、斗雨也が身体を操って会話させているのだろうと考えたのだ。今まで問答無用で攻撃して来ていたリグノイドと違い、会話をしようというのはそれが他のリグノイドと違うという証明にもなる。前にもそういう事があったのかもしれない。

「アイツは関係ないな。俺は俺だ。ま、信用出来ないかもしれないけど」

隆一は首を振り、言った。

仮に、地下勢力が斗雨也に話しかけられて罠に掛かった経験があるのであれば、隆一を信用するのは難しいだろう。リグノイドでない人間が、リグノイドの違いを区別するのはほぼ不可能だ。ましてや、敵対関係にあるのであれば、その見分けをする必要もほとんどない。

「それで、用件は何だ？」

アイデア

ダークグレーの機体が銃口を逸らさずに問う。

「……近いうちにあんたらの本拠地は攻撃されるかもしれない」
隆一は答えた。

恐らく、斗雨也は本拠地攻撃の準備を進めているはずだ。隆一は確信していた。

いや、既に斗雨也は本拠地の場所を掴んでいるだろう。

「……どういう事？」

「斗雨也は多分、あんたらの本拠地を狙うタイミングを計ってる」
青灰色の機体の問いに、隆一は答えた。

斗雨也も馬鹿ではない。ただ本拠地を攻めても防衛されてしまう事は解っているのだ。本拠地の場所を掴んだからといって、攻め落とせなければ意味がない。アサルト・アーマーが複数のリグノイドに対抗出来るという事を解っているから、ただ攻める事はせず、最も効果的な時に攻撃を行うつもりなのだろう。

「お前、本当に斗雨也じゃないのか？」

少年が問う。

「なあ、奈義 純って奴は元気にしてるか？」

その少年の言葉を無視して、隆一は尋ねた。

「純？ 天凧 純の事？」

「そうか、あいつの本名、天凧っていうのか……」

紅茶色の機体に乗っている少女の言葉に、隆一は呟く。

純が養子であり、本当の名字が違う事は知っていた。リグノイドではない純の両親もまた、リグノイドではなかったのだろう。そうであれば、地下勢力で本名が分かってても不思議はない。

「純に会ったら伝えてくれないか？」

一度そこで間を置き、隆一は口を開いた。

「 近いうちに会いに行く、と」

「あなた、名前は？」

「……隆一。それだけで解るはずさ」

ポニーテールの少女の声に、下の名前だけ告げ、隆一は一步後退

した。

「じゃあな」

言い、隆一は後方へ跳躍した。

通常の間を遙かに上回る身体能力で隆一が後方へと飛び退く。

「あつ、待って！」

ポニーテールの少女が隆一へ手を伸ばすようにして呼び掛けるが、隆一は小さく笑みを浮かべただけでそれを無視した。

空中で前後を反転し、着地。直ぐに地を蹴ってその場を後にした。四機のアサルト・アーマーが隆一を追ってこない事から、あの四人に隆一は敵として認識はされていないようだ。だが、味方と見られていない事も確実だ。大方、不確定因子として次に出会った時にどうするかは本拠地で決めるのだろう。

(……純、お前は動くつもりだ？)

純が地下で何を考え、どんな決断を下したかははっきりとは判らない。

だが、隆一は確かに純が戦闘に参加するという言葉をあの四人の会話から聞いている。楽になる、という言葉は、アサルト・アーマーが純に使えると考えて間違いはない。

ただ、問題なのは純の戦う意思だ。もしかしたら隆一も敵と見做す可能性もあるのだから。

(……その時は、別の手を考えないと……)

まだ自分の位置を確定出来ないでいるが、一つだけ決めている事は変わらない。

隆一は、一度純に会って話をしようと思っていた。それがどんな状況であろうと。

アイデア

アイデアの一員となった純は、この数日のうちに戦闘要員としての基礎訓練を受けた。地下に来た当日に康祐と模擬戦を行った、訓練用アサルト・アーマーを用いて実動訓練を行い、操作に慣れるため

に訓練を行っていたのだ。

現在、純は自分のアサルト・アーマーのパーツ構成を選択し、実戦用のアサルト・アーマーを開発して貰う段階になっている。アイデアの一員となった時に貰った携帯端末でパーツ・アセンブリ・プログラムを用いてパーツ構成を済ませ、丁度送信し終えたところだった。

実際に戦えるようになるのは明後日になるだろう。

訓練用と実戦用との違いは、主に武装に関してだ。訓練用では、ペイント弾入りのハンドガンと、ただのナイフを用いる仮想プログラムを組んで行すが、実戦用で選べる武装は多い。扱えない武装が多いため、その武器を使った事による影響は、実戦でしか解らないのだ。

ふと、純の部屋のドアを叩く音が聞こえた。

「……………？ どうぞ？」

驚きながらも純が答えると、そこから亜沙、康祐、深玖、瑠那の四人が入って来た。

その四人は先程まで出撃していた主力達だ。帰って来たというのは判るが、純に何か用なのだろうか。

「純、隆一って、知ってる？」

「！」

深玖の言葉に、純は驚愕の視線を向けた。

その反応に、深玖達が顔を見合わせる。

「隆一だって？ まさか、会ったのか？」

思わず口に出して聞いている。

自分でも動揺しているのだと、解った。

「……………リグノイドでも知り合いだと言えるか？」

「あいつは俺の親友だ」

康祐の問いに、純は答えた。

確かに、純の義兄弟は純がリグノイドではないと判った途端に攻撃をして来ていた。もし、それがリグノイドの本性なのだとしたら、

隆一にも当てはまるかもしれない。

「……あいつは、俺が襲われるまで何も知らなかった。普通のリグノイドとは違うのかも知れない」

純の言葉に、四人が顔を見合わせる。

「確かに、斗雨也の統制を受け付けられないリグノイドもいるからな…

…」

「そうなのか？」

康祐の呟きに、純は尋ねた。

「ええ、アイデアの戦闘要員の中に一人、リグノイドがいるのよ。斗雨也と同格のリグノイドらしくて、斗雨也の影響を受けないの」

その純に、亜沙が答える。

「ただ、隆一とかいう奴を味方と判断するのはまだ難しいな」

康祐の言葉ももつともだ。

アイデアで過ごす間、純はリグノイドについても学んでいた。アイデアで解った部分だけだが、それでもリグノイドについて何も知らないよりはマシだ。

斗雨也によって行動を操作されているのかどうかは、外観からでは判断出来ない。今まで通りに振る舞っていたとしても、それが斗雨也による芝居という事も考えられるからだ。そのため、アイデアとは敵対関係にあるリグノイドを安易に信用する事は出来ない。それが元で地下内部から攻撃されてしまう事も考えられるのだ。

地上で過ごした純と違い、地下で暮らした者にとって隆一の出現は不確定因子となっっているはずだ。

「それで、隆一は何て言っただんだ？」

「うん……近いうちに会いに行くって」

純の問いに、深玖が答えた。

「……ここが狙われているとも言っていた」

深玖に続いて、瑠那が呟いた。

その言葉に、純は言葉が出なかった。それは、リグノイド側がアイデアの本拠地の場所を知っているという事だ。敵か味方かはともか

くとして、隆一を信用している純は、その可能性が限り無く百パーセントに近いのだろうと判断していた。

「本当だと思うか？」

康祐の問いに、純は頷く。

「……俺は信用する」

純は告げた。

隆一が純の敵となる事もあり得るのは解っている。いや、純個人が敵と見做さなくとも、イデアという組織全体が隆一を敵と見做す可能性もある。ただ、そうしてたとえ敵同士という形であっても、純は隆一と一度話をしたいと思っていた。

今では純の唯一の親友となってしまう隆一が、何を考え、どういう決断を下したのか。

「司令に話して来る」

純は四人の返事も待たずに部屋を飛び出した。

通路を駆け抜け、司令室に辿り着くまで、純は基地が襲撃される瞬間がどうなるのかを考えていた。

現在、イデア本拠地はリグノイドには知られていないとされている。しかし、仮に敵が知っているのだとすれば、イデア本拠地の場所が判らないかのように他の場所を攻撃していた事になる。何故直ぐに攻撃を仕掛けなかったのかは解らないが、隆一が教えたという事はそう遠くない未来に本拠地が襲撃される可能性があるのだ。

だとすると、何故、イデア本拠地が解ったのだろうか。情報に関してはイデアはかなり慎重になっているはずだ。純を救出する時にもかなり動き回った記憶がある。十分注意を払っているにも関わらず、情報が漏れていたとなると、どこかに穴があるはずだ。

重要なのはそれだけではない。敵がどのようにして基地に攻撃を仕掛けてくるかも問題だ。内側から崩されるという事はないだろうが、そうなるかと真上から攻撃される事になる。包囲されれば不利になるのは確実だ。

司令室へ辿り着いた純は扉を開け、中に入った。

「……純か？」

アイデア司令の雄が純の存在を確認し、言う。

「司令、話があります」

「隆一という者の情報なら、知っている。出撃した部隊の移動中にメールが来たからな」

雄の答えに純は呼吸を整えながら歩み寄る。

言われて気付いたが、司令の元には全ての情報がいち早く集められるはずなのだ。隆一の情報が届いていても不思議はない。むしろ当然の事だろう。

それに気付かなかったのは、恐らく純がそれだけ動揺していたためだ。

「……君は、どう思う？」

雄が純の目を見つめ、問う。

「隆一は信用出来ると思います」

純はほとんど間をおかずに答えた。

それは純の勘でしかない。隆一が斗雨也と同格の存在だったとして、手を組んでいないという保証はないのだ。そうでなくとも、斗雨也を囮にした隆一の策略と考える事も出来る。

リグノイドの真意を掴む事が出来ない純達には、どれが真実かは判らない。勿論、純自身にも、隆一が敵か味方ははっきりと断言出来る訳ではない。

だが、それでも純は隆一を信じたかった。

「……俺は、信じたい」

ほとんど聞き取れない声で、純は付け加えた。

それが本音だ。

「……そうだな、大和からも彼の事は聞いている。彼が斗雨也と同格のリグノイドという事も考えられる」

「……司令は、どうするつもりですか？」

雄の言葉に、純は司令を見た。

地下にいる人類を守る責任者の立場にいる者としては、不確定な

事態に際して、どのような結果になっても対応出来るような策を講じる必要がある。

隆一という言葉に対して、アイデアがどう動くのか、純は司令の言葉を待った。

「……警戒するに越した事はない。純、君は彼と会話するのだろうか？」

「隆一とは、一度話す必要があると思ってましたから」

「なら、その時に真意を聞き出してくれ。それまでは、彼を敵とは認識しないようにしましょう」

「元よりそのつもりです」

雄の言葉に、純は頷いて答えた。

それは、ほとんど現状維持に近いものだった。隆一に関しては純との接触があるまで保留とされ、基地襲撃の可能性ありという情報は考慮に入れた上でこれから動く。アイデアとしてはそれが一番良い体勢だ。

「……ただ、彼が地下を脅かすような事があればその時は」

「俺があいつを殺します」

司令の言葉を遮り、純は告げた。

敵と見做されるような事になれば、純は隆一からその真意を聞き出して、自らの手で命を奪うつもりだった。他の誰かに殺され、本人の言葉を聞けない状態で処理されるのは、純自身が納得出来ない。それに、どんな結果に転ぼうとも、純が隆一を殺す事になれば、他の誰かを責めなくて済む。純自身が自分を責めれば良いのだ。他の誰かに当たるよりは、その方が良い。

「……そうか」

純の目を見つめ、雄は言った。

その揺ぎ無い意志を察したのだろうか、雄は純を止める事もせず、ただ頷いた。

「じゃあ、これで失礼します」

言い、純は司令室を出た。

その扉を開けたところには、先程会話していた四人が立っていた。
「……いいのか？」

康祐が問う。

恐らく、雄との会話を全て聞いていたのだ。

親友を殺すという言葉に、康祐が動揺しているように見えた。

「いいんだ」

小さく笑みを浮かべ、純は答えた。

「そんな！ 親友なんですよ？」

深玖が純に言う。

「親友だからこそ、他の誰かに処理されるのは厭なんだ。今更、あいつを避けるような事はしたくない」

真正面から隆一とは対峙しようと、純は思う。

今までも隆一とはそうしてきたのだ。家族にも話さないような事を打ち明け合えた隆一だからこそ、地上と地下に別れた今でも、隆一とは正面から向かい合いたい。

「……あいつがお前より強かったらどうする？」

「……刺し違えてでも、倒す」

瑠那の言葉に、その鋭い視線を見返して純は答えた。

リグノイドの隆一が、アサルト・アーマーに乗った純よりも強いという可能性もある。そうなれば、被害を被るのはアイデアなのだ。

瑠那はそれを心配しているのだろう。

それでも、純は退く気はなかった。

「……その言葉、忘れるな」

瑠那の言葉に、純は無言で擦れ違う。

亜沙が心配げな視線を向けているのが見えた。純は少しだけ哀しげな笑みを浮かべ、亜沙とも擦れ違った。

そのまま、純は自分の部屋へと向かった。

アイデア

翌日、昼食を終えたところで基地内に警報が鳴り響いた。

「第二外部発電所への敵の接近を確認！ 戦闘要員は全員直ちに戦闘態勢で格納庫に集合して下さい。繰り返しします……」

「警報と同時に放送が入り、状況を知らせる。」

地下で出来る事には限りがある。通常の生活をしていても、エネルギーや食料等が百パーセント循環出来ている訳ではなく、足りないエネルギーを補う発電施設や、鉱物資源等を得るための施設が必要になるのだ。そちらをリグノイドに狙われているというのが現状で、イデアはそれらの施設を守るために戦闘要員達を出撃させている。

「丁度良い、純。お前も一緒に来い」

「え？ でも、俺の機体は……？」

通り掛かった暁彦の言葉に、純は首を傾げた。

純のアサルト・アーマーは今現在組み立て中で出撃可能な状況ではない。

「詳しい説明は後だ。移動中に教えてやる」

暁彦に促されるまま、純はそれに従った。

外部にある施設までの移動は地下に設置された通路を輸送車両で移動する。その間に説明するという事らしい。

暁彦と共にロッカールームに入った純は、予備のサポート・スーツを身に着けると、暁彦と共に格納庫へ急いだ。

格納庫内のメンテナンス・ベッドにセットされていた複数のアサルト・アーマーが全て消えていた。組み立て途中の純の機体だけを残して。

「隊長、全機輸送車両に積み込みました！」

整備員が暁彦に駆け寄り、継げる。

「解った。戦闘要員は？」

「後数人です。三分以内には出撃出来るはずですよ」

「よし、純、乗り込むぞ」

整備員の言葉に頷き、暁彦が純を見た。

「あ、はい」

それに応じ、純は暁彦を追って大型の輸送車両の格納部位に入った。

基地格納庫内にあった全ての機体が並べられており、そのパイロットが次々と乗り込んで行く。

「純、君には空き機体を使ってもらう事になる」

直ぐに輸送車両が動き出し、暁彦は純を奥へと案内する。

「空き機体？ あったんですか？」

先程格納庫を見たところから推測する限り、予備機というのがあったのかどうか疑問だった。

何せ、組み立て途中の純のアサルト・アーマー以外の全てが輸送車両に積み込まれているのだ。予備機として残されているものが全くないという事は、出撃可能なものは全て出撃させているという事だ。

「……先の戦闘で命を落とした者の使っていた機体だ」

「！」

暁彦の言葉に、純は案内された機体に目を向けた。

パーツ・アセンブリで見た、最も標準的とされるパーツで構成された機体がそこにある。手に持たせられているのは、右が単発式ライフルで左にはバズーカだ。

「使える戦力は全て投入しなければならんだ。解ってくれ」

表情を強張らせていたのだろう純に、暁彦が告げる。

「……はい」

アイデアの現状は、はつきり言っただけだ。

全身が武器のようなリグノイドを捕らえて尋問するという事は無謀でしかなく、リグノイド側の情報を手に入れるのが極めて困難な上、リグノイド側からは施設を攻撃出来るため、地下に対して有効な攻撃が可能なのだ。少しずつ情報は集められているが、このままではいつになったら斗雨也まで辿り着けるのか解らない。

そして、大量のリグノイドによる攻撃を凌ぐための戦力は、多い方がよい。圧倒的に数の少ない地下の人員に対して、リグノイドは

数倍以上にいるのだから。

「勿論、いきなりの戦闘で前線に出しはしない。援護をもらおう」
純の反応には何も言わず、暁彦が告げる。

「……援護？」

「耕太、いるな？」

純の言葉に、暁彦が背後に声を投げた。

暁彦の傍に背格好も顔立ちもだいぶ幼い、恐らくは十五歳には満たないだろう、子供がいた。見慣れない人物に少し驚いたように、口を小さく開けて純を見つめている。

「まだ純には紹介していなかったな。埼室 耕太、戦闘要員の一人だ」

暁彦が、耕太に純を紹介する。

だが、純が一番驚いたのは、その子が身に着けているものだった。その小さな身体には大きな翼が生えており、身体を守るかのように、黒い鎧のようなものも身に纏っている。

「見ての通り、耕太はリグノイドだ。この子も、斗雨也の影響下にはないようだな」

純に向き直り、暁彦が説明を加えた。

先日、康祐や亜沙が口にした斗雨也の影響を受けないリグノイドが耕太のようだ。そのリグノイドとしての能力を活かして戦っているらしい。

無論、耕太のような小さな身体の体積では攻撃範囲が限られる。そのため、リグノイド同様にアウターボディと呼ばれるナノマシンの集合体を用いて戦闘に参加しているようだ。

隊長クラスのリグノイドは他のリグノイドと違い、装備を持つ事が許可されているらしい。その装備というのが、リグノイドの身体同様、持ち主が自在に操れるナノマシンの集合体、アウターボディなのだそうだ。身体の一部が破壊されてもアウターボディで損傷を復元したりする事も可能だという。

「でも、こんな歳で戦いに……？」

「ああ、だが、この子が望んだ事だ」

アイデアは基本的に自分から望んで入る制度を取っている。それは純が経験した通りだ。

それは純も体験して心得ていたが、それでも耕太は若過ぎる。

と、耕太が暁彦の服の袖を小さく引つ張った。

「ん？ ああ、行つてもいいぞ。純の潜在能力は高い。十分な援護が期待出来るはずだ」

暁彦が言い、耕太は奥へと走つて行つた。

「そろそろ到着する。機体に乗り込んで準備してくれ」
「解りました」

答え、純はアサルト・アーマーのコクピットから下げられている昇降用ワイヤーに足を掛け、手に持った部分のスイッチでコクピットの高さまで上ると、コクピット内に滑り込んだ。

ワイヤーがコクピット内部の収納部位に収納され、ハッチが閉まる。開いていたアーム・ボックスとレッグ・ボックスが閉じ、ボデー・アーマーで身体が固定されると同時にヘッドギアが純の頭部にセットされた。

そうして、システムが起動する。

通信回線に入った呼び出しに、純は応じた。

「出撃するんだってな？」

「援護らしいけどね」

通信ウィンドウに表示された康祐の言葉に、純は答える。

「実戦は見ておいた方がよいしな。まあ、危なくなったら俺達は何とかしてやるよ」

「期待してるよ」

苦笑し、純は回線を閉じた。

「目的地に到着、全機出撃後に全車両ステルス・モードにシフトします」

全機に対する強制通信で連絡が入った直後、輸送車両の格納庫の壁が開いた。アサルト・アーマーがそこから外に降りて行くのを見

て、純も後を追った。

久しぶりに見た地上は雨が降っていた。純がイデアに来た、あの日のように。

「よし、いつも通り三人一組で展開、敵の攻撃に備えろ」

純の感傷を余所に、暁彦の言葉に全員が素早く動いて行く。

追い抜くように歩み出た耕太に、純は意識を向けた。通信用であるヘッドセットを頭に着け、雨に濡れるのも構わずに歩いて行く耕太を、純は追った。

たとえアサルト・アーマーを用いても、多対一となれば不利になる。それを避けるための三人組での編成を行い、互いに援護し合う事で多数の敵に対応しているのだ。無論、搭乗者の腕によって足を引き張られてしまう場合もあるために、単独で戦う者もいる。それが主力と呼ばれる戦闘隊長の暁彦を始めとする、亜沙、康祐、深玖、瑠那の五人と、リグノイドの耕太だ。この六人は基本的には単独で敵に対して突撃し、その戦力を出来る限り削ぐ役割を担っている。互いに援護し合うのも、この六人同士で行うのがほとんどだ。今回は特別に、初突撃の純が耕太専属の援護に回される事になっているようだ。

「……一つ、訊いてもいいか？」

通信回線を耕太にのみ向けて、純は口を開いた。

雨の降りしきる中、耕太は純に振り返り、頷いた。耕太は既に全身ずぶ濡れで、髪が額に張り付いている。通信が可能なのは防水加工が施されているためだろう。

「……何で、同じリグノイドと戦う事にしたんだ？」

純の問いに、耕太は顔を上げた。まるで純の目を見るかのようにアサルト・アーマーの頭部に視線を向ける。

イデアの戦闘要員になるには、自分でそう願い出るしかない。イデアは強制をせず、協力者のみで構成されているのだ。暁彦が言っていたように、耕太も自らその道を選んだはずだ。だが、耕太が戦う相手は、自分と同じリグノイドのはず。何故、その選択肢を選ん

だのか、純は知りたかった。

「……居場所、失くなるの、厭だから」

純が初めて聞いた耕太の声は、小さく、か細い声だった。

「居場所……？」

「外に、居場所がなくなつて、ここに居場所がなかったら、どこにいればいいのか、分からない」

「……」

「大和さんは、ここにいていいって言ってくれた。僕は、僕や大和さん達の居場所を失くしたくないから」

小さな声でぽつりぽつりと紡がれた言葉に、純は言葉を発せないでいた。

（そうか……）

耕太には、敵がリグノイドである事は関係のない事なのだ。

リグノイドであろうと、なかろうと、今耕太が戦っている相手は、耕太の居場所を奪おうとする敵でしかない。その幼い心には、自分の居場所を失ったという事が恐怖として刻み込まれているのかもしれない。そして、自分と同じように居場所を奪われようとして、必死に抵抗している地下の人達が耕太の瞳には他人には見えなかったのだ。

ただ、生きたいと思い、生きようとしているだけに過ぎない。

「……解つたよ。ありがとう」

柔らかな口調の純の言葉に、耕太が微かに笑みを浮かべたのが判った。

（この子は、守ろう）

自然に、そう考えていた。

初陣でどこまで戦えるのか判らない。ただ、耕太の援護をする事だけを考えようと思っていた。

機体は純の意識に数瞬遅れてついて来る。水中で思い切り身体を動かしているかのような感覚的タイムラグやは生じるが、それが純の意識に遅れるのはコンマ一秒にも満たない。慣れてさえしまえば、

自分の身体を動かすのと同様に機体を動かす事が出来る。ただ、僅かに生じるタイムラグが命取りになってしまふ可能性もあるのだ。直後、爆発音が聞こえた。レーダーに目を向けた純は、味方と敵が接触したのだと判った。

耕太が走り出し、純はその後を追う。加速を意識した直後に背部スラストが稼動し、機体が加速した。アサルト・アーマーの加速力にも引けを取らない速度で耕太は走っているが、やはり少しずつ純が追いついて行く。

「掴まれ！」

純が差し出した腕を、耕太は掴み、右肩へと座った。

思い切り踏み込んだ右足で地面を蹴飛ばし、空中へと飛び出したところで、純の機体の右肩から耕太が飛び降りる。その落下する先に数多くの敵がいる事を認めて、純は右手のライフルと左手のバズーカを地上へと向けた。

純の意識がアサルト・アーマーを動かす。機体が意思の通りに照準を合わせ、引き金を引く。

放たれたライフル弾が耕太を避けて直進し、地上のリグノイドへと降り注いだ。単発式のライフルの銃口から、可能な限りの連射速度で銃弾が放たれて行く。着弾した炸薬弾が爆発し、リグノイドの身体を吹き飛ばす。そうして絶命しなかった敵に、耕太が剣状に変化させた腕を振るっていた。

断末魔を上げ、赤い血を撒き散らしながら倒れ行くリグノイドに、純は顔を顰める。

耕太へと複数のリグノイドが突撃し、純は落下しながら空中から地上へとライフル弾とバズーカ弾を撃ち込んだ。撃ち漏らしたリグノイドとその付近の敵へ目掛けて、耕太は背中の翼を変化させた鋭い触手を突き刺して行く。リグノイドを確実に戦闘不能にし、絶命させるために、その唯一の弱点である脳、頭部を貫く耕太の横顔には、ただ必死だけが存在していた。

耕太と背中合わせになるような位置に着地した純は、その方向に

弾丸をばら撒く。その攻撃を逃れて飛び掛つて来たリグノイドが、横合いから飛来した触手によって頭部を貫かれ、絶命した。

緊張感に心拍数が上がっているのを自覚する。回避を意識すれば自然と機体が動き出してしまったため、その衝動を抑え付けた。それが余計に焦りを生む事だと解っているとしても。

背後にいる耕太を援護するために、純は敵を撃つ事に集中していた。回避を行わず、向かって来る敵を全て撃ち落として行けば、それは耕太に対する援護にも、自分自身の防衛行動にもなるのだ。

レーダーを見て、近くの建物から飛び掛つて来た敵へとバズーカの弾丸を放つ。撃ち落としたら直ぐに別方向の敵へと意識を向け、純は耕太と背中合わせの状態のまま引き金を引き続けた。

第四章 「決戦の幕明け」

第四章 「決戦の幕明け」

格納庫では一機のアサルト・アーマーが組み立てられている。薄い灰色を基調とし、各部に黒のアクセントの入ったその機体が純の機体だ。防御力よりも機動力を重視した、パーツ選定で構成された機体だった。アサルト・アーマーは複数あるパーツを組み合わせる事で、搭乗者の要望にあつた機体が造れるようになっていく。

今回の戦闘で回避を行わなかった純だが、逆に機動力の重要性を実感していた。確かに、攻撃を続けて敵を寄せ付けなければ回避をする必要はないが、それは援護してくれる者がいるという条件下で、だ。いくら攻撃を行ったとしても、単体でカバー出来る範囲には限界がある。味方が背後を守ってくれなければ、複数方向から同時攻撃をされた時に対応し切れない。

単機で戦うとなれば、回避運動は必要になってくる。

訓練時の成績の高さから、暁彦や亜沙達のように前衛に出る事になつている純には、機動力は必要な要素だった。

その純は、サポート・スーツを身に着けたまま手近なコンテナに腰を下ろしていた。

出撃した戦闘部隊は全機帰還し、格納庫は修理や補給で忙しなく動いている。そんな中でも少しずつ純の機体は組み立てられていた。それを、純は眺めていた。

先の戦闘での被害は、三機のアサルト・アーマーが戦闘不能状態まで破壊され、四機のアサルト・アーマーが半壊している。幸い戦死者は出なかつたが、二名が重傷を負い、三名が軽傷を負った。

単体でリグノイド以上の戦闘力を持てたとしても、数で圧倒的に劣っているアイデアでは、ほぼ毎回戦闘で被害が出てしまう。戦死者が出る事も少なくはない。

アイデア

完全志願制を取っているアイデアにとって、戦闘要員が減ってしまった事は戦力としてもかなりの痛手となる。

「……実戦を感じてみて、どうだ？」

掛けられた言葉に、純は顔を声の方向へと向けた。

「大和さん？」

そこにはサポート・スーツに身を包んだ大和がいた。

「ちらつとだが、見させて貰ったよ」

「……やっぱり、悩んでる暇なんて、ないですね」

純は大和から視線を外し、答える。

「ああ、だからこそ、戦う前に心構えを作る必要がある」

「心構えが決まってなかった訳ではないんです。ただ」

「辛いかな、人の命を奪うのは」

大和の言葉に、純は顔を向けた。

まるで純の心を見透かしたかのような言葉を告げた大和の表情は穏やかだった。

「そう感じたのなら、その感情は忘れるな。我々が守るためには、リグノイドの命を奪って行くしかない」

大和の言葉に、純は頷く。

戦場では躊躇えない。それは、先の戦闘で純が実感した事だ。純が攻撃を躊躇っていたら、背後にいた耕太に攻撃が向けられていた事だろう。それは、今現在の地下世界の縮図でもあるのだ。アイデアが地下を守るために必死にならねば、地下はリグノイドによって壊滅させられてしまうのだから。

現状では、地下を守るためにはリグノイドを殺して敵の攻撃を凌ぐしかない。

「……辞めたくなかったか？」

「……いや、辞めないよ」

大和の問いに、純は首を左右に振った。

志願制のアイデアは、申請さえすれば除隊も出来る。それをする者がいるかは知らないが、そういう組織なのだ。

「そうか」

大和が小さく笑みを浮かべる。

純は視線を大和から組み立て途中のアサルト・アーマーへと向けた。

「そうそう、耕太から伝言がある。『援護ありがとう』だそうだ」

「！」

言い、大和が純の目の前を通り過ぎる。

純はその背中を見つめる事しか出来なかった。

(……………ありがとう、か……………)

視線をアサルト・アーマーに戻し、純は思う。

感謝されたのは久しぶりのように思えた。地上にいた時は、平凡な毎日が無難に過ごしているだけだった。人との関わり合いも問題のないよう過ごして来たために、怨まれる事も感謝される事もない。養子という事で家族からも気持ちは一歩退いていた。

(今回は守れたって事かな)

耕太の背後は守れたのだろう。

「……………あ、純？ まだここに？」

亜沙の声に、純は振り返った。

そこには、着替えを済ませた亜沙と康祐、深玖の三人がいる。

「おいおい、汗掻いてないのか？」

「動き回ったりしなかったから、ほとんど掻いてないよ」

康祐の言葉に、純は苦笑した。

見れば、サポート・スーツを着ているのは純だけになっていた。

格納庫内に来ている整備員は勿論だが、調整や手伝いに来ている戦闘要員達は皆私服か作業着らしい格好になっている。

「着替えもせずに何してたの？」

「ちよつと考え事してただけだよ。それももう終わったけどね」

背伸びをするようにしてコンテナから立ち上がり、純は深玖の問いに答えた。

「それで、皆は何でここに？ やっぱり手伝い？」
「ええ」

純の言葉に、亜沙が頷いた。

普段、戦闘要員は雑用のような事をしている。訓練する者もいるが、操縦システムであるマインド・フォロウ・システムは精神面での負荷は小さいとは呼べず、やり過ぎは精神的に良くない。そのため、戦闘要員は普段、決まった仕事がないのだ。

「まあ、整備を手伝うにはもっと知識を溜めないといけないから、お前にはまだ無理だろ？」

康祐の言葉に、純は苦笑を浮かべて頷いた。

「初めての实战だからやっぱり疲れてるでしょ？ 休んだ方がいいわ」

「そうするよ」

亜沙に頷き、純は格納庫を後にした。

暗闇の中で目を覚ました純は部屋の電気をつけ、時計を見た。朝の八時と表示されている時計を見て、純は頭を左右に振った。

手早く着替えを済ませた純は、ナイトテーブルの上に置かれている拳銃を手に入った。それは、純がアイデアへ来た時に大和から貰ったものだ。

アサルト・アーマーの武装としては小さ過ぎて使えないものだが、純はそれを携帯していた。

戦場への引き金を引いたものだからなのかもしれない。

それを上着の内側のホルスターに入れ、顔を洗うと純は食堂へと向かった。

「あ、純。今日は早いんだね」

食堂に入ると直ぐに深玖から声を掛けられた。

見れば、そこには深玖だけではなく、亜沙や瑠那も食事をとっている。

「……康祐は、まだ寝てるのか？」

そこに一人だけいない康祐が恐らく寝ているのだから事は判ったが、その判断が間違いでない事を確かめるように尋ねた。

「よっぽどの事がないとコー兄は九時半過ぎないと起きないよ」

深玖がさらりと答える。

「食事、一緒にどうかしら？」

亜沙の言葉に、純は周囲を一度見回してから頷いた。

丁度、朝食をとる人の多い時間帯なのだろう、食堂の席はほとんどが埋まっている。亜沙達の机には二人分の空きがあり、純はそこで朝食をとる事にした。

「……そういえば、大和さんや暁彦さんは？」

食事を席まで持つてくるまでに、その二人が食堂内に見当たらない事に気付き、純は尋ねた。

「二人とも三十分以上前に食事は済ませてるの。多分、今は司令といろいろ話し合ったりしてるわ」

亜沙が答える。

「純の機体も完成したんだよね？」

「ん？ そうだけど？」

唐突な深玖の言葉に、純はパンを齧りながら頷いた。

純のアサルト・アーマーが完成した事は、昨夜のうちに携帯端末にメールとして通知されている。次に出撃する際には、そちらのアサルト・アーマーに乗り込む事になるはずだ。

「大丈夫だよな？」

「大丈夫だと思うよ」

深玖に答え、純はまたパンを齧った。

まだ不安感はあるが、それでも自分で考えて選んだ道である。今更止めるというつもりはないし、隆一と会うためには出撃する必要がある。

隆一と同じリグノイドを討つ事になったとしても、それも純が選んだ道だ。それに、隆一がリグノイドだからといって、他のリグノ

イドへの攻撃を躊躇う理由はない。純の親友だったのは隆一だけなのだから。

「でも、昨日襲撃があったわけだから、今日は出撃する事はないかもしれないわね……」

亜沙が言った。

敵も、毎日襲撃して来るといふ訳ではないらしい。連続して襲撃してくる事もあるようだが、それを凌ぎきれればしばらくは襲撃がないようだ。無論、だからといって警戒を怠っているという事はない。それで油断を見せてしまえば、そこから敵に付け入られる事にもなりかねないのだ。

(……襲撃、か……)

食事をとりながら、純は食堂の様子を見ていた。

それなりに騒がしい食堂の様子からは、戦争のような事をしていとは思えない。その光景が崩れ去るといふのは、純には厭なものに思えた。

何故、斗雨也は共存の道を選ばなかったのだろうか。様々な理由が考えられても、それは推測に過ぎない。真実は本人しか知らないのだ。

視線を移した純の視界には、瑠那が映った。

無言で食事をとっている瑠那からは、何の感情も読み取れない。

昨日の、純との会話すらなかったかのように見える。

「わ、食べるの早いね」

深玖の言葉に、純は深玖の食事を見た。

まだ少し残っているが、数分とかわからずに食べ終える事が出来るだろう量だった。恐らく、後から来た純が深玖よりも早く食べ終わった事を指しているのだろう。

「深玖がゆつくりなのよ」

亜沙が苦笑して告げた。

見れば、亜沙は既に食べ終わっている。

瑠那も食べ終わり、残ったのは深玖だけだった。それでも速度を

変えずにマイペースに食事を続け、四人は食事を終え、トレイを片付けて食堂から出た。

「ところで、純はこの後どうするの？」

食堂を出た直後、深玖が訊いて来た。

「一応格納庫に行つて自分の機体を確認しとこうかと思つてる」

それに答えながら、純は格納庫へ向かう通路を歩き出していた。完成したアサルト・アーマーに実際に乗り込んでみて、プログラムのみの仮想訓練をしてどの程度の性能が出るのかを確認しておこうと思つていた。実動訓練と違い、機体自体を動かす訳ではなく、搭乗者の動きをコクピット内のみで処理するシミュレーションプログラムを行う事は、それだけでも参考になる。実際に機体が動いている訳ではないため、あくまでも計算上の性能という事になるが、戦い方の試しには十分なのだ。

「…皆は？」

「私達も格納庫に行くところ」

純の問いには、亜沙が答えた。

三人共、朝は大抵アサルト・アーマーの微調整のために格納庫に行つてゐるらしい。

そんな事を話しながら格納庫へ向かつていた時、轟音と共に基地が激しく揺れた。

「何だ…？」

直ぐに収まつた揺れに、純が呟く。

「……爆発のようだな、格納庫の方からか？」

即座に瑠那が走り出し、それに全員が続いた。

純も三人と共に走りながら格納庫へ続く通路を駆け抜けて行つた。その途中、警報が基地内に響き渡る。

厭な予感がした。だが、今の純には格納庫へ急行する事しか出来ない。

格納庫に飛び込んだ四人は、そこに広がる光景に一瞬言葉を失つた。

アサルト・アーマーが二機、大破して炎を上げている。その周囲には整備員と思いきイデアの隊員が数人、血を流して倒れており、他の者が壁際で部屋の中央を見つめていた。

「大和さんっ!」

部屋の中央に倒れている大和を見て、亜沙が駆け出そうとする。

純の足は、動かなかった。その光景が非現実的過ぎて、頭も身体も機能を麻痺させているかのように、何も考えられない。

「待て、亜沙!」

その腕を瑠那が掴み、引き止めた。

直ぐに、純にもその理由が判った。

「……耕太……!」

そこに立っていた者を見て、純は呟いていた。

アウターボディで身体を拡張し、一對の大きな翼と剣状にした六つの腕を背中から生やした耕太が立っていた。無表情に、何も感じていないからのように、耕太はそこに立っている。その剣状の腕から血が滴り落ちている事からも、耕太がこの事態を引き起こしたのは間違いないだろう。

「耕太! 何をしているんだ!」

格納庫内にいた暁彦が呼びかけていた。

「……ふふ、ようやく準備が整ったのでな……」

その耕太が邪悪な笑みを浮かべ、口を開く。

「斗雨也か……!」

瑠那が呻いた。

耕太を斗雨也が遠隔操作しているという事だろう。今まで見て来た耕太と、今の耕太は明らかに異質だった。声音が同じだけに、一層不気味に感じられる。

「まさか、耕太をわざと潜り込ませたのか!」

「今更気付いても遅い…怨むなら、リグノイドを迎え入れたこの男を怨むんだな」

暁彦の言葉に、耕太の身体を操っている斗雨也が言い、足元に倒

れている大和を蹴飛ばした。

苦痛に呻き声を上げながら、大和が純達の方へ転がって来る。その腹部には剣で貫かれた傷跡があり、未だ出血しているようだった。

「大和さん……！」

亜沙が小さく悲鳴を上げ、駆け寄る。

駆けつけて来た戦闘要員達がライフルを向けるも、斗雨也は動じた様子もなく、口元に笑みを浮かべたまま立っていた。

「……生身の人間に負けると思うか？」

その言葉と共に、銃声が続き、同時に耕太が動く。

銃口の先を見切っているのか、耕太は銃弾の間をすり抜けるように動き、戦闘要員達の手からライフル銃を弾き飛ばす。通常の間人間の反射速度を超えた動きで、戦闘要員達を無力化した耕太は元の位置に戻った。そこには余裕さが感じられる。

直後、基地が揺れた。今度は、上層階の方からだった。

「……襲撃が始まったな。今日で貴様等ともお別れだ」

アイデアの基地、及び地下の空間は地表から分厚い金属層をいくつか重ねて区切られている。

その層を破壊している音なのだ。このまま放って置けば地下世界がリグノイドに蹂躪されてしまうだろう。

「……亜沙…耕太を……」

か細く、苦しげな大和の声に、純は視線を向ける。

手に持った拳銃を亜沙へと渡そうとしている大和がいた。言葉にはならなかったが、その口が『撃て』と動いたのが、純には確かに見えた。思わず、純は自分の手を懐の拳銃へと伸ばしていた。

亜沙が受け取ろうと手を伸ばした時、大和の拳銃に槍のようなものが突き刺さる。耕太がアウターボディの一部を槍状にして投げ付けたのだ。使い物にならなくなった拳銃が床に落ち、空しく音を立てる。

アイデア

瑠那の奥歯が鳴るのを、純は聞いた。

その場の誰もが動けずにいた。斗雨也すらも、その様子を楽しん

でいるかのように、口元に笑みを浮かべている。

瞬間、純は懐に入れていた腕を引き抜き、その手に握られていた拳銃の銃口を斗雨也へと向けると即座に引き金を引いていた。斗雨也がその純の行動に反応している暇はない。

銃声が響き渡る。薬莢が地面に落ち、乾いた金属音を立てる。

「！」

硝煙の臭いが広がり、部屋の中央にいた耕太の身体が仰け反るようになり傾ぎ、そのまま倒れた。

銃弾は耕太の眉間を撃ち抜いていた。しかし、それが命中する瞬間、純は見た。その表情から斗雨也が消え、死への恐怖に怯えた子供の表情になるのを。

「純……！」

一瞬送られて、格納庫内の視線が純へと集中する。

銃を撃つた体勢のまま、純は動けないでいた。耕太が死ぬ直前の表情に、戸惑っていた。

「救護班を呼べ！ 急ぐんだ！」

暁彦の声に、我に返った全員が動き出す。

「……よくやった、純。これでこちらからも抵抗出来る」

駆け寄ってきた暁彦が純に声を掛けた。

拳銃を下ろした純は、暁彦に頷き、大和へ視線を向ける。丁度、駆けつけて来た救護班に運ばれて行くところだった。

「戦闘要員は全員出撃準備にかかれ！」

暁彦の号令に、アサルト・アーマーに乗り込む戦闘要員がロツカールームへと駆け出して行く。

純達も同様に走り出していた。

「銃、持ってんだ……」

「俺が、地下に来る途中で大和さんから貰ったものだよ」

亜沙の言葉に、純は答えた。瑠那も深玖も無言だった。

格納庫から外へと出て行く戦闘要員達に混ざって、純達もその数秒後にはロツカールームへと駆け出していた。そのままロツカール

ームに入ったところで別れ、サポート・スーツに着替える。純専用のサポート・スーツに着替え、再度格納庫へと向かった。完成したばかりの自分の機体に取り込む。

（ あれが、斗雨也 ）

操縦システムが起動して行く中、純は耕太の死の瞬間を思い出していた。

アイデアにいる間の耕太には耕太の意思というものがあつたはずだと、純は思う。意図的に耕太をアイデアに送り込んだのだとしても、常に斗雨也が耕太を動かしているわけではないのだ。その中には必ず耕太の意思があつたはずだ。それを自らの目的のために手駒として切り捨てる斗雨也に、純は反感を覚えていた。

あの、小さな身体に確かな決意を持っていた耕太は、もういない。最初に居場所を追われた斗雨也に、耕太は最後の居場所すら奪われてしまったのだ。意識を乗っ取られるという方法で。

例え味方だつた者でも、斗雨也に制御された状態になつてしまえば、殺すしか手はない。

そこに耕太本人の意思が介入する余地はなかつた。その場の全員が生き残るためには、耕太を撃つ意外に方法はない。無抵抗であれば斗雨也に蹂躪され、今までアイデアが維持して来た地下世界までもが斗雨也によつて破壊されてしまう。アイデアとしては、それだけは避けなければならぬ事態だつた。

命の取捨選択等、出来るはずがない。それでも、選択しなければ全てを失つてしまう状態にいるのだ。

気が付いたときには、純は引き金を引いていた。

「出撃準備の完了を確認しました。地上への射出口へと移動して下さい」

「……了解」

通信係の女性の言葉に、純は機体を歩かせ、格納庫の端にある地上への射出口へと向かった。

地上へと続く射出口は、アイデアの真上からの攻撃を想定して造ら

れたものらしい。格納庫から直接地表へとアサルト・アーマーを射出し、即座に戦闘行動を行い、敵を殲滅する。

カタパルトで加速した純の機体が射出通路を駆け抜ける。サポート・スーツで軽減されていても相当なものになっている圧力に耐え、純は地上へと飛び出した。

視界に入ったのは雲の混じった青空と、地上にある建物だった。その地上には至るところにリグノイドが見えていた。レーダーにもかなり大規模な反応がある。

純とは別の場所からもアサルト・アーマーが飛び出しているのが見えた。射出口は一つだけではなく、四箇所から地上に出られるようになっていているのだ。一機で戦わせる事を避けるための配慮と、別の場所からも攻撃出来るという戦略的な考慮からだ。

打ち出され、空中にいる純へと、リグノイドが複数突撃して来るのが見えた。

アサルトライフルを下方へと向け、純は引き金を引いた。銃撃の振動が伝わり、視界に映るリグノイドに命中し、小さな爆発を起す。

リグノイドにもダメージを与えられるよう、命中すると爆発を起こす炸薬弾を撃ち出すものがほとんどだ。頭部を吹き飛ばされ、絶命したリグノイド達が落下して行くのを尻目に、純は視界を周囲にめぐらせる。

通常のリグノイドには金属層を貫けるような武器は形成出来ないはずなのだ。それなのに、地下に振動を伝わせるだけの破壊力を持った攻撃が出来るというのは、何か他の要因があるに違いない。

「あれかっ！」
落下しながら、純はそれを見つけた。

黒い、巨大なドリルのような塊が見える。それが金属層を削っているのだと、直ぐに判った。

空中でスラストを使い、ドリルへと機体を突撃させた純へ、地上からリグノイドが攻撃を仕掛ける。

「くそつ、邪魔をするな！」

呻き、地上へとアサルトライフルを乱射し、いくつかのリグノイドを撃破しながら、純はドリルの付近にある建物に着地した。

着地の衝撃で建物の床に罅が入るが、無視し、純は左手で腰の後ろに設置されているウェポンラックからショットライフルを掴んだ。それをドリルへと向け、トリガーを引く。放たれた散弾がドリルに命中し、爆発を起こす。

「何っ！」

だが、ドリルを破壊する事は出来なかった。

威力が足りなかったのではなく、ドリルの表面が事故修復したのだ。それは、ドリル自体がアウトボーディで造られたものなのか、リグノイドの集合体であるという事を指す。自身の形状を変える事の出来るリグノイドならば、他者と交じり合って巨大な何かを形成させる事も可能なのだ。

リーダーからの警告に、横合いから突撃して来たリグノイドを回し蹴りで弾き飛ばし、そこへアサルトライフルの銃弾を撃ち込んで仕留める。

と、後方から多数のミサイルが飛来し、ドリルへと命中した。更に撃ち込まれるグレネードに、ドリルが傾き、倒れた。

地響きと振動が周囲に伝わり、建物が倒壊して行く。

「やったか…？」

通信回線が開き、後方から追いついて来たのは康祐だった。

「康祐か？」

「ああ、寝ている間に何か大変な事になってたみたいだな」

純の確認に康祐が答える。

射撃戦を重視し、多数の火器を搭載した康祐の攻撃力がなければドリルを止める事は出来なかっただろう。

「安心するのはまだ早いよ！」

通信に割り込んで来た深玖の言葉に、純はドリルが変化するのを見た。

複数のアサルト・アーマーに近い形状と質感のものに変化したドリルが純達へと突撃して来るのが見えた。

「周囲のリグノイドは他の人達に任せて、私達はまずこれを止めましょう！」

亜沙の青灰色のアサルト・アーマーが深玖の機体と共に純の前方に着地する。

「隊長と瑠那が周囲の敵を攻撃する方に回ってるから、早く片付けて合流しよう！」

深玖が言い、駆け出した。

隊長というのは暁彦の事だろう。その暁彦と瑠那が周囲の攻撃に加わっているというのはそれだけ戦況が厳しいという事になる。

純達と同時に黒い戦闘鎧が動き出す。リグノイドの身体能力を超え、アサルト・アーマーと同程度にまで引き上げられた運動能力でそれは動いた。流石に射撃武器はないようだが、それでもその身体能力から予測出来る戦闘力はかなりのものになっているだろう。

「！」

目の前に迫った敵戦闘鎧が突き出した拳を、横に跳ぶようにして純はかわした。

その拳が途中から剣状に変形したのが見えた。突き出したその手を、回避した純へと振るった敵が、その剣の形状を引き伸ばす。そうする事で純へ攻撃を届かせようというのだ。

空中でスラストを用い、純は急に角度を変えて回避する。跳躍して追撃を仕掛ける敵を、空中で敵を中心に旋回するようにして背後に回り込んだ。

流石に敵はスラスト機動までは出来ないようで、回り込んだ純に対する反応は振り向いただけだった。その敵が反撃のために腕を純へと向けるよりも早く、純はショットライフルの銃口を向けていた。

トリガーが引かれ、銃口から炸薬入りの散弾が吐き出される。至近距離からの散弾はそのほとんどが敵の前面に命中し、爆発を起した。体勢を崩した敵が落下し、地面に叩き付けられる。それでも

尚動こうとする敵機に、急降下した純はアサルトライフルをその敵に向けて連射した。

爆発が連続して起こり、黒い戦闘鎧の装甲が剥がれるように、表面が吹き飛ばされて行く。

「……」

そこから見えたのは、リグノイドだった。

アウターボディで形成させた黒い戦闘鎧を、リグノイドが身に纏う事でアサルト・アーマーと同等の戦闘力を得ていたのだ。アウターボディで造られた戦闘鎧は、リグノイドならば誰でも自分の手足のように操る事が出来るだろう。スラスト機動は不可能だが、純達のように適性がなければ使えないという訳ではない。

数を揃え、編成を考えれば、アイデアを圧倒する事が可能だ。

それに、アウターボディで造られていれば、かなりの応用が利く。火薬を用いるような射撃武器は使えずとも、その運動能力と、改変させられる外見を組み合わせれば戦略は広がるはずだ。腕を剣状にするだけではなく、翼を造り出している空中移動や、先のドリルのように複数のアウターボディを組み合わせると一つの兵器を造り出す事も出来る。

アサルトライフルの弾丸が内部のリグノイドに命中し、その頭部を吹き飛ばした。

動かなくなつたのを確認し、視界の端に映るレーダーへと視線を向けた。表示されている敵と、アサルト・アーマーに乗っている味方が色分けされたマーカーで表示されている。純のいる場所から離れた場所で味方の数機がレーダー上でも判る程に素早く動き回っているのがあった。恐らくは暁彦と瑠那だ。

「純、そっちはどうだ？」

「一機破壊した。戦況は？」

康祐の通信に純は訊き返した。

「とりあえずドリルは何とかなつたみたいだ。俺達も周囲の援護に向かおう。亜沙達も向かってるはずだ」

その返答に、通信画面に映る康祐へ頷く事で応じ、純は駆け出した。

リグノイドとアサルト・アーマーが交戦している場所に辿り着くのに、そう時間はかからなかった。建物や通路には戦闘の跡が残り、リグノイドの死体も半壊したアサルト・アーマーも見受けられる。

三体のリグノイドが前方から襲い掛かって来るのを、後方に一歩退いて距離を取り、アサルトライフルで弾丸をばらまくようにして反撃した。爆発して体勢を崩したリグノイドに追い討ちの弾丸を撃ち込み、確実に仕留めて行く。

「あれは……！」

少し離れた前方に見えた二体のリグノイドは、アウターボディを使っていた。

先程のように戦闘鎧型にはしていないが、身体を拡張して翼を生やし、周囲のアサルト・アーマーに攻撃を仕掛けている。アイデアに入って知ったが、アウターボディを使うのは小隊長と呼ぶべき立場以上にいるリグノイドらしい。つまり、その二体が指揮系統の一部だという事だ。

だが、純が驚いたのはそれだけではなかった。

「まさか、俺の両親……？」

その二人の顔には見覚えがあった。間違いなく純の育ての親だった。

二人が一機のアサルト・アーマーに連携攻撃を仕掛け、その右手を破壊している。

(……そんな事言ってる場合じゃないっ！)

背部スラストを用いて加速し、純は二人に向けてアサルトライフルを撃った。

それを回避して距離を取った二人と、攻撃されていたアサルト・アーマーの間に割って入るように滑り込む。それと同時にアサルトライフルを二人へ向けた。

(もう、あれは俺の両親じゃないんだ……)

奥歯を噛み締め、純は引き金を引いた。

放たれた弾丸を避けた二体のリグノイドがその背中から生やした、先端が槍のように尖った触手を純へと打ち込んで来た。

「……！」

背後には体勢を崩して倒れ込んだままのアサルト・アーマーがあった。純が避ければ、そのアサルト・アーマーが触手に貫かれてしまふ。

純は右足を蹴り上げるようにして一本の触手の向きを逸らし、別の一本を左手のショットライフルの銃身で打ち払う。右手のアサルトライフルを三本目に叩きつけるようにして逸らし、そのまま銃口を四発目へと向けて発砲。放たれた弾丸が触手の先端を潰し、爆発を起こした。

直ぐに地を蹴って跳躍し、空中にいる二体のリグノイドへとアサルト・ライフルを向けた。

左右から純を挟み込むように散開した二体に対し、純は両手を広げるようにして左右それぞれの手に握っている武器の銃口を合わせる。リグノイドの反撃が来る前にトリガーを引いた。

左右別の武器を用いた事によるアンバランスな反動を、背部スタで受け流す。左手のショットライフルが純の義母の上半身を吹き飛ばし、右手のアサルトライフルが義父の首に命中し、爆破させていた。

着地した純は、背後にいたアサルト・アーマーに向き直った。

「あ、ありがとうございます！」

掛けられた声は女性のものだった。

被弾した影響か、通信画面にはノイズが多かったが、搭乗者自身は無傷だったようだ。

「……無事、みたいだね。無理はしない方が良い」

言い、純はリーダーに視線を向けた。

まだ周囲にはリグノイドの反応が多数ある。のんびりと会話をし

ていられる状況ではない。

他にリグノイドの密集している場所へと向かうため、純は跳躍した。背部スラストで建物を跳び越えるようにして戦場を駆け抜ける。(……あれは、瑠那……?)

見下ろした戦場の中で、一機だけ他のアサルト・アーマーとは運動量が全く違うものがあつた。その機体色がダークグレーである事から、搭乗者が瑠那である事が判る。

瑠那はショットライフルとグレネードライフルを乱射しながら、リグノイドが密集している場所へ突撃して行く。だが、乱射しているように見えてもそれらは全ての確な位置に打ち込まれており、効率的にリグノイドを減らしていた。

複数のリグノイドによる、様々な方向からの触手を全てすり抜けるようにして避け、反撃を打ち込んで行く。その凄まじさは見るものを圧倒させる程のものだ。

別の場所では康祐が全身に搭載した火器を、康祐を取り囲んだりグノイドに向けて広範囲に撒き散らしながら移動している。紅茶色の深玖の機体も別の場所でガトリングガンを乱射しながら敵を殲滅していた。青灰色の亜沙の機体も、安定して優位に戦っており、その傍に戦っている暁彦との連携が取れていた。

センサーの反応に、純は視線を周囲に向ける。空中へと上がって来た、アウターボディを使う上位のリグノイドが純を取り囲んでいた。

周囲にアサルトライフルを連射し、そのうちの数体を吹き飛ばし、撃ち漏らしたリグノイドには左手のショットライフルで撃破した。純の反撃に気付くのが遅れたリグノイド達の身体が落下して行くのを見ながら、純は建物の屋上に着地する。

「……ふう」

多少乱れた呼吸を整え、純は建物の上から見えるリグノイドにアサルトライフルを撃った。

アサルト・フォロウ・システムにより、肉体的な疲労はほとんど

ない。それでも、激しく運動をしたかのような精神的な疲労感はある。もつとも身体自体は機体の動きに引っ張られる形になるために、慣性による圧力は肉体的な負担となるため、完全に肉体疲労がない訳ではないが。

「……ん？」

リーダーに視線を向けた純は違和感を覚えた。

リグノイドの反応は明らかに減っていた。しかし、問題はそこではなかった。始めに純達が戦ったドリルのあった場所に一つの反応が生じていたのだ。

視線を向けた純は、そこに黒い塊が蠢いているのを見た。

「 瑠那、亜沙、康祐、深玖、純、気付いているか？」

不意に、暁彦から通信が入った。

戦闘要員の上位メンバーに対する呼び掛けに、全員が応じる。やはり、皆がその中央に生じた反応に気付いていたらしい。

「各自その場にいる敵を殲滅した後、中心部で合流しろ」

「了解」

暁彦の指示に全員が告げた。

純も建物から飛び降り、周囲にいるリグノイドへとアサルトライフルを連射する。接近して来た敵は回し蹴りから銃身で打ち払い、その上で銃弾を叩き込んで仕留めた。

そうして、周囲にリグノイドがいなくなった事を確認した上で、純は指示された場所へと向かった。その途中で使い切ったアサルトライフルのマガジンを交換し、ショットライフルも弾丸を装填して消費した分を補充しておく。

リーダーを見れば、丁度皆も向かっているところだった。

「こいつは……どういう事だ……？」

康祐が呻くように呟く。

そこには、アウターボディの塊が蠢き、巨大な戦闘鎧の形へと変貌して行くものがあった。

「……精鋭が集まったようだな」

「斗雨也！」

巨大な戦闘鎧の内部から発された声に、暁彦が反応した。
「貴様等を殺せば、全てに決着がつく」

斗雨也の言葉に、全員が銃を構えた。

そのまま全員が発砲し、凄まじいまでの攻撃が斗雨也に集中する。巨大な戦闘鎧の表面が爆ぜ、反撃としてか周囲に触手が放たれた。純はそれを掻い潜り、アサルトライフルの弾丸を撃ち込み続けた。
「俺をその辺の奴等と同じとは思わない事だ」

言い、斗雨也が動いた。

水滴が地面にぶつかって弾けるかのように、周囲に凄まじい数の触手が放たれた。その触手から細い触手が枝のように伸ばされ、動きを封じると共に攻撃がなされる。

純だけでなく、全員がその触手へと攻撃を行い、自身が回避出来る空間を造り出して避けた。その上で反撃を行うが、巨大なまでの容量のアウトターボデイの中心にいるであろう斗雨也に攻撃を到達させる事が出来ない。

「やあああああっ！」

深玖が気合と共に斗雨也に突撃して行く。

そのアサルト・アーマーの両手には単分子振動式の高熱量の剣が握られていた。それを巧みに振り回して触手を切り払い、アウトターボデイへと到達した深玖が剣を振るう。

深玖がアウトターボデイを切り裂いているところへ、背後から触手が打ち込まれるのを、康祐が攻撃を撃ち込んで援護する。それでいて自身の防御にも攻撃を用いているのは、康祐の機体がそれだけ武装を積んでいるからだ。

瑠那がグレネードライフルのマガジンをアウトターボデイへと放り投げ、表面に接したであろう瞬間にショットライフルでマガジンを破壊した。凄まじいまでの爆発がアウトターボデイを削り取る。

「ふん、何をそんなに躍起になっている？」

斗雨也の声が、別の場所から聞こえた。

「何だと！ 馬鹿な！」

「俺がカルマを操れる事を、忘れた訳ではあるまい？」
暁彦に対して斗雨也が告げる。

巨大なまでに集められたアウトターボディは困だったというのだ。見れば、ドリルとなっていた戦闘鎧達を倒した時のアウトターボディが見当たらない。それを集約して、今純達を攻撃しているのだ。

だが、それでも純達がアウトターボディを無視するわけにはいかない。それだけでも脅威になりうるのだから、処理しなければならぬのだ。斗雨也を倒せば戦闘そのものを終わらせる事が出来るとしても、斗雨也と戦う前に邪魔になるものを排除しなければまともに戦う事すら出来ない。

「喰らいやがれえっ！」

康祐が咆え、全身の火器を全てアウトターボディに叩き込んだ。

いくつか触手で防がれはしたものの、そのほとんどが命中し、大きく削り取った。そこを深玖が斬り付け、反対側から瑠那がグレネードで爆破し、アウトターボディの足場を崩す事に成功した。

「そこなくては面白くない……」

崩れ落ち、砂山のようになったアウトターボディの上に斗雨也が降り立つ。

間髪入れず康祐が攻撃を連続して撃ち込むが、斗雨也は足元のアウトターボディを引き上げるようにして一時的な壁を造り出し、防いだ。深玖の剣による攻撃を横に跳んでかわし、亜沙のライフルを空中で身体を捻るようにして寸前でかわす。瑠那の放った散弾をアウトターボディから壁を迫り上げるように造り出して防ぎ、暁彦と純の射撃攻撃もかわした。

その身体能力は他のリグノイドの比ではなかった。そして、その能力も。

着地した斗雨也が足元のアウトターボディを蹴飛ばし、それを空中で刃のように形状を変更させる。回避行動を取った康祐だったが、その刃が康祐の真横で爆発するように拡散し、その装甲に傷を負っ

た。更に、それで体勢を崩した康祐に斗雨也が触手を伸ばした。途中でその触手を深玖が切断したが、切断された場所から横に伸びた触手が深玖の機体の左肩を貫く。

「きゃあっ！」

深玖の悲鳴が響いた。

その斗雨也の背後に接近した亜沙と暁彦がライフルを連射するが、斗雨也は跳躍するとアウターボディから触手を造り出して暁彦と亜沙の機体の足を破壊した。空中にいる斗雨也へ向けて康祐が全身の火器を放つが、そのほとんどがアウターボディの壁で防がれ、唯一斗雨也まで到達した弾丸も、斗雨也自身がその命中箇所穴を開けて銃弾を透過させてかわす。

「このおーっ！」

深玖が右手に持っていた剣を投げ付けるが、斗雨也はそれを避けると同時に柄を握った。

そうして自らの武器にした剣で亜沙の機体を斜めに斬り付ける。

「くっくっ……！」

辛うじて両腕を剣と身体の間挟み、コクピットに致命傷は負わなかったが、両腕が切断された亜沙は戦闘不能となった。その斗雨也に暁彦が両手のライフルを向けるが、斗雨也はそのライフルを剣の腹で打ち払う。瑠那と康祐、純がそこに集中攻撃を仕掛けるが、斗雨也は空中へと逃れ、アウターボディから生じさせた触手で暁彦の機体の両腕と首を貫いて戦闘不能へと追い込んだ。

純の目の前に着地した斗雨也の蹴りを避け切れず、純の機体が吹き飛ばされる。近くにあった建物に埋まるような形で止まったが、その衝撃に純は咳き込んだ。

「……く……く……」

視界の中では斗雨也が深玖の機体の右腕をアウターボディから作り出した触手で貫いていた。

「うおおおおっ！」

康祐が全武装を斗雨也へと放つ。

「！」
そのほとんどが回避されたものの、弾丸の一つが斗雨也の脇腹に命中し、爆発した。脇腹を抉り取られた斗雨也が背中からアウターボディの山に叩き付けられる。

「今だ！」

瑠那がグレネードを打ち込み、爆発が生じた。

「……まだ甘いな」

斗雨也の声に、瑠那が振り返った時、そこには斗雨也が立っていた。

少し離れた場所にいた純には、何が起きたのかがはっきりと見えていた。

斗雨也は、グレネードが命中する直前に自らをアウターボディの中に取り込み、瑠那の背後に立った状態で吐き出したのだ。その際、脇腹に受けた傷も修復している。

「確か、貴様が最強だったか？」

瑠那がショットライフルを向けるよりも早く、その足場が盛り上がるようにして瑠那の機体のバランスを崩した。

「……なっ……！」

背部スラスタで何とか体勢を保とうとするが、そこに飛び掛った斗雨也の回し蹴りが瑠那の機体の頭部を吹き飛ばし、続いて足場から形成された触手が瑠那の機体の両腕を引き千切った。そうして、斗雨也が更に回し蹴りを瑠那機の胸部へ叩き込む。

「ぐあっ！」

弾き飛ばされた瑠那の機体が建物に減り込んだ。

そのままアウターボディから触手を康祐へと伸ばし、斗雨也自身も康祐へと突撃する。

純は康祐の機体の両腕が破壊されるのを見ながら、何とか機体を起き上がらせていた。背部スラスタが激突の衝撃で変形し、アラートが表示されている。

「最強が貴様では、俺を倒せる者はないな……」

斗雨也が勝ち誇ったかのように言い、暁彦の機体をアウターボディの山から蹴落とした。

「……私よりも強い奴は、まだ残ってる」

瑠那が放った言葉に、斗雨也の動きが一瞬止まった。

「まだ残っている、だと……？」

斗雨也が周囲を見回し、純に向き直る。

「……まさか、貴様か？」

「斗雨也……あんたは何で俺達を殺そうとするんだ？」

その問いには答えず、純は訊き返した。

「進化出来ずにいるものは淘汰されるのが自然界の掟だ」

「……進化したっていうお前等の仲間を捨て駒にしてもか？」

「……ふん、戯言だな。前言撤回だ。俺は貴様等全てが憎いからだ

！」

純の言葉に斗雨也は言い、駆け出した。

「戯言だと……？」

「理屈付け等、所詮はこじつけにしか過ぎん」

斗雨也が突き出した剣を避け、純は背後に回り込む。

背後から打ち出されたであろうアウターボディの触手を、跳躍する事で回避し、下方の斗雨也へとアサルトライフルを放った。

「自分の欲望のためなら何でも犠牲にして良いと思っっているのか？」

「それが人間だ！」

跳躍した斗雨也がその左手を触手にして突き出す。

右腕でその触手を打ち払い、左手のショットライフルを向けるが斗雨也がアウターボディから触手を生じさせて足場にし、より高く

跳躍して回避した。その上で足場にした触手を純へと向ける。身体

を捻って回避するが、アサルトライフルが破壊され、純はそれを投げ捨てた。

「っ！」

着地したアウターボディが純の体勢を崩すかのように蠢き、バランスを崩したところへ斗雨也が上空から斬りかかった。

「はあっ！」

呼気と共に純は歪んだ足場を蹴飛ばし、斗雨也の真下を滑り抜けて攻撃を回避するとその背後からショットライフルを放った。

左肩を吹き飛ばされた斗雨也がアウトターボディに倒れ込み、その腕が復元される。同時に、斗雨也が純へと弾き飛ばされ、空中で身を捻って純を正面に捉えた斗雨也が剣を振り上げた。

後方に飛び退いた純に、アウトターボディから触手が無数に打ち出される。

「アラートなんか知るか！」

警告音を発している背部スラストを稼働させ、急加速した純が触手の間をすり抜けた。

途中で背部が爆発して体勢が崩れ、機体の左足を触手が掠り、右肩と左脇腹、右脚に触手が突き刺さり、振動が純を襲う。更には破損し、変形したパーツが純の身体を挟み込んで激痛を与えた。

「うがあああああっ！」

咆え、正面から斬りかかって来る斗雨也に、純は左腕のショットライフルを突きつけた。

瞬間、斗雨也の表情に驚愕が見えた。被弾した状態の純が反撃に転じられるとは思わなかったのだらう。振り下ろされた剣が純の機体の頭部に減り込んだ瞬間、ショットライフルが火を噴いた。

至近距離で炸薬弾を全身に浴びた斗雨也が爆発し、身体が消滅する。腕と足が左右に千切れ飛び、首が大きく吹き飛ばされ、その場から遠くへと落下して行った。

純の機体が着地した直後、残っていた左足がその負荷に耐え切れずに拉げた。そして倒れた衝撃が純の全身に大きく押し掛かり、負った傷による生身への負傷で、純は気を失った。

第五章 「終わらない危機」

第五章 「終わらない危機」

鈍い痛みに促されるように、純は目を開いた。

薄白い医務室の天井が真正面に見えた。鈍痛を訴える身体の各部を、その感覚で感じ取り、純は自身の怪我の度合いを確認する。

左腕と右肩、右足に包帯が巻かれているのが解った。特に左腕の痛みが強く、それだけでなくも全身打撲といったところだろう。それでも、動ける程には回復しているようだった。

上体を起こし、純は周囲を見回した。身体には包帯が巻かれ、新しいランニングシャツと、安物のズボンを身に着けていた。

医務室内に並んでいるベッドの中でも、純は一番奥に寝ていたらしい。それに加えて、寝ていたのは純だけのようで、他のベッドは丁寧に整頓されている。

(……どうなったんだ……?)

その周囲の様子を見て、純はベッドから降りた。足が多少痛んだが、歩けない程ではない。他の傷も、普通に身体を動かすのに支障はなかった。

通路に出た純は司令室と格納庫どちらに向かうか迷った結果、司令室へと向かう事にした。戦力の確認ならば司令室でも見られるはずだと思っただのである。

そうして、司令室に辿り着いた純は直ぐにドアを開けて中に踏み込んだ。

「純！ 気が付いたか！」

雄が純に気付き、歩いて来る。心なしか表情が明るい。

「どうなったんですか？」

純は口を開いた。

雄だけでなく、司令室にいた全員が純に注目し、笑みを浮かべて

いる。

「君が斗雨也を倒してくれたお陰だ。こちらの被害も大きかったが……しばらくは奴等も来ないだろう」

「被害……？ 状況は……？」

雄の言葉に、純は問い返した。

「うむ、君が斗雨也を倒した後、敵は一時的に激しく抵抗した。そのお陰で全アサルト・アーマーが破壊されてしまったのだ。もっとも、死者はほとんどいなかったが」

斗雨也が死んだ事でリグノイドの統制が乱れたために、一時的に錯乱したのかもしれないと、イデアは推測したらしい。そうして、その時に主力の純や暁彦達も戦闘不能状態になっていたために、アサルト・アーマーは全て戦闘不能に追い込まれたのだそうだ。戦闘不能に追い込んだにも関わらず、リグノイドは止めを刺さずに逃走したとの事だった。

その雄の説明を聞いて、純は斗雨也本人の攻撃を凌げた事に安堵した。

「……俺はどのくらい意識がなかったんです？」

「丸一日は眠っていた。だから、一昨日、君は斗雨也と戦ったんだ。雄の返答に、純はただ頷くしかなかった。

「そつえば、皆は？」

「皆、自分の思い思いの形で休んでいるよ。君程ではないが、皆、負傷したからな」

純の問いに雄が笑みを浮かべて答える。

「……大和さんは？」

仲間の事を訊いて、純は思い出した。

その疑問に、雄の表情が少し硬くなったように見えた。

「……大和は……助からなかった。昨日、君の意識がない時に、息を引き取った」

「……そう、ですか……」

雄の言葉に、純は俯いた。

涙は、出ない。それでも、何か重苦しいものが押し掛かったように、純は感じた。

「大和は、行動力と決断力に優れた良き友だった。今、イデアの主力となっている君達五人は少なからず彼に影響されている」

純は、その言葉に何も答えられなかった。

大和は、イデアの中でも重要な人物だったのだろう。主力五人とは、恐らく純、亜沙、康祐、深玖、瑠那の五人の事だ。

「……今日は、ゆっくり休みなさい。斗雨也を倒して、我々も休息出来るのだからな」

「……そうします」

小さく笑みを返し、純は司令室を後にした。

自分の部屋へ向かいながら、純は思う。一度に色々な事があり過ぎて、イデアの中でも混乱しているのかもしれない。だが、それが生じているのも、純が斗雨也を倒したという成果があつての事だ。

耕太の死、大和の死、そして、斗雨也の死。

特に純の心を締め付けたのは、耕太の死だった。無論、それと大和の死は繋がっている。

イデア司令の雄は、大和の事を純が尋ねた時、その原因となつた耕太の事には触れなかった。純が耕太を撃つた事を配慮しての事か、耕太が斗雨也の策略で送り込まれていたからなのかは、判らない。

他の人達は耕太を、大和をどう思うのだろうか。

斗雨也の策略に乗ってしまっていた大和を、罵る者がいないとは言い切れない。たとえ大和が信頼されていても、その信頼が崩れる事だつて有り得るのだ。いや、崩す事の方が簡単なのだ。

リグノイドである耕太も、イデアに入れるべきではなかったと言う者がいるかもしれない。たとえ耕太のお陰で命を救われた者がいるとしても、現実に斗雨也に操られていた耕太を目の当たりにしてしまえば、その意思を信じる事は難しい。それが本当に耕太の意思だったのか、確定出来る証拠は何も無いのだ。

だが、耕太には耕太自身の意思があつたと、純は思う。純の初出

撃の時、会話を交わした耕太は、居場所を失うのを怖がるただの子供だったのだ。

自分の部屋に戻り、上着を着込んだ純は食堂へ向かった。丸一日何も食べていなかったために、空腹だった。

食堂には、食事をしている者は誰もいない。時間的なものもあるのだろうと思いつながら、軽い食事を頼み、純は一人端の方で食べていた。

「……純？」

不意に掛けられた声に、純は視線を向ける。その視界に入ったのは亜沙だった。

「気が付いたの？」

「……少し前にね。さっき司令室に行つて色々聞いて来たところ」
純に歩み寄つて来る亜沙に、食事をしながら答える。

「……やっぱり、大和さんの事？」

「……それもあるけど、どうして？」

頷いて、純は問い返す。

「私も、シヨックだったから。前に言ったでしょ？ 私も大和さんに助けられて地下に来たから」

「……そっか」

返す言葉が見当たらず、純はぎこちなくそう答えた

「……ねえ、純はこれからどうするの？」

「え？」

亜沙の言葉に、純は思わず訊き返していた。

「斗雨也を倒したから、皆、休みを取っているのよ。康祐や深玖は街に出てるし、他の人達もほとんどが交代で休暇を取ってるの」

「そうか、だから他に人を見かけなかったのか……」

いつもより圧倒的に人が少ない事に純は納得した。

「亜沙は、出ないのか？」

「私は、元々地上で暮らしてたから」

純の問いに、亜沙は曖昧な笑みを浮かべて答えた。

行きたい場所が思い付かないというところだろうか、と純は推測した。純自身、そうだからだ。
「俺は……別に行ってみたいところもないしな。部屋で少し休もうかな」

傷が完治していないという事もある。そう思い、純は亜沙に言った。

「亜沙はどうするんだ？」

食事を終え、食器を片付けてから食堂を出ようとして、純は尋ねる。

「私も部屋で休むつもりよ」

「ん、そうか」

返答に頷き、純は自分の部屋に向かった。

部屋に着いた純は、ベッドに腰を下ろし、ナイトテーブルの上に置いてある端末を手取る。電源を入れてディスプレイを開いたところで、純はメールが届いているのに気付いた。

そのアイコンを選択し、開かれたメールにはパスワードによるロックが掛けられていた。

「……何だ、これ？」

呟き、パスワード入力ウィンドウと共に画面に映し出されている差出人を見て、純は驚愕した。

「……大和……さん……？」

そこには、大和の名が書かれていた。

送信日は昨日付けで、題名には『君の名前』と綴られている。

純は、自身の名前を打ち込み、エンターを押した。ロックが解除され、本文が表示されて行く。純の視線は、その文面へと向かって行った。

天風 純。

アイデア

君がこの文章を読む頃には、私はもうこの世にはいないだろう。私には、君に伝えておかなければならない事がある。耕太と、君

の両親の事について、だ。

耕太が斗雨也の策略で送り込まれた事は、薄々感付いていた。リグノイドの意思というものが、本人のものなのかを判断する事は我々には出来ない。唯一人、斗雨也が他のリグノイドの意識に干渉出来るという時点で、真実か虚偽かは判らないのだ。

いきなり敵が戦闘を始め、そこが我々の基地のある場所でない事が判った時、私は暁彦と瑠那を連れて偵察に向かい、同じリグノイドに追われている耕太を見つけた。意味も解らずに襲われ、泣きじやくりながら必死で逃げ続ける耕太を、私は見捨てる事が出来なかった。暁彦と瑠那は反対したが、私は説得した上で耕太を助け、アイデアに招き入れた。この時点で、斗雨也の策略であるという可能性は、十分に考えられた。アイデアの仲間と地下に住む者達を脅かしてしまったのは、私のミスだ。

だが、一つ知っておいて欲しい。耕太には、確かに彼自身の意思があつて、アイデアに参加したのだ。それだけははっきりと言える。私は、その決断を下した耕太が見せた感情を忘れる事は出来ない。それ以来、自身と同じリグノイドと戦う事と、自分一人がアイデアの中でリグノイドだという現実には挟まれ、耕太は無口になり、感情を隠していった。恐らく、耕太は斗雨也からの干渉を感じていたのかもしれないと、私は思う。だが、耕太には行くべき場所はアイデア以外にはなく、地上に戻っても同じリグノイドに攻撃されると思つたのだろう。言い出せず、全て内側に押し込めていたのだ。

耕太を撃つた事は、正しい判断だ。そうしなければ、地下の人間全ての命が失われていただろう。無論、耕太にも生きたいという意思があつた事も承知している。私が出来れば、自分で蒔いた種は自分で始末を付けたかった。君に引き金を引かせてしまった事を謝りたい。

それから、君の両親の事だ。

君の両親は、君が産まれて間もなく、リグノイドに襲われるようになったようだ。恐らく、出生時の検査等で、カルマが検出されな

かつたために、斗雨也に気付かれたのだろう。そうして、君を連れて逃げる途中で、君の両親は自分達を囿にする事で君を救おうと決心したのだ。君を捨て子として自分達と隔離し、自分達が逃げる事で君から敵の目を逸らす。結果は知つての通り、成功し、君は今まで地上で生きて来る事が出来た。それから、二、三年が経ち、君の両親が襲われているところをアイデアが発見し、救出した。二人とも君の事を心配していた。君を探すためにも、と戦闘要員になった二人は、その適性の高さから主力となり、今まで我々を幾度と無く救つてくれた。

君の両親は、三年前に斗雨也によつて殺された。その時、私は今回、君を助けたように、亜沙を助け出すために動いていた。その時、援護として戦つたのが、君の両親だった。君を地上に残して来た事からも放つておけなかつたのだろう。二人はいつも君の事を気にかけていた。亜沙を連れてリグノイドの追っ手からトレーラーとの合流地点に向かつている時、私達の前に斗雨也が降り立った。君の両親は、その時に斗雨也を撤退させたが、斗雨也が逃走と同時に繰り出した攻撃から亜沙と私を庇つて命を落とした。

その時の亜沙は、気を失つていたためにこの事は知らない。彼女の事だから、それを知れば心を痛めるだろう。君には、両親の事だから伝えておきたかつたが、亜沙には、今は黙つておいて欲しい。

三年前まで地上で暮らしていた亜沙は、様々なものを内側に溜め込んでいるはずだ。君が来るまでは、今の君と同じように、唯一地上で暮らした事のある人間であり、地下の事をほとんど知らなかつた人間なのだ。私では、亜沙の命を救う事しか出来なかつた。

いや、亜沙だけではない。瑠那も、康祐も、深玖も、勿論君も、私は誘導する事しか出来なかつた。残念だが、私には、君達の心を癒す事は出来ないらしい。

最後に、君には一つお願いしたい事がある。

同じ地上で暮らしていた者として、亜沙を頼む。

三条 大和。

純はそのファイルを閉じる。

(……気付いてたのか)

その事がまずシヨックだった。

だが、考えてみれば当然の事なのかもしれない。大和は誰に対しても優しい人格の持ち主だったのだ。優しさを持てる人間は、それだけ相手の事を考える事が出来る。大和が耕太の事に気付かない方がおかしいのかもしれない。

誰でも、自分の居場所を失うのは怖ろしいものだ。それは、今まで住んでいた場所を追われた純には特に察する事が出来る。

(……卑怯だ)

純は、そう思った。

大和の遺書には、過ぎさった過去と、純に対しての願いが綴られている。そこには、大和が秘めていたのであるう思いが綴られているのだ。

しかし、純が大和に同じように秘めている思いを打ち明ける事は、もう出来ない。純にも、言えなくて、それでも言いたくて迷っていた思いもあるというのに。

自分一人だけそれを打ち明けて、手の届かない場所に逝ってしまったのは、卑怯だと思う。だが、それでももう、過去となった大和の死を変える事は出来ない。

端末を小脇に抱え、純は部屋を出る。そのまま、訓練室へと向かった。そこには、大抵の訓練が出来るように設備が整えられている。勿論、その中には射撃訓練場もある。

純はそこへ向かい、携帯端末を近くに置いて射撃訓練場の最も奥に立った。

懐にある、大和から受け取った拳銃を引き抜き、十数メートル離れた的に狙いを定めて引き金を絞る。

生身でも十分に連射して撃てるように軽減された低反動。静音機構のお陰でさほど大きくない銃声。無薬莖弾が放たれ、的に穴を穿

つ。

アサルト・アーマーで射撃をした時とは比べ物にならないほどの中心を外していた。耕太を撃てたのも、まぐれだったのだと頷かせる。純の射撃の腕は、生身ではそれ程良い訳ではない。

次の弾が装填されると、純はもう一度腕を伸ばし、銃の引き金を引いた。打ち出された弾丸が、穴を開けて行く。

そうして、弾倉の中の弾丸を全て撃ち尽くした純はその場に座り込んだ。

「……………くそっ……………！」

呻き、純は拳銃を強く握り締めた。

(……………俺に、出来ると思ってるのか?)

純は視線を穴だらけの的へと向けた。

いくつか開けられた穴は、全てのの中心を外れている。

誰かを守れと言われた事は、純にはない。守りたいと思うものすら、今までの純には無かった。しかし、それは、純が必要としない世界で生きて来たからだ。誰かを守る必要もなく、誰かに守られる事もない、平凡な毎日。だが、それは偽りの世界だった。

本当の世界は、争い続ける事で残り僅かな人類を守り続けるという世界だった。

その中で純がした事と言えば、親友だった隆一と別れ、耕太を撃ち殺して、斗雨也を打ち倒したただけだ。それが結果的に地下の世界を救ったのだとしても、純自身はそれを求めて戦った訳ではない。

「……………純？」

不意に、声がした。

顔を向ければ、そこには亜沙が立っていた。

「どうしたの？ こんなところで……………」

尋ねて来た亜沙に、純は返答に迷った。

「……………もしかして、メールに何か書かれてたの？」

「何でそれを？」

近くに置かれていた端末を見た亜沙の言葉に、純は反射的に訊き

返していた。

純は一日眠っていたのだから、その間に純の端末を亜沙が見てしまったという事だろうか。

「大和さん、私達一人一人にメールを打ったのよ。私と、康祐と深玖、そして瑠那。暁彦さんにはないみたいだけど。あなたにも送信されていたのになって思って」

「そうか。皆に送ってたのか……」

亜沙の言葉に、純は曖昧な表情を浮かべて視線を穴だらけの的へと向けた。

大和は純達五人に対してそれぞれに、メッセージと願いを託していたのだ。考えてみれば、大和のような人物が純一人にだけメッセージを残すというのもおかしい話である。やはり、皆にそれぞれ渡していたのだろう。

(やつぱり、卑怯だよ……)

大和はそれをする事で純達の結束力を強めようとしていたのかもしれない。

「大和さんは皆に信頼されていたから……」

一瞬だけ見えた亜沙の表情に、複雑な感情が入り混じっているのを、純は見た。

(……)

少しだけ、純は大和の言葉が解った気がした。

亜沙は、地下の生活にまだ完全には馴染めていない。それは、元々地上で暮らしていたという意識が生む疎外感の一種なのだろう。

純もまだ感じている、地下と地上の生活の微妙な環境の違いに慣れないところがある。それに、地下の事をほとんど知らないという事は、他の人達との会話に混じれない事も少なくはないはずだ。

加えて、大和の死だ。

大和の存在は、恐らく亜沙にとっては重要なものだったはずだ。

襲われた純を救出し、地下まで導いた彼を、純自身も慕っていたからだ。あまり会う機会もなく、話す事もほとんどなかったが、それ

でも大和は純の人生を大きく動かした人物に間違いはない。

「……亜沙は、何でここに？ 部屋で休んでたんじゃないのか？」

「私は、暇だったから、少し歩いてたの。そうしたら、銃声が聞こえたから……」

純の問いに、亜沙が答える。

外に出て散歩はしないのか、とは訊かなかった。ほとんど無意識のうちに話を逸らす。

「……耕太が、斗雨也の策略だった事、大和さんは気付いてたらしい」

「……私のところにも、書かれてたわ」

純の言葉に答えながら、亜沙は純の隣に腰を下ろした。

「でも、これで終わったのよね……」

「……俺はそれだけじゃない気がする」

亜沙の言葉に、純は小さく呟いた。

「え……？」

「まだ、何かあるような気がして、不安なんだ……」

「でも、斗雨也は確かにあなたが……」

その亜沙の言葉に、純は頷く。

「斗雨也と言葉を交わして解ったけど、あいつは三十年も時間を費やして、俺達と戦うような奴じゃない」

ただ単に普通の人間が憎かったのならば、リグノイドとなった斗雨也は人類を全て抹殺しようとしたはずだ。自分を除いて全ての人間を標的として虐殺するという方が、純が聞いた斗雨也の考えからは想像し易い。

憎かったはずの人間を自分と同じリグノイドに侵食させた目的が他にあると考えるべきかもしれない。純に見せたのは斗雨也の自演だったとも考えられる。

もしくは、斗雨也の裏に誰か別の存在がいるという事も考えられる。

（それに、俺は隆一に会ってない……）

口には出さず、純は付け加えた。

もし、あれで戦いが終わるようならば、隆一は純に会いに来ていたはずだ。斗雨也が死に、情報統制が乱ればリグノイドがイデアに攻撃を仕掛ける事はほとんどなくなると予測されている。リグノイドだって平穏な暮らしをしていた方が良いだろうからだ。そうなれば、隆一と純が会う機会はほとんどなくなると考えて良いはずだ。そのため、隆一はイデアとの戦いが激しいうちに純に会いに来るだろうと、純は考えている。

「まだ、何かあるのかもしれない……」
腑に落ちない事が多過ぎるのだ。

今まで現れなかった斗雨也が今になって接触して来た事も、三十年も斗雨也が何を準備していたのかも、斗雨也の目的も。全て解決していないのだから。

「俺の考え過ぎだと良いんだけどな」
拳銃に弾丸を詰めながら、純は言う。

弾丸を詰め終え、安全装置を掛けて拳銃を懐にしまっても、純も亜沙も口を開かなかつた。純にとっては重苦しいと感じる雰囲気を開する事も出来ず、純はそのまま無言で座ったままだった。

その沈黙を破ったのは、亜沙だった。

「……ねえ、純は何故戦う事を選んだの？」

「何で今更そんな事を？」

亜沙の言葉に、純は顔を向ける。

「……地下に来るまでに怖い思いしたでしょ？ どうしてまた、自分からそんなところに？」

「……それを言うなら亜沙だって。まあ、俺は……色々言えるけど、やっぱり、地上にいた者が人間なのか見極めたいから、かな」

苦笑し、純は答えた。

確かに、大和に連れられて地下に来るまでに、純は親友と別れ、自分の義兄弟に殺されかけ、その死を見た。それは二度と体験したくない出来事だ。

「俺の両親が守って来たものがどうなるのかを見たい、だとか、一度関わったから、っていう理由もあるけど。俺は、リグノイドが本当に人間と違うものになってしまったのか、見極めたい」
根底にあるのは、何が人間を攻撃しているのか、という疑問だった。

それがカルマなのか、それともカルマを持つてしまった人間なのか。今まで共に過ごして来た家族を敵として戦い、隆一の動きが純には判らない。純には、この結末を見る権利があるはずだ。

「……私は、他に出来る事がなかったの」

「え……？」

悲しみと羨望の混じった、困ったような表情を浮かべて告げた亜沙に、純は戸惑った。

そんな表情の亜沙を、純は今までに見た事がない。

「両親を失って、地下は見知らぬ土地で、私は生きて行ける自信がなかった。外で平穏な暮らしをしても、私は一人ぼっちだから、多分、淋しさに耐えられないと思う。だから、私は少しでも一人でいる事を忘れられるように、戦う事にしたわ。確かに、康祐や深玖、瑠那とは仲良くなれたけど、一人でいるとどうしても、辛くなる時があるの……」

目に涙を溜め、亜沙は語った。

「……俺には少し羨ましい感情だな、それは」

純の言葉に、亜沙は俯き気味になっていた顔を上げた。

その瞬間、涙が一筋、頬を伝って行った。

「俺は元々養子として育ったから、出来る限り一人で生きて行く事を考えてた。一人でいる時に孤独を感じる事は勿論あるけど、今まで生きている中で耐えられるようになってしまった。俺には、他の人とは違う事情がある、そう思う事で感情を強引に押し伏せる事が出来るようになってたんだ」

苦笑いを浮かべ、純は言う。

その結果、地上にいた純が孤独だったというのは、現実でも同じ

だった。たった一人、地上で暮らしていた普通の人間だったのだ。
「ただ、自分が孤独だっというのは、皆そうだと思うよ？ 人間はどうしたってお互いを完全に理解する事は出来ないんだ。元々、人間は一人なんだよ。だから、他の人と解り合おうとするし、一緒に楽しく過ごせれば嬉しい事だと感じる。違うかな？」

無言の亜沙に対して、純は一度間を置いて口を開いた。

「過去に縛られて、一人だと感じる事、孤独を感じる事は無駄な事だと思う。過去を取り戻す事は出来ないんだ。それなら、過去の自分のように笑えるように前を向いた方が良くないか？」

亜沙は目を伏せ、何か考えるようにしていたが、やがて顔を上げた。
「私に、出来るかな……？」

「気の持ちようだよ。それに、俺だって地上で過ごしたんだ。地上で暮らした人の相談には乗れると思うけど？」

不安げに問う亜沙に、純は笑みを浮かべて答える。

そうして、立ち上がった純は亜沙に手を差し出した。亜沙は、ゆっくりとだったがおその手を掴んでくれた。

「……ありがとう」

指で涙を拭いながら言われた言葉に、純は微笑だけで答えた。

(これも大和さんが仕組んだのかな……？)

ふと、純は思った。大和が、亜沙を守って欲しいと純に頼んだように、亜沙にも純に近づくように言ったのかもしれない。

そう思い、亜沙に判らないように純は小さく苦笑を浮かべる。

と、突然基地内に警報が鳴り響いた。

携帯端末を掴んだ純は亜沙と顔を見合わせ、頷き合つと射撃訓練場を飛び出した。

アイデア

ドアを開け、入って来た人物に、隆一は一度だけ視線を向け、直ぐに外した。

「どうやら負けたみたいだな？」

素っ気ない口調で、隆一の告げた言葉に、その男が視線を向けるのが判る。

「良かったな、死ななくて」

口調を変えず、挑発するかのように隆一は言った。

リグノイドは脳を破壊されない限り、身体を修復する事が出来る。先の戦闘で首だけとなった斗雨也は、アウターボディを取り込む事で自身の身体を復元していた。

空気が動くのを感じ、隆一は瞬時に左手を剣状に変化させて持ち上げる。その腕に、同じように剣状に変化させた斗雨也の右腕がぶつかった。室内に硬質な金属音が響く。

体重を乗せるように押し付けて来る斗雨也を、隆一は上目遣いで見上げる。

「あんたの敵はリグノイドじゃないだろ？」

口元に小さな笑みを浮かべて告げた言葉に、斗雨也は顔色一つ変えずに剣を引いた。

元の腕に戻し、隆一を見下ろすようにして斗雨也が目の前を通り過ぎる。

「お前は何を考えている？」

「そりゃあこっちの台詞だな」

擦れ違うような位置で足を止めた斗雨也の言葉に、隆一は言った。
「何だと？」

斗雨也が初めてその表情を崩したのを、隆一は見た。

眉間に皺を寄せ、隆一を睨み付けるように視線を向けている。

「確か、あんたはリグノイドではない人間全てを敵としていたはずだよな？」

「それがどうした？」

「だったら、三十年前から自分以外の全てを敵と見做して殺していれば良かったはずだろ。三十年もの時間を掛けてリグノイドを増やして、何を考えてる？」

「……何が言いたい？」

斗雨也が隆一に刺すような視線を向ける。

「お前がやってる事が、お前自身の意志だと言えるか？」

「それ以外に何かがある。俺は俺の意志で動いている」

隆一の言葉を、斗雨也は即座に否定した。

そのまま、部屋の奥へと進んで行く斗雨也の背中を視線で追い、隆一は目を細める。

斗雨也の作戦は、失敗に終わった。リグノイドの少年を一人、強制的に地下へと送り込み、意識干渉によってスパイとした作戦は成功したが、そうして得た情報から地下を直接攻めめるといふ計画は失敗した。その上、地上からの大規模な包囲と強襲も、一体のアサル・アーマーによって戦況を覆されてしまった。

隆一は、スパイとして送り込まれた少年を見た瞬間、その少年の意識を覗こうと試みた。戦場へ行くために隆一は既に、意識干渉の技術を使っていたのだ。その少年の意識に触れる事は出来るはずだった。少年に気付かれずに、意識の一部を見る事は、隆一には既に可能な事となっているのだから。

しかし、その少年の意識に触れた隆一は、そこに斗雨也の意識干渉の痕跡がある事に気付いた。だからこそ、斗雨也が地下の場所を掘み、襲撃する事を察知出来たのだ。

だが、それでは辻褃が合わない事がある。

斗雨也が、地下の人間全てを抹殺したいのであれば、地下に潜り込ませた少年を戦闘要員にはさせず、民間人として生活させた上で密かに住人を仕留めて行けばいい。それをせずに、戦闘要員にさせて時を待ち、自ら攻撃を仕掛けるというのは、非効率的なはずだ。

(……地下に戦力は残ってるのか?)

口に出さずに自問し、隆一は部屋を出た。

斗雨也は、もう一度大規模な強襲を仕掛けようとしている。そして、地下の戦力は、先の決戦でその大半を失ったはずだ。下手をすれば全戦力が失われている可能性も高い。

恐らく、襲撃するのは明日辺りだろう。昨日の決戦から、明日まででどれだけ戦力を補充出来るか。

昨日の決戦を、隆一は離れた場所から見物していた。聴覚と視覚を強化させて、一部始終を見ていたのだ。

斗雨也を倒す事が出来たアサルト・アーマーから聞こえたのは、確かに純の声だった。斗雨也と相打ちになった純は、その命中箇所から推測するに、生きているはずだ。怪我をしている可能性はある。それでも、死んではないないと、隆一には判った。

純には、アサルト・アーマーによる戦闘技術の才能があるようだ。それも、かなり高い才能として。

(イレギュラー、ね……)

不意に、純と別れた日に聞いた言葉が思い出された。

だが、隆一が思い出したその言葉は純に対して向けられたものではない。

(本当にイレギュラーなのは、純か、俺か、斗雨也か……)

リグノイドとして、一段階上の存在である斗雨也と、それと同等であるとされる隆一。その二人はリグノイドとして見ればイレギュラーではないだろうか、とも思う。

あの日向けられたイレギュラーという言葉は、実は自分に対してのものかもしれないとさえ、隆一は思う。

ここ数日の間で隆一は様々な事を調べた。

三十年前に何があったのかを始めとして、斗雨也の存在と、リグノイド、カルマに関しても。それが出来たのは隆一が斗雨也からの干渉を受けないという特性があったためだ。

もし、斗雨也から干渉出来たのであれば、隆一はそれを調べる事すら考えられなかったはずだからだ。

他の何者からも意識干渉される事のないリグノイドである、隆一の方が本当の意味でイレギュラーなのかもしれない。

リグノイドの意思とは、本当にその人の意思なのか、隆一にはもう解らない。ただ、はっきりと言えるのは、リグノイドではない地

下の人間達と、自分だけは己の意思を持っている。
それを、純が理解してくれるかどうかは、別問題として。

司令室に駆け込んだ純と亜沙は、雄へと視線を向ける。

「何があつたんですか！」

呼吸を整える事も忘れて、純は雄に尋ねた。

「敵襲だ……！ 包囲されている」

険しい表情で答える雄の視線を追い、純は司令室正面の大型モニターに視線を向けた。

そこに表示されているのはアイデアの上、地上の地図と、無数の赤い光点だ。その広域レーダー上を、無数の赤い光点が、まるでそう指示されているかのように一定の形に動いて行く。その図形は、円。つまり、包囲網だ。

「やつぱり、生きてたのか！」

思わず、純は呟いていた。

あれだけ無数のリグノイドが均整の取れた動きをしているという事は、指揮官が残っているという事だ。斗雨也は死んでいないか、もしくは別の指揮官がいるという事になる。

「……油断していたという事が……！」

雄が呻く。

斗雨也を倒したという事に浮かれ過ぎていたという事だ。

「出撃します」

「……待て、無理だ」

司令室を出ようとした純を、雄が引き止めた。

「無理……？」

「まさか、司令……！」

純の言葉を、亜沙が遮るように言った。

不安げなその声に、雄はゆっくりと、静かに頷く。亜沙の顔が青褪めた。

「……そうだ、アサルト・アーマーは全て修理中で使えるものはない」

整備員もほとんどが休暇を取り、残り少ない人達だけでゆっくとやっていたのだ。

今の警報は、イデアにいる人間なら全員が持っている携帯端末に伝わっている。全員が直ぐに集合するだろうが、それでは間に合わないかもしれない。

「動かせるものはないんですか？」

「……ない」

純の問いに、雄が辛そうに答える。

「訓練用のものなら……！」

「あれには実戦武器用のシステム・ドライバはインストールされていない。使うには、時間が掛かる」

雄の言葉に、純は言葉に詰まった。

訓練用のアサルト・アーマーが扱えるのは、ペイント弾を装填したトレーニング用のハンドガンと、セラミック複合材で出来た訓練用ダガーしかない。それではリグノイドを倒す事は出来ないのだ。

そして、そのシステム・ドライバをインストールするのは、アサルト・アーマーの骨組みの内部に収納されているメイン・コンピュータを引っ張り出して、ディスクからダウンロードする必要がある。しかし、メイン・コンピュータを引っ張り出すためにパーツの一部を取り外し、システム・ドライバをインストールしてからパーツを戻し、実戦武器を搭載させるという順序が必要になり、それでは時間が掛かり過ぎてしまう。

それならば、純粋に半壊したアサルト・アーマーをパーツ換装で使えるようにした方が時間は短くて済むのだ。

だが、この状況では、その時間すら間に合わないかもしれない。

「……何か、ないんですか？」

亜沙が心配そうな表情で雄に問う。

「メック・スーツなら何着かある。しかし、これでは……」

雄は首を振って答えた。

メック・スーツは、アサルト・アーマーの援護に用いる程度の戦闘能力しか発揮出来ない。パワー・アシストはあるが、背部にスラストはなく、戦闘機動が出来ないのだ。しかも、メック・スーツはアサルト・アーマーと違い、自分の身体を動かして扱うものである。アサルト・アーマーのように、人間の感覚を超えた動きは出来ないと云っても良い。

無数の敵の前にそんな状態で戦いを挑むのは、ただ死に行くようなものだ。下手にこちらから攻撃してしまえば、相手がそれを契機に攻撃を開始する。そうなってしまったては、むしろ逆効果と言える。

メック・スーツではアサルト・アーマーの修理を待つ時間稼ぎも出来ないのだ。しかも、メック・スーツで純達が戦っていれば、アサルト・アーマーでその戦闘能力の真価を発揮出来る主戦力の人達は出撃する事が出来なくなってしまう。

現時点で、アイデアに残っている戦闘要員は、純と亜沙ぐらいしかないのだ。

(何か、何か無いのか……?)

純は必死に考えをめぐらせる。

隆一があれを率いているという可能性がない訳ではない。純に会いに来るといのが、こういう意味だったという事も考えられるのだ。だが、純にはそうは思えない。

だとすれば、敵を率いているのは斗雨也か、それとはまた別の存在。

折角斗雨也の攻撃を凌いだのだ。こんなところで、死ぬつもりは純にはない。最終的にはメック・スーツでも出撃するつもりでいる。もし、本当に使えるアサルト・アーマーがないのなら。

(……壊れていない、アサルト・アーマー?)

戦闘不能ではない、壊れていない、アサルト・アーマーがあった事を、純は思い出していた。

「ある……一機だけ、戦える機体がある！」
俯いていた顔を勢い良く上げ、純は雄に視線を向けた。
「どういう事……？」

亜沙の言葉に、純は視線を向け、口を開いた。

「確か、倉庫にアサルト・アーマーの試作機があったはずだ。それ
で出ます」

「え、でも、あれは……！」

亜沙の言葉に、純は頷く。

マインド・フォロウ・システムを初めて積んだ試作機であり、誰も
が戦闘機動までの適性値を持たなかったアサルト・アーマーの零
号機。

「確かに、あれならシステム・ドライバもインストールされていて、
直ぐにでも出撃準備が可能だが……」

雄が複雑な表情で純に視線を向ける。

戦闘機動が出来なければ、複数のリグノイドと戦う事は困難を極
める。アサルト・アーマーが主力とされ、リグノイドと同等以上に
戦えるのは、戦闘機動によるものと言っても過言ではないのだ。

無論、アサルト・アーマーの方がメック・スーツと比べても装甲
は厚く、出力も高い。自分の身体を動かす訳ではないために、肉体
疲労で戦闘が困難になるという問題点もなく、メック・スーツと違
って機体が大きいために、腕を切り落とされたとしても、コクピッ
トにダメージを受けない限りは搭乗者が怪我を追う事もない。

メック・スーツを使うよりはマシなはずだ。

「たった一人で戦って、勝てると思っているのか？」

「勝てないのは解ってる。だから、俺が時間を稼いでいる間に一機
を集中して修理して欲しい。そうして、完成したら直ぐに出撃させ
て、それを繰り返すしか、俺には良い方法が思い付かない」

雄の言葉に、純は告げる。

「たった一人で百を超えるであろうリグノイドと戦って勝つという
のは、不可能だ。それならば、純自身が時間稼ぎのための囮となっ

て、アサルト・アーマーを一つずつ集中して修理させ、送り込んで行く、という方が現実的だ。

「戦闘機動が出来ないので、その時間稼ぎすら出来んぞ？」

険しい表情で告げる雄に、純は笑みを見せた。

「戦闘機動出来ないって決まった訳じゃない」

「ぎこちない笑みだったと、純自身にも解った。

「俺は、あれに乗った事がない。もしかしたら、戦闘機動出来るかもしれない」

その可能性が極めて低い事は、純自身も理解している。

純の両親ですら、不可能だった零号機の戦闘機動を、純が出来るとは思えない。

「……駄目だ、死ぬと解っている場所に、君を向かわせる事は出来ない」

その、雄の決断は正しいものだったのだろう。

可能性はある。しかし、それは余りにも細い、一筋の光でしかない。

地下に住む人間全ての安全を考える者として、それは余りにも心細すぎるのだ。

「……アサルト・アーマーが修理されるのを待つんだ」

「それじゃあ、間に合わない！」

雄の言葉に、純は叫ぶようにして、言った。

「もう、確実だ不確実だなんて選んでいられる状況じゃないんだ！」

「そんな事は解っている！」

純の言葉を、雄の叫びが掻き消した。

「だからといって、このまま君を送り出してしまったら、私達は君を見殺しにする事にもなるんだぞ！ 私達に仲間を死地に赴かせる気が！」

その気迫に、純は一瞬だが、気圧されていた。

純が死ぬと解っていて、それを送り出せば、純を殺したも同然だというのだ。確かに、一縷の望みを掛けて戦った純が死んでしまえ

ば、送り出した雄達は心苦しい事だろう。それに、そこで望みも絶たれてしまうのだ。

「純、待ちましようよ」

「亜沙……」

「間に合う事を信じて、待ちましよう」

純の肩に手を置き、言い聞かせるように言う亜沙に、純は言葉を詰まらせた。

その亜沙の表情には、不安と絶望がある。それでも、最後まで待つ事に希望を見出し出しているのだ。

(……本当は、心を閉ざしてたんだな……)

今までに見た事のない、怯えている亜沙を見て、純は思う。

純と大和を助けた時の亜沙と、襲撃されるまでの亜沙は、今日、純が見た亜沙とは違って見えるように見えた。それは、亜沙が自身身を曝け出しているか隠しているかの違いだろう。

弱気な、自分の居る場所を見つけられずにいるという本当の心を、戦うという行為で隠していたのだ。

(守れ、だなんて、簡単に言ってくれるよ……)

大和のメールを思い出し、純は苦笑を浮かべた。

この状況で亜沙を守る事は、地下世界を守る事にも繋がる。

「……いや、俺は行く」

静かに、純は亜沙に告げた。

「駄目だ！ 行かせる訳にはいかん！」

「止めても、行きます」

雄の言葉に、純はそう答えた。

はつきりとした意思を込めた視線を、雄に突き付ける。

「……純」

亜沙が目には涙を溜めて呟いた。

「……仮に、修理が間に合っても、多分その時には敵は地下に入り込んでる。そうだったら、終わりだ」

純は亜沙を見、雄に視線を向けて言う。

地下に敵が入り込んでしまえば、通常の間人とリグノイドを見分ける事は難しい。レーダーに映るからといって、そればかり追っているだけでは周りが見えない。

地下で戦う事は、今までイデアが守って来たもの全てを巻き込んで戦う事になる。それは避けるべきだ。

地上と地下を仕切る層から下にリグノイドを侵攻させる事は防がなければならない。

「解ってるはずだ！ 地下に住む全ての人の命と、俺一人の命、この場所の安全を守る人なら俺の命を切り捨てるべきだ！」

「……やはり、血筋か。君の両親も同じような言葉を言った事がある」

目を細め、雄が告げた言葉に、純は言葉を詰まらせた。

「確かに、両親とは離れて暮らしていたが、君は天風の息子だな……」

自分と同じ言葉を両親も言っていた。その事に、純は一瞬だが揺らいでいた。驚きもある、しかし、それとは違う何か別の感情が込み上げて来るようであった。

「……一つだけ命令しておく」

雄の言葉に、純は視線を戻す。

「絶対に死ぬな。これだけは守れ」

「……出来るだけやってみるよ」

言い、純は口元に笑みを浮かべた。

「純……！」

振り返り、部屋を出ようとする純を、亜沙が呼び止める。

「俺はまだ死にたくない。だから、出来るだけ早く助けに来てくれ」

亜沙が喋ろうとするのを遮るように、純は告げ、背を向けて歩き出した。

「純っ！ 待って！」

その亜沙の呼び掛けを無視し、純は司令室を出た。

亜沙の言葉を最後まで聞かなかったのは、純が生きて戻るため

あり、亜沙も生き残らせるためだ。言いたい事を告げるまでは、そう思わせる事で、希望を残す。単純なやり方だが、それが効果を発揮するところは多い。

携帯端末を取り出し、純は通信を格納庫に繋いだ。

「純か！ 急いでいるがまだ修理は出来ていないぞ！」

通信ウィンドウに、男の顔が表示された。

「俺の機体を修理する労力は亜沙の機体に回してくれ」

通信に答えた整備員に、純は告げた。

「何だつて？ じゃあ、お前は どうするんだ？」

「詳しい事は司令から伝わるはず。要求だけ告げるよ」

「…解った」

「今すぐ零号機を出撃可能な状態にして欲しい。装備は今からそっちに送るから、頼んだ」

「零号機…？ だが、あれは…」

「司令の許可は貰った。俺は直ぐに着替えて向かう」

「仕方ねえな、解ったよ」

苦笑する整備員に笑みを返し、純は通信を切る。

そうして、装備一覧を転送し、端末を畳むと純は走り出した。

ロッカールームでサポート・スーツに着替えた純は部屋から飛び出し、格納庫へと急いだ。

「…純？」

途中、康祐と深玖と擦れ違った。

「出撃出来るのか？」

「今は俺だけだ。修理が済んだら助けに来てくれ。頼んだ」

康祐の問いに答えると、純は直ぐに走り出す。

今は少しでも時間が惜しい。雄との会話でだいぶ時間を費やしてしまった気がする。格納庫に着いた時、直ぐに出撃出来るかどうかも判らない。

通路を駆け抜け、格納庫に辿り着いた純は、すぐさまドアを開けて踏み込んだ。

「来たか、純。用意は直ぐに終わる。その間にお前は乗り込め」
整備員の言葉に頷き、純は零号機へと駆け寄った。

純白の装甲に、黒い筋の入った、線の細い機体がそこにあった。鋭さを感じさせるシャープな機体を見上げ、純は昇降用ワイヤーを使つてコクピットへと滑り込んだ。

操縦用のアーム・ボックスやレッグ・ボックス、ボディ・アーマーが純の身体を固定する。ほぼ同時にシステムが起動し、ヘッドギアがセットされてから起動が完了する。

次に、純は武装のチェックを行った。

背部の左右にあるウェポン・ラックにはグレネードライフルとショットライフル、アサルトライフルとマシンガンがそれぞれ一挺ずつマウントされており、脚部にはヒートダガーが一つずつ、左手にはロケット砲が、右手にはバズーカが握られている。更に、背部肩武装としてクラスターミサイルを三発積んでいた。

積載量をオーバーしていたが、手に持たせられている二つの武装と肩武装は弾数が少ない。使い切ったら投げ捨て、次の武装に取り替えて行けば重量は軽くなって行く。

敵の数を減らすには、敵が集中しているところへ強力な武器を叩き込んで巻き添えにして行くのが手っ取り早い。広範囲に攻撃出来る装備を手に持たせ、それを最初に使い切るといのが純の作戦だ。その間、機動力が落ちるが仕方がない。それは純が動き回って何とかする以外に方法はないのだ。

「純、聞こえるか？」

「何ですか？」

雄からの通信に、純は応じた。

「前のようにカタパルトで上空高くに打ち上げる。敵の集中攻撃があるかもしれん、十分に注意しろ！」

「解りました」

その忠告に小さく笑みを浮かべて返し、純は機体を射出口へと歩かせた。

集中攻撃に晒されるといのは、まず間違いないだろう。リグノイドに遠距離攻撃をする能力は、身体の一部を射出する以外にはない。だが、それをすればアウターボディを使っていないリグノイドは、自らの身体を削る事となる。空中にいる間はまだ安全と言えるかもしれない。

(……?)

歩かせた瞬間、純は違和感を感じていた。

足の裏が地面に着くのが、感覚として判る程に明瞭に機体が意思に追従している。本当に、機体が自分の身体であるかのように、純は感じていた。

「……純」

通信画面に映った雄の言葉に、純は視線だけを向けた。

「時間稼ぎ、頼んだぞ」

「応援の方も、頼みます」

雄の言葉に笑みを浮かべ、純は言った。

その画面に映る雄の背後には、亜沙、康祐、深玖、瑠那、暁彦の五人がいる。

「じゃあ、俺は先に出ます」

告げると、純はカタパルトに機体を乗せた。

通信回線が切断され、射出口のハッチが上部まで開いて行く。

純は、その先へと視線を向けるように、顔を上げた。

第六章 「人類の業」

第六章 「人類の業」

加速して行くカタパルトに、純は風を感じていた。まるで自分自身がカタパルトに乗っているような錯覚を覚える。身体にかかっているはずの不自然な重圧さえも感じない。全身の感覚が全てアサルト・アーマーに移っているかのようだ。

(……………二……………一……………！)

地上到達までの予測時間を声に出さずに反芻し、純は一度だけ息を呑む。

上方に見える光が視界を埋め尽くした瞬間、カタパルトから弾き出されるようにして、純の機体が空中へと放り出された。

仰向けになるような姿勢になった機体が、両手を広げて空高くまで飛び上がる。

(…… ああ、青い空だ……………)

視界に映った、その光景に、純は戦わなければならない事を一瞬だけ忘れていた。

青い空に、眩しい陽の光。これ程までにそれを感じた事は今まで無かった。それがどれだけ魅力的な事なのかも忘れていた。何ものにも縛られない現実がそこにはある。

陽光に目を細め、青い空の中、純は戦いへと意識を戻した。

身体を捻り、上下を逆にして、空中から地上を見下ろす。無数に見える人影が、視界の端にあるレーダーの光点の位置と一致している。

「……………行くぞ！」

呟き、純は引き金を引いた。

肩に搭載しておいた三発のクラスターミサイルを射出し、両手の武器を光点の集中している場所へと撃ち込んだ。

クラスターミサイルが途中で分解し、内部に込められていた無数の小型爆弾を地上にばら撒く。爆撃に光点が複数消滅、多数が吹き飛ばされて行く。続いて地上に到達した右手のバズーカの弾丸と左手武装のロケット弾が爆発を起こした。

落下しながら、純は両手の武器を連射して行く。ミサイルを地上に撃ち込み、バズーカは純を狙って跳躍して来るリグノイドの迎撃のために引き金を引いた。

「何っ！」

アウターボディを用いて翼を形成し、突撃して来るリグノイドへと放った弾丸がかわされた。

そのまま突撃して来る敵が、腕を剣状に変化させて構えの姿勢を取る。このまま行けば、間違いなく純はその攻撃を避ける事が出来ない。

（……！）

瞬間、弾かれたように機体が動いた。

背部スラスタが稼動し、高速で機体が落下速度を早める。リグノイドの攻撃が機体の上を通り過ぎ、スラスタの炎で炙られた敵が燃え上がった。

純は身体を捻ってその敵へと半身になり、バズーカを撃ち込むと更に落下速度を早めた。

吹き飛んだリグノイドの肉片と赤い飛沫が周囲に降り注ぐ。

着地の衝撃を全身のバネで受け流すかのような動きで相殺する。

その着地の感覚の鮮明さに、純は違和感を確信へと変えた。

（……俺はこの機体を扱える！）

自然と、口元に笑みが浮かぶ。

マインド・フォロウ・システムの試験機であると同時に、アサルト・アーマーの試作機。純の両親でさえも戦闘機動が出来なかった零号機のスラスタを、純は稼動させる事が出来た。

自身の身体の感覚はなくなっているが、その分アサルト・アーマーの操縦感覚は凄まじいまでに精度が良い。

集中攻撃から逃れるために直ぐに跳躍し、空中からバズーカとロケットを乱射する。地上にある建造物の事など無視し、純は武器を乱射していた。

着弾後に爆発するタイプの武器を両手に持っているためだ。その爆風で敵を巻き込む事が出来れば、それだけで効果があったと言える。

建物が倒壊し、その裏から敵が突撃して来る。バズーカを突き付けて引き金を引き、敵を撃破すると同時にその場から跳躍。周囲からの触手の集中攻撃をかわして、その中心部にロケットを撃ち込んで触手を吹き飛ばす。空中でスラスタを稼働させ、ほぼ直角に軌道を変えて着地し、バズーカを撃った。

放たれた弾丸が一体のリグノイドに命中し、爆発を起こす。同時に、視界の下部に赤い文字が現れた。

(弾切れ！)

その文字を読み取り、純はバズーカを投げ捨てた。背部のウエポン・ラックからショットライフルを外し、右手に握らせる。

リーダーに映し出された光点が近付いて来るのを確認し、その方向、右手側へとショットライフルを向けて引き金を引いた。散弾が放たれ、リグノイドの身体が吹き飛ぶ。

左側から向かって来る敵にロケットを撃ち込み、その残弾が無くなった事を確認して武器を投げ捨てる。すぐにウエポン・ラックからグレネードライフルを選択し、左手に握らせた。ロケットの爆発から逃れて突撃して来る敵にグレネード弾を撃ち込む。

(一体、どのくらいいるんだ……！)

内心で呻きながら、純は地を蹴った。空中へ逃れた純へ、アウトボディを装備したリグノイドが接近して来る。

背部スラスタを稼働させて更に上昇し、身体を捻るようにして向きを変えるとそのリグノイドへ右手のショットライフルの銃口を向けた。それが敵へと向けられた瞬間に発砲し、リグノイドを吹き飛ばす。

純が着地すると同時に、目の前に敵が着地した。振り上げられた剣状の腕を、右腕を横合いから打ち付けて力の向きを逸らして防ぐ。

「っ！」

瞬間、痛みを感じた。腕に何かがぶつかったような、小さな痛み。しかし、純はそれに驚きを感じていた。

本来、アサルト・アーマーで戦っていて痛みを感じる事はない。マインド・フォロウ・システムは搭乗者の感覚神経からの信号をアサルト・アーマーの動きにフィードバックさせる事で、機体を動かしている。だが、これは完全に受身のシステムだ。送られてくる信号だけを機体の動きに用いているだけで、機体が受けたダメージを搭乗者が感じるといふ事はない。

だが、現に、純はそれを感じた。装甲の内側に伝わった衝撃が痛みとして純に伝わったのだ。

(……まさか、これ……)

敵の攻撃を避けるために跳躍し、純は息を呑んだ。

この機体は、驚異的な機動力を持つ代わりに、受けたダメージを搭乗者にも伝えてしまう。だが、それだけ正確なシステムは、操縦に生じるタイムラグを限り無くゼロに近付けているのだ。

(……そんな事言っていられる状況じゃないな)

思い直し、着地した純は左右の手に握った武器を、周囲の敵に乱射した。

自ら敵の集中している場所に飛び込み、自分を中心に円を描くように回りながら武器を連射する事で、敵を一気に殲滅して行く。爆発物と散弾に敵が怯み、その隙を突いて攻撃を撃ち込んで行った。

(……くそっ、流石に……)

敵が多い。呼吸が乱れ始めているのを感じながらも、それを整えていられるだけの余裕はない。

かなりの数を倒したはずだが、敵が減ったようには感じない。まるでどこからか補充されているかのようだ。

「天風 純……！」
声に、敵の動きが止まる。純の視線が声の方へと向けられた。
そこには、斗雨也がいた。アウトターボデイの巨大な翼を背に生やし、崩れかけた建物の上に立っている。

「……」
純はそれに何も答えなかった。

斗雨也が純の名を知っていても不思議は無い。隆一から聞き出す事も、元クラスメイトや耕太から情報を引き出す事も出来る斗雨也ならば、純の名を知る事など容易い事だろう。

アウトターボデイの翼が斗雨也の身体を包み込むように前面に回され、同時にその形状を改変して行く。アサルト・アーマーを模した形状のアウトターボデイが斗雨也を包み込んだ瞬間、斗雨也が地を蹴った。

建物が崩れ落ちると同時に、周囲の敵が動く。

純は奥歯を噛み締め、地を蹴って空中へと逃れた。斗雨也だけがそれを追い掛けるように純へと突撃し、純は背部スラストを稼働させて直角に軌道を変えて斗雨也の突撃をかわす。同時にショットライフルを突き付けて発砲。

アウトターボデイが一部吹き飛ばされ、斗雨也がバランスを崩して落下する。

純が近くの建物に着地した瞬間、その建物が崩れた。足が床に着く前にスラストを使って再度空中へと上昇し、斗雨也へと視線を向けた。

「……！」
着地した斗雨也は、近くにいたリグノイドの身体をもぎ取って吸収し、破壊された部位を復元していた。身体を引き千切られて悶えるリグノイドを踏み潰して息の根を止め、斗雨也が別のリグノイドを両手に掴み着地した純へと突撃する。

「……貴様あーっ！」

叫び、純は散弾とグレネード弾を放つ。

斗雨也が、手に掴んでいたリグノイドを前面に放り投げ、それを盾にして純の攻撃を防いだ。その上で純に接近し、回し蹴りを放つ。「ぐあつ！」

腹部への衝撃が痛みとなって純に伝わる。そのまま蹴り飛ばされた機体が建物に激突し、壁を打ち抜いて地面に激突した。背中への痛みとして衝撃がフィードバックされ、意識が飛びそうになる。

「ぐ……あ……」

呻き、何とか身体を起こそうと手を着いた。砂埃が巻き上がり、視界を塞ぐ。

その瞬間、何か近くに着地する音が聞こえた。顔を上げれば、砂埃の向こうに斗雨也のシルエットが浮き上がっている。

「……終わりだな」

斗雨也の声が聞こえた。

純が動くよりも、この距離ならば斗雨也が動く方が早い。

「……それはどうか？」

どこからか聞こえた声が、斗雨也に答えた。

仲間の声ではない。しかし、純にとっては、懐かしい声。

「約束通り、会いに来たぜ、純」

視界に、純に背を向けて隆一が降り立つ。

「貴様……」

「あんたも哀れな奴だよな、何にも気付いちゃいないんだから」

隆一の言葉に、斗雨也が動いた。同時に、隆一も動いている。

純は、動けなかった。

アウターボディを用いていない隆一は、明らかに不利な状況にある。両腕を剣状に変化させた斗雨也の突撃を、隆一は斗雨也の背後に回り込むようにして回避した。その瞬発力は、斗雨也と同等か、それ以上のものだった。

斗雨也が宙返りするようにして隆一の背後に回ろうとするのに、隆一は横に跳んでそれを事前に防いでいる。

「かかれ！」

斗雨也が一括した瞬間、周囲にいたリグノイドが飛び出し、隆一へと突撃する。

隆一が視線を鋭く細め、眉間に皺を寄せた瞬間、突撃して来ていたリグノイドの動きが止まった。

「く…何だと…!!」

斗雨也が呻いた。

「アウターボディに集中力を裂いていない分、お前より俺の方が統制力は高いみたいだな……」

隆一の口元に小さく笑みが浮かぶ。

動きが止まっていたリグノイドが斗雨也へと振り返り、突撃していく。荒くなつた呼吸を整えながら隆一は純へと駆け寄って来た。

「おい、大丈夫か？」

「なんとか…それより……」

「ああ、俺は正真正銘あいつと同格のリグノイドだ。ただ、俺の方が少し特殊なみたいだけどな」

「特殊……?」

「まあ、詳しい話は落ち着いてからにしようぜ」

純の言葉を遮るように言い、隆一は背後へと視線を向ける。

その間に機体を立たせ、純も視線を向けた。

隆一が突撃させたリグノイドを全て打ち倒した斗雨也が、そこにはいた。黒い戦闘鎧がところどころ血で赤く染まっている。

「そうだな」

純は言い、両手の武器を斗雨也へと向け、引き金を引いた。

放たれる散弾とグレネードを盾に、隆一が駆け出す。拡散する散弾は、斗雨也の回避運動を大きなものにする。大きな動きは予測しやすく、そこを隆一が狙うのだ。自然と、その意思は隆一にも伝わったようだった。

リーダーを見て、隆一へと攻撃しようとしているであろう周囲の敵に散弾とグレネードを撃ち込み、純も隆一を追うようにしてスラストを稼動させる。

急激な加速により隆一と並んだ純は、散弾とグレネードを放ち、斗雨也を牽制する。回避行動を取る斗雨也に、隆一が攻撃を仕掛けた。

両腕を剣状に変化させ、斗雨也のアウトターボディを斬りつける。アウトターボディを削り取り、斗雨也の反撃から逃れて隆一が後方に跳躍した。それと入れ替わるように純が斗雨也に接近し、至近距離から散弾を撃ち込む。

吹き飛んだ斗雨也目掛けて、純は更にグレネード弾を撃ち込んだ。爆発が視界を塞ぎ、斗雨也からの反撃を予測して純は後方へと跳んで距離を取った。

「っ！」

爆発の中飛び出した無数の触手を、純と隆一は跳躍して逃れた。その爆発の中心部に立っていた斗雨也は、残ったアウトターボディを全て触手に変化させ、純と隆一へ攻撃を仕掛けて来た。

「ちっ……」

隆一が舌打ちし、向かって来る触手を剣状の両手で切り払う。

純はグレネードライフルを投げ捨て、マシンガンで左手に持たせると、弾丸をばら撒いて触手の攻撃を防いだ。武器を捨てた事で重量が軽くなり、機動力が上昇しているのが純にも判る。

着地し、マシンガンで周囲からの触手を打ち払い、斗雨也へとマシンガンを放つ。斗雨也はそれを回避し、空中からも触手を飛ばして来た。それを隆一が切り払い、着地した斗雨也に純が攻撃を加え、回避行動へ移る斗雨也へと隆一が攻撃を仕掛けた。

「なめるなあっ！」

斗雨也が叫び、触手を爆発させるかのようにしてアウトターボディの棘を周囲に撒き散らした。

咄嗟に横に跳んで建物の影に飛び込んだ純は、装甲を多少削られた程度だった。だが、建物の影から再度飛び出した時に見えた光景に純は言葉を失った。

アイデア

「！」

斗雨也に接近していた隆一は、斗雨也の攻撃をまともに浴びていた。

だが、同じリグノイドである隆一はそのアウターボディを取り込む事で攻撃を受け流している。しかし、そのために攻撃が途切れ、隙の生じた隆一へと斗雨也が剣状に変化させた腕を突き出していた。「ぐっ……！」

剣が隆一を貫き、鮮血が噴き出す。

斗雨也はそれを直ぐに引き抜き、回し蹴りを繰り出して隆一を弾き飛ばした。

「次は貴様だ」

斗雨也が撒き散らしたアウターボディを、集約させて球体を造り出し、そこから触手を純へと放つ。

「斗雨也あああああっ！」

叫び、純は地を蹴った。

視覚から色が失せ、聴覚から雑音が消え、本当に必要な白と黒、向かって来る音だけが認識される。失われた感覚を補うように反射速度が高められ、時間間隔が遅くなる。生存するために、最低限の感覚だけを残して余分な情報を遮断する事で、反射神経と知覚速度が高められているのだ。

純は弾の切れたショットライフルを投げ捨て、脚部にあるヒートダガーを掴む。

向かって来る触手の速度を遅く認識し、その隙間へと機体を滑らせ、それでも避け切れない触手をダガーで切り裂き、純は踏み込んだ。左右から向かって来る触手を前に踏み込んでかわし、背後からの音を聞いてそこからの攻撃を跳躍して避ける。スラストを稼働させてすぐさま着地し、上空へと向かって行った触手の下を擦り抜け、前方から迫る触手をダガーで切り裂く。

「ふっ……！」

息を吐き、斗雨也へ向けて機体を加速させ、逆手に握り締めたダガーを振り上げた純に、斗雨也自身が腕を触手へ変化させ、攻撃し

て来た。それを左腕のマシンガンで打ち払うと同時に斗雨也に銃弾を命中させて動きを止めた。そして、肉薄した純の右手のダガーが振り下ろされる。

斗雨也の頭に突き刺さったダガーは、そのままの速度で斗雨也を地面に叩き付けた。

頭が砕け、内容物が飛び散り、ダガーが地面に突き刺さる。

「……………」

感覚が戻り、軽い頭痛を覚え、純は呻き声を上げた。

よろけた身体を何とか支え、純は周囲に視線を向ける。

「そうだ、隆一っ！」

「……………どうやら、倒したみたいだな」

純の呼び掛けに、建物の瓦礫の中から隆一が起き上がった。

着ている服はところどころ破けていたが、隆一自身は何もなかったかのように歩いて来た。

リグノイドは頭部に受けたダメージ以外は自分で復元出来るのだ。先程の刺し傷ならば、たとえ貫通していたとしても直ぐに治せるのだろう。

レーザーに視線を移した純は、光点が移動しなくなっている事を確認した。司令塔がなくなつて困惑しているのだろう。もしくは、隆一が統制して動きを止めているのかもしれない。

「……………隆一」

コクピットハッチを開き、純は隆一に顔を見せた。

「久しぶり、純」

そう言つて歯を見せて笑う隆一は、以前と何も変わらない。

両腕の構造を改変させ、斗雨也と戦つたその姿は、確かに隆一がリグノイドであると純に認識させている。

「……………そっちはどうだ？」

「ん？ そうだな。まあまあつてところかな。でも、良くも悪くも充実してる」

隆一の問いに、純は苦笑して答えた。

戦わなければならぬ場所だとしても、純は以前感じていた違和感を感じない。地上にいた頃感じていた違和感は、純が他の人と根本的に違う事と、斗雨也の統制下になかった事が影響しているのだろう。

皆が純と同じ人間である地下では、違和感を感じない。皆が必死になって生きようとしている地下では、そんな違和感を抱いている暇などなかったのだ。

「…隆一は？」

「こつちもまあまああってとこだな。ただ、お前がいないと少し暇な時があるな」

苦笑し、肩を竦めて答える隆一に、純も苦笑を返した。

純も、隆一がいない事でどこか淋しさを感じている。

「……で、俺に話があるんだろ？」

「まあな」

純の言葉に、隆一は真剣な表情で頷いた。

「気付いてるかもしれないが、斗雨也で終わりじゃあないぜ」

「……やっぱりそうか」

隆一の言葉に、純は表情を引き締めた。

斗雨也の言動や行動には矛盾が見られた。それは、裏で誰かが斗雨也を操っていた存在がいるという事にも繋がる。

「けど、どういう事だ？ 一応あいつだって……」

「ああ、他者に干渉可能なりグノイドだ」

斗雨也は確かに他者のカルマを操る事が可能だった。

そんな存在が、誰かに操られたりするだろうか。裏で誰かが斗雨也を操っていたのだとすれば、その存在はどうやって斗雨也を操る事が出来たのだろうか。

「斗雨也の行動が矛盾してた事に気付いてから、色々調べてみたんだ。幸い、俺の方はその裏にいる奴からの干渉もされないらしくつてな」

「調べるって、どうやって？」

「自分がカルマに侵食されている事を知らずに研究している奴がいるんだ。その辺の意識を覗いたりして、何とか集めた情報だ」

「じゃあ、隆一が干渉されないってのは？」

「斗雨也のように矛盾してないだろ？ それに、自然発生した上位リグノイドなせいか、斗雨也からの干渉を受けなかった。あいつは自分の矛盾を指摘されても理解していないみたいだったしな」

純の言葉に隆一はすらすらと答えていく。

一度、斗雨也にその言動の矛盾を指摘した事があつたらしいが、それに対して斗雨也はただ怒りを見せただけで、その言葉を理解出来なかつたらしい。それは、斗雨也が自分の意識を制御し切れていないという事に他ならない。

その斗雨也を、隆一は他の何ものかに操られていると踏んだのだ。隆一がその裏にいる者からの干渉を受けなかつた証拠は、隆一が情報収集に成功したという事実だ。

「もし、俺が干渉を受けていたら、今まで隠していた存在を探る俺は、その裏にいる奴にとっては邪魔な存在のはずだろ？」

仮に、隆一が干渉を受けてしまうリグノイドならば、今までその存在を隠し続けて斗雨也にアイデアの視線を向けていた、裏の存在が隆一を止めていただろう。それも、自分から考え直したかのように不思議に思う事もなく、そうして逸らされた意識からはその考えが完全に追い出されるのだ。

斗雨也が、自分の矛盾を理解出来なかつたように。

「……それで、裏にいるのは、誰なんだ？」

息を呑み、純が問う。

「カルマって、なんて意味だか知ってるか？」

「いや、知らないけど……」

唐突に尋ねてきた隆一に、純は首を振った。

「俺も知らなくてな、調べたんだ。仏教用語で、業って意味の言葉だ。で、このカルマって名前は最初からついていた訳じゃないみたいなんだ」

「最初は、別の名前だったって事か？」

「まあ、その名前の事は重要じゃなくてな。大事なのは、この業つて言う意味の名前がどういいう経緯で付けられたか、だ」

「……まさか！」

「普通、自分達で開発した新技術にそんな意味を持たせたりはしない。で、このカルマって名前は、斗雨也が人類に反旗を翻したから付けられた訳でもない」

純に頷き、隆一は言った。

「斗雨也は、最初のリグノイドじゃない。その前に、失敗したリグノイドがいたんだ」

隆一が言う。

「そいつは、人間の身体という形状を保つ事が出来ず、廃棄された。だが、身体は保てなかったが、脳はそのままだった。その、崩れた身体を使って密かに脱走したそいつは、脳だけになるほどまでに強烈なナノマシンの作用で、同じ系統のナノマシンを自身の手足のように動かせるようになった」

語られた言葉に、純は背筋に寒気が走るのを感じていた。

初期段階のカルマは、身体構造を改変する力を持ちつつも、基本となる自身の身体を、元の人間の身体とは認めなかったのだ。生きるために不必要とされたその人間の身体から、別の構造を基本形としてしまったのだらう。そのために、その人物は失敗作と見做され、自身の身体に入り込んだナノマシンを操れるようになる前に破棄されてしまったのだ。

「そいつは、斗雨也に入り込んだカルマを操作して、斗雨也に干渉した。脳の一部にカルマを侵食させ、その部分から斗雨也を自分の手駒としたんだ」

純は言葉を失っていた。

裏にいる存在を感じてはいた。しかし、それほどまでの力を持つ存在だとまでは思わなかったのだ。せいぜい、斗雨也よりも一段階上、ぐらいにしか考えていなかったのだ。

だが、隆一が得た情報の、本当の敵はそれ以上の存在である事に間違いはない。

「三十年間、リグノイドを増やし続けたのも、そいつの仕業だ。理由は俺にも判らないけどな」

隆一が言う。

その視線が純から外れたのに気付き、純も隆一の視線を追った。

「……どうやら向こうも来たみたいだぜ。俺達が相当厄介らしいな」
口元に笑みを浮かべてはいたが、その隆一の瞳には余裕はない。

純の視界には、アウターボディの翼を持つ無数のリグノイドと、その中央に位置している黒い球体だった。その球体には大きな翼が三対生えている。

「……あいつを倒せば、戦いは終わるか？」

「さあな。ただ、ラスボスだってのは間違いなさそうだぜ」

余裕の無い笑みを浮かべたまま、視線を向ける隆一に純は同じ笑みを返した。

コクピット内に戻り、純は操縦システムを元に戻す。レーダーを見れば、地上にいたリグノイドが新手の方へと向かって行くのが確認出来る。

「あいつが、カルマだ」

隆一が言い、一歩踏み出すのと同時に純も、足を踏み出していた。カルマというのが、斗雨也を動かしていた本当のファースト・リグノイドの名前なのだろう。本名かどうかは判らないが、その呼び名は適切だと思えた。

純は隆一とほぼ同時に駆け出していた。スラストを用いて加速した純が前に飛び出し、空いている右手に背部のウェポン・ラックからアサルトライフルを握らせる。

もう、残りの武装は左右の手に握られているマシンガンとアサルトライフル、左足のヒートダガーのみとなっていた。予備弾倉はそれぞれ二つずつ持って来ているが、この状況ではそれも心許無い。

「純！ 聞こえるか？」

アイデア

突然、通信回線から雄の声が聞こえた。

地上の様子を皆、見ていたのだろう。純と隆一の会話も全て聞こえていたはずだ。

「何ですか？」

「今から、亜沙機を射出する。続いて同時に修理の完了した瑠那、暁彦、康祐、深玖の順に出撃させる」

「解りました」

雄の言葉に、純は小さな笑みを浮かべて答えた。

言い終わるや否や、レーダーに友軍機が出現した。地上に四箇所ある射出口それぞれから、一機ずつ友軍機が出現する。

現れた友軍は、すぐさま近くのリグノイドへと攻撃を始めた。敵を示すレーダーの光点が、友軍を示す光点の傍から消えて行く事からそれが解る。

「隆一、友軍が来た。少しは楽になるはずだ」

「俺が狙われなきゃいいけどな」

冗談めかして言った隆一の言葉に、純は苦笑を浮かべた。

リグノイドである隆一は、アイデアのレーダーでの識別では敵と変わらない。だが、基本的には視認して攻撃を行うアサルト・アーマーでは隆一を敵とさえ考えなければ攻撃をする事はないだろう。

問題は純以外で隆一を味方と認識している者がいるかどうかだ。

「……来るぞ！」

隆一が告げた。

瞬間、上空にいた翼を持つリグノイド達が一斉に急降下を始めた。同時に、カルマに変化が現れる。

「……！」

球形の中央に横一筋の切れ目が入ったかと思った瞬間、その切れ目が上下に開き、目が現れた。

大きな眼球が純と隆一を見下ろし、その球形の身体から無数の触手が放たれる。その触手は、急降下してくるリグノイドを避け、純と隆一へと降り注ぐ。

アサルトライフルとマシンガンを乱射し、触手の攻撃を防ぎながら純は上空から突撃して来るリグノイドの攻撃をかわして行った。ロックオンが搭乗者の意思で可能なマインド・フォロウ・システムだからこそ出来る動きだ。

「……くっ！」

歯を食い縛り、激しい触手の雨の中を純は駆け抜けた。触手が装甲を掠め、削って行く。

触手による攻撃は全てリグノイドを避けるようにして純と隆一に降り注いでいる。その中で、リグノイドが攻撃を加えて来るのだ。スラストをフル稼働させて複雑に軌道を変えながら、向かって来る触手を撃ち落とし、純は地を蹴って跳躍した。空中でも軌道を変え、リグノイドと触手の攻撃をかわしつつ出来る限りそれを迎撃し、純はカルマの正面数メートルの距離まで辿り着いた。

「何っ！」

眼球から触手が飛び出して来た事に、純の反応が遅れた。

視認するという事に用いる眼球を攻撃に使うとは思っていなかったためだ。だが、その触手は横合いから飛来した散弾とグレネード弾の爆発に阻まれて純には届かない。

「ここまで来ておいて油断してんなよ！」

康祐と瑠那が合流し、地上のリグノイドに攻撃を始めていた。

スラスト機動により空中で一度距離を取った上で再度上昇し、純はカルマの上に回り込む。放たれる触手をマシンガンとアサルトライフルで迎撃しカルマの表面に弾丸を撃ち込んだ。

だが、カルマを覆うアウターボディを削ろうと弾丸を撃ち込めば、それだけ迎撃の手数が減る事になる。両手で迎撃出来ていた触手を迎撃し切れず、回避に注意を裂いたために攻撃の手が止まる。削られた部分を、カルマは周囲のアウターボディを集めて穴を塞いだ。

「くそっ！」

呻き、純は触手の攻撃を避けながら地上に降り立った。

周囲のリグノイドは残り少なくなっていたが、死体がない。レー

ダー上の光点としては減っていても、死体がないのは不自然に思えた。

と、隆一がリグノイドを一体仕留めるのが視界に入った。剣状にした腕をリグノイドの頭に横合いから叩き付け、脳のある場所を精確に切り裂いている。切り裂かれたリグノイドが地面に落ちるよりも早く、その身体に触手が突き刺さり、消滅した。

「まさか！」

それを見た純は悟った。

カルマは、死んだリグノイドの身体をアウターボディとして取り込み、純達の攻撃で破壊されたアウターボディを補充しているのだ。つまり、カルマと直接戦うためには、この場にいるリグノイドを全て倒した上でカルマと向き合わなければならない。カルマ自身の攻撃も厄介だが、リグノイドを減らして敵の攻撃の手数と共にアウターボディの補充源を叩いておかなければ、戦うだけ無駄だ。

リグノイドへと攻撃目標を変更した純は、カルマの触手を避けながらリグノイドを攻撃し始めた。

純は弾切れを起こした二つの武器の弾倉を取り外す。腰部後ろのマガジン・ラックにある弾倉をそれぞれ切り離し、身体を回転させるようにして落下中の弾倉を両手の武装に叩き込む。そのまま銃口をリグノイドに合わせ、純は引き金を引いた。フルオートで連射される弾丸を浴びてリグノイドが吹き飛び、リーダーからその光点が消えると同時にカルマがその死体を吸収する。

そうして、リーダーからリグノイドの光点は全て消え、残るはカルマだけとなった。

「……愚かな」

その場にいる誰のものでもない声がした。

いつの間にか純と隆一を中心に主力が集まっている。隆一が敵と見做されていない事に、順は内心で安堵する。

声を発したのがカルマだと、誰もが判断していた。

「……何が愚かだったんだ？」

康祐が言い返す。その全身に搭載されている銃口は全てカルマを狙っていた。

「解るように説明すれば、リグノイドとなる事を拒んでいる事、だ」
「どうして、それが愚かな事なのよ!」

カルマの言葉に、深玖が叫んだ。

「人類は進化せねばならない。今のままでは、人類は確実に滅ぶ」
「そんな事が貴様に判るつてのか?」

康祐の言葉に、カルマがその目を閉じる。

まるで一度呼吸でもするかのように間を置き、目が開かれた。

「解るとも。人類は無益な争いを続けているのは、今までの歴史からも知っているだろう。人種や国家間の問題として、戦争やテロが無くなる事はなかった。このまま、そのような争いが続いていけば、人類が滅んでしまうのは目に見えている」

「……それが、リグノイドになる事と何の関係がある?」

瑠那が告げた言葉に、カルマはその巨大な瞳を瑠那の機体へと向けた。

「リグノイドになる事は、人類が私の統制下に入る事を意味する。人類が争いを続けるのは、皆が別々の事を考え過ぎ、相手を理解しようとしないう者が多いからに他ならない。ならば、全人類が共通の意識を持てば良い」

カルマの告げる言葉は、正論ではあった。

人類が争うのは、互いの主張を認められないからだ。どちらかが間違いで、どちらかが正しいと、はっきりと言える場合もあるが、そうでない時もある。そんな時、相手の主張を受け入れられないからこそ衝突が起きるのだ。

争いを止めるためには、互いの主張を受け入れ、認め合うしかない。しかし、それは非常に難しい事だ。人間は自分自身さえも完全に理解する事は出来ないのだから。

「全人類が私の統制下に入れば、争う事のない平和な世界を造る事が出来る。人類が生き延びるには、それが必要だ」

「未来の事が解ってたまるか！」

吐き捨てるように告げた康祐に、カルマはその瞳を向けた。

「解るのだ、私には。ファースト・リグノイドである私に用いられたナノマシンは、非常に高性能だったのだ。そのために私は人間の身体を失ってしまったが、変わりにあらゆる演算が可能となった。この意味が解るかね？」

「……シミュレート出来る、という事か？」

「そう、ありとあらゆる可能性を考慮した上での未来予測シミュレートが可能なのだ。その結果、人類は滅ぶという結果が出た」

暁彦の言葉に、カルマは頷くかのように目を閉じ、言った。

その言葉に、誰もが言葉を返せなかった。

カルマがリグノイドを増やしていたのは、平和な世界を造るためだったという事もある。しかし、人類が滅ぶという言葉も少なからず衝撃を与えていただろう。

だが、それは誰でも容易に考える事が出来る未来だ。

「……へえ、あんたが世界を統制すれば平和になるって言うのか？」

沈黙を破ったのは隆一だった。

「……」

カルマは隆一へ視線を向け、沈黙で答える。

「もう、解ってるんじゃないのか？ あんたじゃそれは出来ないって事を」

「……どういう、事？」

隆一の言葉に、深玖が口を挟んだ。

「隆一は、あいつの統制を受け付けないリグノイドだ。それが自然発生するなら、あいつには統制出来ない者が増える事になる」

そうなればカルマには世界を統制出来ない、隆一の変わりに、純が答えた。

カルマに統制出来ないリグノイドが現れば、統制されているリグノイドと自分達が違う事にはいずれ気付くだろう。そして、それはいつかそのリグノイド達がカルマに反旗を翻す可能性を秘めている

るのだ。

それではカルマの言う平和な世界は生まれえない。カルマの言う世界は、カルマが統制する世界でなければならぬのだ。もし、隆一のようなカルマの統制を受け付けられない者が現れれば、カルマが統制する世界は崩れ去るのだから。

「俺一人排除したって意味のない事は解ってるよな？」

隆一がカルマへと言葉を投げる。

「ここに隆一がいる事で、隆一のような者が現れる可能性はゼロじゃない。ゼロじゃない確立なら、あなたにはその未来予測シミュレーターが可能はずだ」

追い討ちをかけるかのように、純は告げた。

隆一のようなリグノイドが発生する可能性がゼロでない限り、カルマの言う平和は訪れないだろう。

「……私の考えが間違っているとしても言うつもりか？」

「あなたの言う事だって正しいと思うさ。けど、それを拒む者だっているんだ」

隆一は純達のアサルト・アーマーを見回すようにして言った。

情報統制をする事で無意識のうちに相手と衝突する事がなくなる世界というのも、実現すれば平和な世界になるだろう。全人類がリグノイドになる事でそれが可能ならば、悪い話ではない。

しかし、隆一のような統制を受けないリグノイドが生じるといふ事は、その世界が訪れたとしても、続かない事を表している。それは、カルマが考えた理想の世界が来ない今と同じだ。

「変わらない事を望むのが正しいとは思えん」

「……そんな事は望んじやいない」

カルマの言葉に、純は告げる。

「何……？」

アイデア

「解ってるはずだろ。変化した状況に俺達なりに対応した結果が今の俺達だ。変化に対応する力は、生物全てが持つ能力なんだ」

純は一步前に進み出るようにして、カルマに言う。

「あんたは、それを否定する気か？ 滅ぶかもしれないという状況に、俺達は対応して、今、まだ残っているんだ」

アイデアという組織を作り、地下で生活を続ける人間は、地上がリグノイドに埋め尽くされた状態でも未だに残っている。決して諦める事なく、リグノイドに必死に抵抗し、生きる場所を確保し続けて来たのだ。

「結局、あんたが導き出した未来予測は、リグノイドが現れる前と変わらない」

「あんたは、自分という存在がなくなるのが怖かったんだろ。自分が人類を統制する神になれば、あんたは自分の存在を確認できる」

「色んな理屈を付けて正当化したところで、あんたは、リグノイドと地下の人間達との新たな戦いを生み出しただけだ」

「俺やナノマシンの持たない人間を、統制出来ないからとイレギュラーとして処理するなら、あんたに反抗する奴はいくらでも現れる」

純と隆一が交互に告げる。

その言葉に、カルマが震えた。

「……なら、私はどうすれば良いと言うのだ！ 私は既にここまで動かしてしまったのだ。お前達のような者が現れる事も解っていたが、それでも私の演算では障害にはならないと出たのだ」

苦悩するカルマの言葉に、純は目を細めた。

動かしてしまった、ナノマシンの拡散という流れはもはやカルマにも止められないのだろう。自己増殖し、生殖細胞にまで入り込んでしまうナノマシンは、放って置くだけで遺伝して行く。それに気付いたとしても、そのナノマシンを排除する方法はない。人間を構成する六十億を超える細胞の中からナノマシンだけを取り除く等、不可能だ。

「……まず、貴様は消える」

瑠那の鋭い言葉がカルマに投げられた。

「貴様が望む平和な世界を作り出すために犠牲になった者がいる限り、貴様に平和な世界は作れない。思い上がるな」

敵意の込められた瑠那の言葉に、カルマはまた震えた。

「犠牲の上に成り立つ平和など、私は認めない……！」
瑠那の声が響いた。

「そうだな、今まで俺達を苦しめて来た元凶と今更和解なんて出来ねえよな」

溜め息混じりの康祐の声が瑠那に続いた。

「リグノイドもお前達に殺された者が多くいるのだぞ？」

「それはお前がリグノイドにそうさせたからだだろう」

カルマの反論を暁彦は一蹴した。

「まあ、死ねば悩む事もなくなるさ」

隆一の言葉に、カルマの目が見開かれた。

「私とて、死にたくはない！ 私なりに変化した状況に対応して来たのだ！」

言い放ち、カルマがその身体から無数の触手を放った。

瞬間的に全員が別々の方向へ散開し、触手の一撃を回避する。そうして、各々がカルマへと攻撃を開始していた。

純は両手に持っている武器の銃口をカルマに向け、触手の中をすり抜けるようにしてかわしながらフルオートで発砲した。カルマの表面に着弾し、炸裂弾が軽い爆発を起こす。しかし、カルマの身体を形成するアウターボディは破壊された部位を直ぐに復元してしまふ。ダメージが全く無い訳ではない。アウターボディといえど無限ではなく、爆破されたナノマシンは修復出来ない。アウターボディの装甲を削る事は出来ても、カルマの中心部である脳に攻撃を到達させない限り、倒す事は出来ないのだ。

横に跳んで攻撃を回避したところへ触手が放たれる。スラストを稼動させて避け、着地を狙った一撃を両手の武器で撃墜し、純はカルマへと視線を向けた。

ほぼ絶え間なく攻撃に晒されているはずのカルマは、攻撃を受けるのを無視して反撃を行って来る。分厚いアウターボディにより守られているからこそ出来る攻撃だ。純達のように、回避しなければ

戦闘続行が出来ない訳ではないのだ。

(……………どうすれば倒せる……………?)

攻撃を避けながら、純は考える。

アウターボディを削るだけでは、純達の消耗の方が早い。カルマを倒すためには、アウターボディに包まれたカルマ自身の脳を攻撃するしかない。しかし、現状ではそれをする前に武装の弾薬が切れ、搭乗者も疲弊してしまう。それは全員が感じているはずだ。

(……なら……………!)

純は意を決し、通信回線を開いた。

「一点に攻撃を集中しないと駄目だ！ あいつがダメージ箇所の穴を塞ぐよりも早く攻撃を撃ち込み続けるんだ！」

「やっぱり、それしかねえよな……………!」

その純の言葉に、康祐が答えた。

「……………でも、どうやって？」

亜沙が問い掛ける。

一点を集中して攻撃をするためには、全員が同じ場所へ同じ方向から攻撃をする必要があるのだ。しかし、それをすれば全員の回避可能範囲が限定され、カルマの的となってしまう。

「俺がなんとかする」

純はそう答えた。

「……………本当だな？」

瑠那の言葉に、純は頷いた。

全員が無言で一箇所に集まって行く。その間も回避を続けながら、純は仲間が固まった場所から少し前に、一人だけ飛び出した。

「純、何をやる気だ？」

その隣に並ぶように駆け寄って来た隆一が尋ねた。

アサルト・アーマーに乗っていない隆一には、純達の会話は聞こえなかったのだ。その意図を確認するために駆け寄って来たのだから。

「一点に集中攻撃をかける。その間、俺があいつの攻撃を全て防ぐ」

「一人で出来ると思ってるのか？」

「お前が手伝ってくれるんだろ？」

その言葉に、隆一は苦笑を浮かべた。

「いいさ、付き合っただけだよ」

溜め息混じりの隆一の言葉に、純は笑みが浮かぶのを感じていた。全員が一点に攻撃を開始し、その真意を理解したカルマが触手を広範囲に放った。

流石に高性能だというだけあって、カルマの攻撃は的確に急所を突いて来る。直進するものと、迂回して来るものの二種類を多数放ち、攻撃を受けるであろう前面にアウトターボデイを集めて装甲を厚くしていた。

乾いた唇を舐め、純は両手の武器を照準を定めずに乱射する。

無数の触手に対しては、それだけで十分に弾幕を張れる。たとえそれが命中せずとも、触手の軌道をずらすぐらいの効果は期待出来るからだ。

その純の背後では、隆一両腕を触手に変換させて対応している。自分の身体を使って無数の触手を放ち、カルマの触手に突き刺して引き千切り、カルマの制御を離れたアウトターボデイを自らの身体の一部に取り込んでそれを触手に変換して再利用していた。

純と隆一の頭上を、無数の凄まじい数の銃弾がカルマへと向かって行くのが見えた。それに混じってミサイルやグレネード弾等も放たれている。

それらは全てカルマに命中し、前面に集められたアウトターボデイを削って行く。

「ぐっ！」

開いたままの通信回線から暁彦の呻き声が聞こえた。

純と隆一が防ぎきれなかった触手が暁彦の機体に命中したのだろう。背後の事に純は気を回しているだけの余裕はなかった。純自身の機体も、いくつもの触手が装甲を掠めている。

「うあっ！」

「きゃあつ！」

康祐の声と深玖の声が聞こえた。

純は奥歯を噛み締め、銃弾を放ち続ける。撃ち漏らしが生じたのは、全て純の責任になる。

そして、獣の咆哮のようなものが聞こえたかと思った瞬間、カルマが突撃して来た。それはカルマの咆哮だったのだろう。アウターボディを削られ、このままでは負けると判断したカルマの強行手段だったに違いない。

突撃して来たカルマは、触手を放ち続けたまま、翼に用いていたアウターボディ二対分を攻撃と防御に回していた。

瞬間、純は背中を突き飛ばされていた。

「っ！」

背後から突き飛ばされた純の頭上を、カルマが通過する。その直後に轟音が辺りに響き、振動が地面を揺らした。

直ぐに起き上がった純は背後を振り返って言葉を失った。

辺りにはアウターボディの破片が散らばり、弾き飛ばされたアサルト・アーマーが建物に減り込むようにして沈黙している。康祐の機体は瓦礫に埋まるようにして機能停止しており、通信が途絶していた。暁彦の期待はアウターボディに押し潰され、破片の間から機体が覗いており、やはり通信は途絶している。

残っていたのは、比較的外側にいた亜沙と、咄嗟に回避行動を取ったのだろう瑠那が、建物に機体を半分程埋めてはいたが、動いていた。深玖は、康祐の機体の隣に座り込んでおり、無事なようだ。

「……コースケ……」

深玖が、呆然としたように呟く。

「……大丈夫だ、生きてる……心配するな……」

小さな呻き声と共に、アサルト・アーマーのコクピットから康祐が這い出して来た。その、傷だらけの康祐を深玖が手に乗せる。

暁彦も、どうにかコクピットから這い出しているのが見えた。それを、近くにいた深玖が康祐同様手に乗せた。

「……何が、起きたの…?」

亜沙が機体を建物から引き出した。

「隆一、どこだ!」

その事の気付いた時、純は叫んでいた。

純の背後にいたのは隆一だ。純を突き飛ばしたのは隆一以外には考えられない。

「ここにいる……」

アウターボディの中から起き上がった隆一を見て、純は安堵の息を漏らした。

「……奴は、どこだ?」

瑠那の言葉に、純は周囲を見回した。

今の突撃で死亡したという可能性がない訳ではないが、生きている可能性も低くない。その死を確認しなければ安心出来ないのは事実だ。

「純、カルマはそいつだ!」

聞こえた声に、純は耳を疑った。

そこには隆一がいた。アウターボディの破片の中から立ち上がった隆一が、その場にいるもう一人の自分を指差している。

「騙されるな、奴だ!」

全く同じ声、全く同じ口調でもう一人の隆一が答える。服の破け方まで同じだった。

後から起き上がった隆一が、地を蹴り、先に起き上がった隆一に飛び掛かった。二人の隆一の格闘戦に、その場にいる誰もが動けずにいた。

剣状にした腕をぶつけ合い、蹴りを放っては避けあい、背中から放った触手を同じようにして迎撃し合い、全く同じように攻撃を続ける。だが、それは長くは続かなかつた。一方がもう一方の攻撃を凌いで、一撃を決めたのだ。剣状にした腕を弾き、懐に入り込んだ隆一が、対する隆一の攻撃を防ぐために全身から触手を放ち、腹部に腕を突き立てたのだ。

「ぐうっ……！」

呻き声を漏らしながらも、攻撃を受けた隆一も、両腕から針のよ
うなものを放ち、相手に攻撃を命中させる。

互いに互いの腹を蹴飛ばし合い、倒れた。

「……どういう事？」

震えた声で、亜沙が呟いた。

「……どっちかが本物の隆一で、どっちかがカルマって事だろ」

純は、震えそうになる声を抑えて告げた。

もう、どちらが先に起き上がった隆一なのかすら判らなくなっ
ている。

「……それがお前に判るのか？」

荒い呼吸を抑えるようにして、瑠那が問う。

純は、答えなかった。

カルマが、人間の身体を保てなかったとはいえ、それはまだナノ
マシンを操れるようにはなっていないかったためだ。仮に、今でもそ
うだとしても、短時間ならば人間の身体を保つ事が出来るという事
だろう。

「隆一……」

呟き、倒れたままの二人の隆一に、純は歩み寄った。

「純、後ろっ！」

亜沙の声に、純は咄嗟に横に跳んだ。

背後のアウトターボディの破片から伸びた触手が純の左肩をもぎ取
った。激痛が純の脳に直接伝わり、呻き声が漏れる。

二人の隆一が起き上がり、哄笑を響かせた。そのどちらの目つき
も、純の知っている隆一でない事が一目で解った。

「……本物の隆一なら、ここにいる」

そういつて一方の隆一が掌を上を持ち上げるようにした瞬間、そ
の背後のアウトターボディの中から首を触手で絞められた隆一が引き
摺り出された。

「……純……悪い……」

苦しげに呟く声と、その瞳に、純はそれが本物だと確信する。
「もう、これで終わりにしよう」

言い、カルマが掌を握り締めた瞬間、触手が締めまり、隆一の首が千切れた。

その直後、触手が刃物に変化し、隆一の首を空中で縦に両断した。
「！」

全員が息を呑んだ。

アウターボディが集結して行く中、瑠那と亜沙が飛び出した。その二体を、地面に広がるアウターボディから伸びた触手が背後から襲った。

「ちっ！」

瑠那の機体が、亜沙の機体を蹴飛ばした。

瞬間、瑠那の機体に触手が突き刺さる。四肢を引き千切り、触手は瑠那機を投げ捨てた。残ったコクピットへと向けられた触手を、亜沙機が撃ち落とす。

カルマの狙いが瑠那から亜沙に移り、無数の触手が亜沙の周囲かわ湧き出し、襲った。

「きゃああっ！」

悲鳴が響く。

亜沙の機体がカルマの触手によって解体されて行く。

目を閉じた純の瞼から、涙が滲んだ。機械の軋む音、金属の拉げる音、それらに含まれる雑音が純の耳から遠ざかって行く。目を開いた時、その視界からは色が消えていた。時間間隔が引き伸ばされた意識の中で、純は駆け出していた。

残っている右手のアサルトライフルの引き金を引き、亜沙へと攻撃を加えている触手を全て撃ち落とす。崩れ落ちそうになった亜沙の機体を、純はアサルトライフルを投げ捨てて抱き上げた。

「……あ……う……」

呻き声を上げる亜沙の機体を優しく下ろし、純は駆け出す。

（失くしてからじゃ遅過ぎるのに……俺は……っ！）

また、失くしてしまうところだった。

左足のラックに納められているヒートダガーを右手で掴み、引き抜くと、二人いる隆一の似姿へと突撃した。その二人が左右に別れるところで、純は一方にダガーを投げ付け、もう一方に飛び掛った。「純、使つて！」

深玖の声に、純は視線を一瞬だけ向け、飛来したライフルを受け取った。空中でスラスト機動をかけて回り込み、純は引き金を引いた。

一方のカルマにはダガーが命中し、もう一方のカルマの頭部はライフルで撃ち抜く。

アウターボディが蠢くのを見て取り、純はすぐさま康祐の機体の傍に移動すると、その大破した機体から火炎放射器を掴み、それをアウターボディへと向け、放射した。紅い炎がナノマシンを焼き、その炎から逃れるように飛び出したアウターボディで出来た球体を、純は既に持ち替え直していたライフルで撃ち抜いた。

空中で爆発するように破裂したアウターボディの中には、確かにカルマの脳があった。

「……………」

亜沙の声が聞こえた時には、純の感覚は元に戻っていた。

よるめき、機体がライフルを取り落とす。両膝をついた純は、自然と残った右手で身体を支えていた。

（ 耕太も、隆一も助けられなかった …… ）
奥歯が鳴る。

視界が滲み、涙が流れ落ちる。身体の奥から込み上げてくる感情を抑え切れず、純は、ただ叫んだ。

「 あああああああああ …… ！」

その場には、純の叫び声だけが響いていた。

終章 「その後の夜」

終章 「その後の夜」

今、純の視界には、暗い夜空が広がっている。風の心地良い夜だった。

戦闘が終わった後、純達は一度地下に戻って手当てを受けた。実際に被弾した訳ではない純だったが、無理な動きをし過ぎたためか、肋骨が二本折れ、両肩が脱臼していた。今も服の下には包帯が巻かれている。

斗雨也は死に、それを操っていたカルマも死んだ。

リグノイドを統制する者が消えた事で、雄を始めとする地下の間達は喜び、皆が安心を得た。

純達の被害が少ない訳ではないが、それでもようやく勝ち取った勝利を皆が噛み締めている。

そんな中、純だけは素直に喜べずにいた。

戦闘でボロボロになったアサルト・アーマー零号機の上に、純は腰を下ろしていた。片腕を失くし、装甲もかなり削り取られた機体は、その場で座り込むような姿勢で停止している。その機体の肩の上に、純は座り込んでいた。

「純……」

掛けられた声に、純は何も答えなかった。

それが誰のものなのかは、直ぐに判る。亜沙だ。

「……やっぱり、外にいたのね」

アサルト・アーマーの右腕に手を置き、純を見上げるようにして亜沙が呟いた。

「……ああ」

一言だけ答え、純はアサルト・アーマーの肩から腕を伝って地面に降りた。

戦闘後、その場にあつたアウターボディは全て一箇所に集められ、焼却処分がなされている。その際、カルマの死亡確認は勿論の事、隆一の死亡も確認された。その場にあつたアウターボディの中から、カルマのものではない脳が発見されたためである。

「やっぱり、隆一…君の事？」

「それもある」

亜沙の問いに、純は静かに答えた。

「色々、考えてたんだ。隆一の事だけじゃなくて、リグノイドの事も」

純は言い、アサルト・アーマーの機体に背を向けて両肘をつき、夜空を見上げる。

「隆一の事は、覚悟してた。俺の義兄弟も、育ての親も、俺を殺そうとして来た。育ての親は、俺が討つたけどな」

遠くを見つめるように目を細め、純は言った。

「だから、隆一が死ぬかもしれない事は覚悟してたんだ」

純以外の者から見れば、隆一もリグノイドと変わらない。ならば、純以外の誰かが隆一を討っていた可能性もあるのだ。それだけではなく、隆一が耕太のように最初から操られていたという可能性も、否定出来なかった。純でさえ、隆一が本当にそのままの隆一でいる事を確信する事は出来なかったのだから。

「もともと、あの後、隆一とは別れなきやならなかったしね」

無理に笑みを作り、純は言った。

たとえ、その場で協力してくれたからといつても、地下にリグノイドを入れる事は出来ないだろう。隆一のようなリグノイドが自然発生したように、隆一のような者ですら操れるリグノイドが発生する可能性も否定出来ないのだ。やはり、純は地下で、隆一は地上で暮らすしかない。

「流石に、悲しいけどね」

表情にその感情が出ている事を感じながら、純は無理に笑みを浮かべた。

「過去はどうにもならない。無理に慰めてくれなくていいよ」
純は、視線を亜沙に向ける。

「カルマ、業つてという言葉の意味はね、現在の環境を決定し、未来の運命を定めるものとしての善悪の行為の事。狭い意味では、悪い行為を指すわ」

亜沙は純に並ぶように近寄り、告げた。

「私達の組織、アイデアっていう言葉の意味は、そのものをそのものたらしめる根拠になる真の實在」

夜空を見上げるようにして言う亜沙の言葉を、純はただ黙って聞いていた。

「結局、人類は同じ人間と戦っていたみたい……」

亜沙の言葉に、純は視線を空へと向ける。

人類が作り出してしまったカルマ、ナノマシンは、その時点で未来の方向を示していた。それが善悪かどうかは関係なく、リグノイドという人類の増殖と、地下に逃げ延びた人類との分かれ道を生じさせた。

地下に逃げ延びた人類達は、ナノマシンに侵食されていない、本来の人間達である事を確認するかのようになり、アイデアを作り、抵抗した。

「そつだな、何も変わっちゃいないな……」

呟き、純は息を吐いた。

結局、地下に逃れた人類はナノマシンを得た人間と戦っていたのだ。純は、そう判断を下した。

何も変わってはいない。カルマが言った、人間達が同じ種族の中で争い続けるのを止めさせるために、人類をリグノイドとし、それを統制するという事は、それを拒んだアイデアとの争いを生んだ。

「私達、滅びるのかしら……」

カルマの告げた事は、間違いではないだろう。

「……かもしれない」

純は隣に立つ亜沙に視線を向け、答えた。

「でも、俺達はそれに抗い続けなきゃならないんだ」

その言葉に、亜沙が頷いた。

いずれ、人類が滅びる時が来るかもしれない。しかし、その時を目の前にしても、人類はそれに抗い続けるだろう。

「それに、大和さんや隆一に助けられたんだ。俺は、その分も生きないとな」

そう言っただけを浮かべた純に、亜沙も優しげな笑みを返した。

「……これから、どうなるかしら」

亜沙の口から出た言葉に、純は視線を夜空へと向けた。

「結局、人間同士なんだから、共存も出来るのかもしれない。リグノイドのナノマシンを排除する方法が出来るかもしれないし、全人類がリグノイドとなる可能性もある。これから先どうなるかなんて分からないな、俺には」

カルマが倒れ、リグノイドには今、地下の人間達を攻撃する必要はなくなっている。

共存出来る可能性も、ゼロではない。だが、それはゼロでないだけで、他の道へと進んでしまう事だってあるのだ。未来は無数に存在する。

「……ただ、俺はもう失いたくない」

自然と、亜沙と視線が合った。

家族、親友を始めとして、大和も、耕太も死んでしまった。これ以上、身近な人を失いたくなかった。たとえそのために他のものを奪う事になったとしても。

「……私だってそう。あなたまでいなくなってしまうたら、私には頼るものがなくなってしまっわ」

俯き、亜沙が言う。

地上で暮らしていた亜沙には、地下で頼れるものがない。

今まで心を閉ざしていた亜沙には、康祐や深玖達にすら本当の自分を晒していない。それを晒す事が出来た人物の一人、大和はもういないのだ。

同じ、地上で暮らしていた事のある純しか、亜沙の孤独を理解してやれる者はいない。

「だから、傍にいて欲しいの……」

告げられた言葉に、純は身体が熱くなるのを感じた。

「……純、私！」

顔を上げた亜沙の唇を、純は目を閉じ、自分の唇で塞いだ。亜沙の言葉が途切れる。

酷く緊張していたにも関わらずその動作は自然に出来ていた。いや、ほぼ無意識のうちに行動していた。心臓が身体を揺さぶっているのかと錯覚する程に大きく脈打っているのが解る。数秒の口付けの後、純は亜沙から顔を離した。

目を丸くしている亜沙から、純は照れた笑みを浮かべて顔を背ける。

「返事はそれでいいよね？」

務めて明るいい声で純は言った。

自分でも、声が微妙に引き攣っているのが判る。顔が熱くなるのを自覚して、純は亜沙に背を向け、背伸びをして恥ずかしさを誤魔化した。耳まで熱い。

「……駄目、いつか、自分の口でも答えて」

ようやく振り返った純に、亜沙は笑みを浮かべて告げた。その頬が朱色に染まっているのが判る。

「解った、約束するよ」

その亜沙に、純も笑みを浮かべて答えた。

「さあ、戻ろうか」

大きく息を吸い、それを吐き出して純は言った。

「ええ」

微笑んで答える亜沙が、純の隣に寄り添う。

自然と互いに肩を抱いて、二人は歩き出した。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2418a/>

アイデア

2008年11月7日07時22分発行